
妖怪ピオトープ管理士 園野あおい2「人魚ピオトープ」

はくたく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妖怪ビオトープ管理士 圓野あおい2「人魚ビオトープ」

【NNコード】

N5477W

【作者名】

はぐたく

【あらすじ】

小学校ビオトープでのメダカの変死事件から、あおい達は、町に潜む強大な妖怪と戦う事になっていく。

次々に倒れる社員達。あおいの会社、トープスが存続の危機を迎える中、あおいの取った決断とは。

妖怪ビオトープ管理士の第2話。

- * 1話を読まなくても、まあまあ楽しめると思います。
- * 書き進むにつれて、伝奇系の話になりつつあります。相変わらず、

生物うんちくがウザイかも知れませんが、そういうのを読み飛ばせば、フツーの妖怪伝奇モノです。ライトノベルっぽい文章はどうしても書けないので、そういうのを期待している方は「めんなさい」。

§プロローグ 葉子♪妖少女（前書き）

妖怪ビオトープ管理士 圓野あおいの第2話です。
文体や書き方を見直してみました。

§プロローグ 葉子VS妖少女

§プロローグ 葉子VS妖少女

「これだけ言つても……ダメなのかい？」

稻成葉子は、田の前に立つ、白装束の少女に、鋭い視線を向けた。
夜。

池の畔である。

その小さな池の周りに、大きな岩が積まれている。
少し大げさな、ロックガーデンといった風情だ。
大きな木はなく、池の縁にはセキショウが、陸地には背の低いサ
ツキとカエデが植わっている。

いわゆる「ビオトープ」と、呼ばれるものと似ているが、どこか
おかしい。

植物も、石も、水辺も、微妙に自然のものとは違う。

配置や構造、材質に、人工的な匂いが漂っているのだ。
ずっと下の方から、車の走る音が響いている。
気づけば、遠くの夜景も、かなり下の方で光っていた。
どうやらここは屋上に、それも高層ビルの上に、庭園として作ら
れた空間であるらしい。

「流れて行きなよ。

なにも、そうまでして、ここにこだわる必要はないんじゃないの
？」

葉子は重ねて少女に問いかけた。

長い黒髪が、ほつれて汗で頬にへばりつき、肩を押さえる手から

血が滴る。

少女は答えない。

十歳前後のようすに見えるその少女は、無言のまま、小さな池の縁に立ち、無表情に葉子を見つめているだけだ。

よく見るとほんの少し燐光を放ち、宙に浮いているようすに見えた。

「つあつー。」

突然、苦痛の叫びが漏れ、葉子は片膝をついてしゃがんだ。

少女の手から青白い光が走り、葉子の左足を貫いたのだ。
紺のタイトスカートをはいた太ももに、どす黒い血の染みが滲む。
その様子を見た少女の口元に笑みが浮かんだ。あどけない表情だが、その目は何も映していないかのようすにうつりである。

『おまえ、きつねのくせに、びつして、にんげんのみかたをする?』

唇が動いたとも見えぬのに、少女の声が響く。
幼いが、まるで、地の底から響いてくるような、暗い声だ。

「……悪いねえ。

あたしはたしかに妖狐だけど、人間でもあるんだ。それに……」

葉子は、ゆっくりと立ち上がった。

「それに?」

少女は、笑みを仮面のようすに張り付けたまま、首をかしげる。

「あたしが、こうしなかつたらアイツは、きっとまた無茶をする。
それだけは、やらせたくないんだよ」

言いながら葉子は胸の前で掌を向かい合わせ、そこに青白い炎を現出させた。

それと同時に、全身が光り輝き、妖狐の正体を現した。5本の尻尾を生やし、真っ白な長い髪は腰まで届いている。毛に覆われた長い耳。

長く伸びた犬歯。

しかし、妖怪の本性を現し、肩と足に赤い血の跡をにじませながら……敵にまっすぐ立ち向かう葉子の姿は、それでも美しかった。

「ケンカする気は、なかつたんだけどね……」

「わたしもだ」

葉子の炎は、手を離れると見る見るうちに大きくなり、少女を包み込む。

少女の髪が燃え上がつた……と見えた次の瞬間。

「ぎやああああ……」

悲鳴を上げて、吹き飛んだのは葉子だった。

少女の燃える髪が、いくつもの火の玉になつて葉子を襲つたのだ。しかも、すべての火球が、正確に葉子の胸をとらえていた。

転がり、燃え上がる葉子は、次第に小さくなつていく。

葉子から立ち上る青白い炎が、少女に吸収されていく……後に残つたのは、一抱えほどの丸い石だけだった。

「ちからほどもわきまえずに、いどむからだ」

少女は特に感慨もなさげに呟くと、空に溶け込むように、ふいっ
と足元から消えた。

§プロローグ 葉子と妖少女（後書き）

前回は、すべて書き上げたから上げてこましたが、今回はまだ、途中までしか書いていません。

続きを書くにしても、もう少し、ゆっくり書こうと思つていたのですが……

頭の中であおい達が暴れ出し、止まらなくなつてしましました。

§1 ビオトープ管理士

§1 ビオトープ管理士

受話器から聞こえてきたのは、子供の声だった。

「あのう、……ビオトープ管理士の人は、いらっしゃいますか？」

「えーと……一応、私がそうなんですけど……どうかしましたか？」

「ぼくたちのメダカを、助けてもらえないませんか？」

あおいは、またか、と思つた。

どうも最近、生き物の飼い方や、病気の対処などに関する質問の電話が多いのだ。

数週間前に学校ビオトープの指導をした時、地元ＴＶ局の取材を受けたのが、まずかつたらしい。

小学生達から、ビオトープとは全く関係のないカブトムシの捕まえ方だの、カエルの飼い方だの、金魚の病気の相談だの、の質問が飛び出した時、知らない、と答えておけばよかつたのだ。

生き物好きだった祖父の影響からか、大河童から預かつたアカハライモリのせいか、あおいは、物心ついた時から、田に付くあらゆる生き物を飼つた。

中学、高校では生物部、大学は動物生態学専攻。

25歳の今でも、水生生物を中心に、十数種類の生き物を飼育している。

ビオトープ管理士になったのも、技術士資格も持たないくせに、コンサルタント会社を立ち上げたのも、すべては生き物好きから発したことだ。

そんなあおいにとって、小学生の生物に関する疑問程度で答えられないものは、ない。

子供の疑問は、素朴すぎて難しい。

そう言う人もいる。

が、それは、知識の本質が分かっていないだけだ、と、あおいは思う。

子供や知識のない人に、分かりやすく説明できないようなら、それは、説明者自身が、その知識の本質を理解していないだけなのである。

結局、あらゆる質問に答える、ものすごいお姉さんという感じで、放送されてしまった。

ローカル局ながら、夕方5時からの高視聴率番組であつたものだから、その翌日から電話だのメールだので、幾つも質問が寄せられて、いい加減、辟易していたところなのだ。

だがまあ、子供は嫌いではないし、頭の柔らかい子供の質問に答えるのは、楽だ。

厄介なのは大人で、頑固な上に基礎知識も無いので、一から説明すると、とんでもない時間が掛かる。

いや、基礎知識が無いならむしろマシな方で、間違った知識を前提とした質問は、更に厄介だ。

なんと言われようとも、ヒキガエルは、水をヒタヒタにして飼つてはいけないのだし、ザリガニだらうとフナだらうと、こはんつぶ

だけで飼える生き物はいないし、飛べない小鳥のヒナを見かけたら、放置するのが正しいのだ。

その程度のことであっても、ハンパな知識を持つ大人には、理解させるのが難しい。

まあ、そういうた頭の固い大人に比べれば、子供は素直に聞いてくれる。

電話で済ませてしまえば、時間を取りることもないだらう。

あおいは、ため息をつきたくなるのをこらえ、電話に答えた。

「メダカって……水槽で飼っているの？それとも、池？」

「池です。学校にビオトープがあつて、そこにメダカがいるんですけど、なぜか次々に死んじやうんです」

あおいは首をかしげた。

メダカは本来、非常にタフな生き物である。

北海道をのぞく日本全国に分布しているだけあつて、寒からうと、暑からうと、水が汚からうと……乱暴な言い方をすれば、どんな環境でも平気で生息する。

事実、水温40度近い温泉や、海水域にまでも生息することがあるのだ。

絶滅危惧種になど指定されているから勘違いされることがよくあるが、そもそもメダカにとつて、綺麗な水など必要ないのである。

たしかに水槽であれば、病気が蔓延して手の施しようがないことは、ある。

だが、池であれば、全滅に近いようなことは、起きにくくい、といえた。

「そのメダカを、もしかして、近所で捕まえてきたばつかしじゃない？」

非常にタフで環境適応性も強いメダカだが、物理的な衝撃や、網などに擦れるには非常に弱い。

あおいは、メダカの死は、子供達が乱暴な捕獲の仕方をして、傷をつけたせいではないかと見当をつけたのだ。

「いいえ。

あの…………そのメダカは、教室の水槽でふえたメダカなんです」

といふことは、教室内では繁殖するほど元気だったメダカが、池に移した途端に調子を崩す、といふことになる。

そうなると、池そのものに何か問題がありそつだが、池の状態やメダカの症状を聞かないと、なんとも言えない。

「あの…………メダカは、どんな感じで、死んじやうのかな？」

「え…………と…………べつに、どこも悪くなさそうんですけど、毎日、少しづつ死んで沈んでいるんです」

さあて、これは厄介である。

症状からすると感染症のようにも、毒物が原因のようにも思える。たいていの感染症は体表面に症状が出るのだが、小学生の観察力不足で、病気が発見できないだけかも知れない。

もしかすると、池に使われている資材から、毒性のある物質がじわじわと溶け出している可能性もある。

もちろん、天敵に襲われているということも考えられる。

しかも、死体があることからすると、食べるタイプではない水生

昆虫、つまり獲物の体液を吸う、ミズカマキリやタイコウチなどが、大量に住みついているといふことも、考えられなくはない。

淡水産のイソギンチャクの仲間の、ヒドラが大発生しているのかも知れない。

ヒドラの触手は強い毒を持ち、メダカなどを殺してしまつのだ。

「その池つて、大きいの？ 使った水は、水道水かな？ あと、作ってどれくらい経つのかな？」

「池は、去年出来たビオトープで、3m四方くらいです。水は、水道水でしたけど……ちゃんと、1日ほど時間をおいてからメダカを入れました。」

はきはきした返事である。

言葉の端々から、小学生の割に、そこそこ飼育経験と知識を持つている子であると思えた。

現場を見てみたい。と、あおいは思つたが、今は忙しい。仕事の依頼でもないのに、昼間つからこの出かけるわけにも行かない。

そう思いながら、しばらく考え込んでいふと……

「あの……お金が必要ですか？ だつたら僕、お小遣いを貯めています。

一一万円くらいしかないけど……足りませんか？」

コストについて考えていたのは事実だが、池の下見に行つたらいで、小学生からお金を巻き上げるわけにはいかない。

「あ、ううん。大丈夫よ。お金のことは気にしないでいいから。名前と学校を教えてもらえるかな？」

おねえさん、時間を見つけて見に行つてみるわ

「本当にですか？ ありがとうございます！」

電話の声は、喜びにはずんだ。

学校名を聞くと意外に近い。あおいの会社のあるF市の中心部から、車で10分程度だ。もちろん、今は夏休みのはずだが、……電話を掛けてきた子の名前は、ふどう君と言つた。

学年を聞き、担任の先生の名前を聞いて、電話を切つた。

「行つてはダメですよ」

声を掛けられたあおいは、田の前に立つ真菰専務に初めて気づき、飛び上がるほど驚いた。

「今、どれだけ忙しいと、思つておられるのです？」

先日数ヶ月ぶりに落札した、広域農道の環境調査業務は、現地調査を終え、今まさにもつとも大変な、膨大なデータのまとめと、提出資料の作成段階に入つていた。

しかも今回は、仕事のボリュームの割に納期が短く、社員全員がこの案件にかかりきりの状態なのだ。

真菰専務は、座間と葉子を手伝わせ、昨夜から泊まり込みで作業中だつた。

今は一人とも、ちよつと、着替えを取りに帰つたといふのである。

その上、広域農道の通過予定地が、冬期にはマガソやヒシクイの集団飛来地のど真ん中になることが

現地の聞き込み調査で分かつてしまつた。

これを報告するためには、毎年の飛来数を推定しなくてはならぬ

いため、地元の野鳥愛好家のデータを、もう一に行かねばならないことになった。

それで、いぶきが出かけている為、社内では新米の七海が、一人でCADを操っている。

また環境調査だけのはずであったが、マガソもヒシクイも絶滅危惧種であるため、工事計画に際して、それなりの代替案を構築しておく必要がある、と、あおい達は判断した。

代替案。専門用語で「ミティゲーション」。

つまり簡単に言えば、その場所の生態系保全のために、回避、最小化、低減、矯正、代償の5つの段階を踏んだ検討案が必要なのだ。5段階の検討は、保全生態学の視点からのものとなる。

しかし、トープスでは、専門に保全生態学を学んだ者はあおいだけである。

要するに、あおいでなくては、対外的に通用する検討案を作れないのだ。

真菰は、鋭い視線で、射抜くようにあおいを見つめている。

「で……でも……メダカさんが、次々死んでしまう……」

「…………社長。

あなたにとつて、仕事の優先順位はどうなっているのですか？」

「…………」

「メダカたちは可哀想でしょう。

しかし、今のまま成果物として資料を提出したら、ガソの集団飛来地はおそらく消滅します。ガソは可哀想ではないとでも？

いえ、なにより社長は、それでよろしくのですか？「

真菰の言つことはもっともある。

もちろん提案したところで、集団飛来地を無視して、工事を進められてしまう可能性は充分にある。

だが、あおいが低コストで効果の高い代替案を提示することができれば、飛来地を保全しつつ、工事を行おう、といつ話になる可能性が高い。

今は何かにつけ、環境、環境、とうるさい時代である。行政側も環境を配慮した工事を選択したいし、やつてしまつた後で文句が出るくらいなら、最初から配慮しておいた方がいい。もちろんトップスとしては業務範囲外として、飛来地保全の代替案を出されずに済ますこともできる。

しかし、もし設計段階になつてから別のコンサルタントが、飛来地を無視するような設計を出しついたら、ヘタをすればそのまま工事が進められてしまう。

「ミライゲーション案。仕上げるまでは、一歩も会社から出しません」

真菰専務の静かな、しかし厳しい声が飛ぶ。

その時。

「お嬢……おられますかい？！」

乱暴にドアが開け放たれ、ドスのきいた声が響き渡つた。

「あ、後藤さん。どうしたの？」

事務所の入り口に仁王立ちしている大男は、あおいにとつては、子供の頃から見慣れた顔だった。

トップスの親会社である圓野組の副社長、後藤 剛基 ジョウキ である。同じ大男といつても、ひょろ長い座間とは全くタイプが違う。身長は同じくらいだが、鍛え上げられた上半身とそれを支える強靭な足腰には、プロレスラーのそれに匹敵するほどの分厚い筋肉の鎧がまとわりついている。

年齢は50代前半と言つたところか。
きちんとネクタイを締めたワイシャツ姿だが、まるで似合っていない。

角刈りの「ま塙頭が、いかにも工事業の棟梁らしい雰囲気を出していた。

「どうしたの、じゃあ、ありませんや。お嬢。
やつぱり、忘れてらしたんですね。親会社の役員会議をすっぽか
しちゃあ、マズイでしょう」

「あ。」

あおいは口に手を当てて息を呑んだ。
そうである。

今日は第一月曜。昼一番から、圓野組の役員会議の日であった。
ここ数日はまさに修羅場であったから、すっかり忘れていたのだ。
時計を見ると、午前11時30分。

今から出発すれば、道すがら昼食をとつても、充分に間に合つ。
トップスの社長と、圓野組の社外取締役を兼任しているあおいが、会議を忘れている可能性を見越して迎えに来てくれたのであった。
社外取締役とはいえ、あおいの実父の圓野明徳が経営する会社であるから、あおいが出席しないとなると、明徳の立場がない。

「「」めん。後藤さん。

設計の仕事の方が忙しくて……毎月ある会議なんだから、今月は欠席させて？」

あおいは後藤のそばまで行くと、声を潜めてこっそりと話した。しかし、後藤はそんなあおいの配慮などお構いなしで、大声を張り上げた。

「何言つてんですかい！」

親会社が無くっちやあ、こんな会社、一日だって持ちやしませんぜ？ 儲からない設計業なんかで時間とるくらいなら、こっちの会議の方がずっと大事ですぜ！」

「それは、聞き捨てなりませんな」

後藤の少々乱暴な物言いに、真菰専務が静かに……切れた。

「たしかに、月次決算は赤字でしたが……年度決算で親会社にご迷惑をおかけしたことは、一度もない、と記憶していますが？」

「へつー！ウチの営業部隊の若い衆が、こっちに変更図面を依頼しているから、なんとか食べてんじやねえか！」

真菰よう。その辺忘れてイキがっちやあいけねえぜ？」

「それは、そちらに変更図面程度も、引き直す技術も無いからでしょう。」

それを棚に上げて、よくもそんなことが言えますね。依頼をお断りして良ければ、次回から、そのようになさせてもらいますが？」

真菰の目が、メガネの奥で、銀色に光る。

相変わらず腕を組んで、姿勢良く立つ真菰の背後の空間が歪んだ。そこに、光を吸い込むかのよつた、漆黒の闇が現れ、渦を巻く。

明らかに普通ではない。

しかし、そんな真菰の様子を見ても、後藤は腕を組んで平然と眺めているだけだ。

「ケンカしよつてんなら、いつでも買つてやらあ。ただ、オレにとつちやあ、今は本社の役員会の方が大事なんでね。あんたと、じやれ合つてるヒマは無えんだ」

やつ言ひと後藤は、田の前にいたあおいの首根っこをつかんで、まるで猫の子のように軽々と持ち上げた。

「あ、ちよつ……」

「言いかけたあおい」

「舌、噛みますぜ？」

言ひ様、後藤はあおいを、ドアの外に放り投げた。

「あ、やあああああ……」

あおいの声が長く尾を引いて、階下へと消えていく。

ドアを出すぐの階段へ向けて投げられたあおいは、そのまま階段の吹き抜けを3階分落下した。

落卜の間は、すさまじく長く感じられ……いよいよ地面に激突するか、とあおいが思った時。

ふわりと何者かに抱き留められた。

「お嬢。大丈夫ですか？……つたく、副社長も乱暴だなあ」

「前田常務……来てたの？」

「はい。まあ、そうでなければ、副社長もこんな無茶はしませんよ」

絵に描いたようなお姫様抱っこをしながら、あおいの顔をのぞき込んでいたのは、やはり圓野組の常務取締役である、前田 善樹よしきであつた。

爽やかに微笑む前田は、後藤とは正反対のしなやかな体躯の持ち主である。

成人女性を、ぬいぐるみか何かのように放り投げた後藤の腕力も異常だが、落下してきたあおいを空中で軽々と受け止め、ほとんど何の衝撃も感じさせないで抱きかかえた前田も、かなり人間離れしていると言える。

「おい。龍のヤツが来る。ずらかるぞ。」

後藤が軽く地響きを立てて、前田の隣に着地した。あおいの後から、吹き抜けを飛び降りたらしい。

前田は、ビルの前に止めていた黒塗りのセルシオの後部座席にあおいを押し込むと、自分は運転席に乗り込んだ。

「早く出せ」

続けて助手席に乗り込んできた後藤の言葉にも、さほど慌てる様子もなく、しかし、速やかに車を発進させる。

すると発車と同時に同時に、車のあつた位置に何の前触れもなく落雷した。

「あつぶねえ。奴さん、本氣で怒つてんな

後藤は、後ろを見ながら呟いた。

その時、フロントウイングウに、まるで投げつけたよつて大粒の水滴が当たる。

雨だ。

500mも行かないうちに、バケツをひっくり返したような大雨になつた。

時ならぬ豪雨の中を、あおい達を乗せた車は、圓野組へ向けて走つた。

「お嬢。飯食つていいくでしょ? 国道バイパスの、つる喜でこいですかい?」

のんきな口調でおおこに聞く後藤は、真菰の怒りなど歯牙にも掛けになつてゐる。

「え、ええ。まあ、そりゃあ、べつにどくでも構わないけど……

その時、あおいの携帯が鳴つた。

『社長』

真菰の声だ。

静かな怒りが、電話越しでも伝わってくる。

「ううなると、真菰は怖い。」

「は、はーーー。」

あおいは、後部座席で、背筋を伸ばした。

『行つてしまわれたからには、仕方ありません。しかし、こうした重要なことは、今後は必ず、前もって私に連絡しておいて下さい。圓野組から、乱暴な連中が迎えに来ずっとも、良じよつて元気よ。』

「……はー」

『それと、圓野組の役員会は、いつも、4~5時間はかかります。その後は、会食があるはず。これでは、今日はお戻りになれないでしょ。』

書類の提出期限は一週間後の、8月17日。
今夜お戻りになられてからの徹夜はもうひるですが、お盆休みは無いものと覚悟しておいて下さい。』

「う……はー。」

電話を切ると、あおいは広々とした後部座席に、ぱつたりと倒れ込んだ。

「お嬢。おやつさんが心配してますぜ？」

「いつまでも、ビオトープじゃないでしょ。そろそろ、妙な会社をたたんで、圓野組に戻つてくれませんかね？」

後藤が心配げに言った。

トープスの仕事のことなど、端から問題にもしていない様子だ。

「『Jリーグ』じゃないですか！」

あおいは、さすがに力チンときて、言い返した。

「儲かりもしない仕事なんか、『Jリーグ』ことしか言えませんや。

圓野組は、今の社長になつて年商50億の規模に拡大してんですぜ？」トープスは、5人も社員を抱えてて、年商ナンボなんですか？」

「……コンサル会社と土木会社じゃあ、財務も利益管理も違うもの……一概に比較は出来ないわよ」

「へえ。じゃあ、儲かつてんですかい？」

「……」

あおいは、返答に窮した。

たしかにトープスは儲かつていない。というか、赤字スレスレだ。同業者と比べて、給料も高くない。まともに考えれば、真菰や葉子、いぶきのような能力の高い有資格者がいてくれることだけでも、奇跡的と言えた。

「あつしは、なにも意地悪で、こんな話してるんじゃないんですぜ？ 実は……今日の役員会の議題に、トープスへの支援打ち切りの話があるから言つてるんですけど」

「ええつーー？」

あおいは、驚き、声を上げた。

真菰専務は、圓野組など関係なによつたことを言つてていたが、実

はそうとも言い切れない。

そもそも、トープスの間借りしている事務所は、圓野組の持ちビルであるが、共益費以外の家賃は払っていない。

それ以外にも、人件費の一部、社有車のリース代、通信費、経理業務……トープスは、親会社の圓野組に頼っている部分が非常に多いのだ。

そして、後藤の言葉を聞いて納得もした。

今回の出迎えは、いくらなんでも、いささか強引に過ぎた。ずばらなあおいを確実に出席させるためと、前もってあおいに、会議内容を知らせようとしてくれたのだ。

「そりや そうでしょう。

儲かつてもいない子会社なんぞ、親会社ひとつやあ、お荷物以外のなんでもないですからね」

「少なくとも……」

それまで、黙つて運転していた前田が、口を開いた。

「お嬢が社長に、きちんと経営計画を提示できないよつなら、支援打ち切りもやむを得ない」と、私も思います」

「で……でも……」

言葉に詰まるあおいに、前田は更に続けた。

「逆に言えば、きちんとした経営計画、収益計画を提示されるおつりがあるなら、私も、後藤副社長も……おそらく他の役員も、お嬢を応援いたします」

急にそう言われても、あおいに提示可能な経営計画があるわけはなかつた。

あおいがトップスを立ち上げて、すでに3年。

たしかに普通に考えれば、中小企業が新事業に見切りをつけるだけの期間は、充分以上に経過している。

それに、公共事業の削減により、土木建設業者は大変な不況下にある。

親会社の圓野組も、「こ多分に漏れず厳しい経営を強いられているのは、あおいにもよく分かっていた。

またしかし、売上や利益よりも、生態系や生物の生命を尊重し、それに反する仕事には手を出さない、というあおいの経営方針では、今後も収益を大きくしていく、などということは出来ないことも。本来、建設コンサルタントはボランティアではない。企業である以上は、自然保護家であつてはいけないのだ。

企業運営上、圓野組の判断は正しいのかも知れない。
しかし、あおいにも一つの思いがあつた。

「……前田さん、後藤さん……おっしゃることはよく分かります。今のトップスの状態は、すべて私の責任です。でも、圓野組は……今の、そのやり方でいいんですか？」

「むハ……」

後藤は唸つた。前田も返答できないでいる。

圓野組も以前は、造園中心の、一般土木を業とする小さな会社であつた。

しかし、先代の正平が亡くなり、婿養子である明徳の代になつてから業務内容は大きく変わつたのだ。

「たしかに以前は、年商10億以下。

下請け、孫請け中心の、小さな土木業者でした。でも、おじいちやん……先代は、いつも仕事を選んでいたわ。決して、弱いものや、小さいものを踏みにじるような工事はしなかった」

今の圓野組は、これまで手を出さなかつた、マンション建設や大規模開発にも手を出し、事業規模を拡大している。

大不況の波が押し寄せ、仕事量が減少していくと、地元の小さな土建業者を押しのけるようにして、小規模工事を受注し、年間売り上げを確保した。

また、大規模なリストラも敢行した。

古参の幹部は、定年を前にして軒並み辞めさせられ、残っているのは、前田と後藤くらいのものだ。

設備、造園、左官といった下請け業者にも、大きな負担を強いていると聞く。

圓野組は、この不況下でも、健全経営、無借金経営を貫いているが、それは裏を返せば、なりふり構わない、利益追求主義の結果でもあつたのだ。

「お嬢。先代の理念は立派でした。でも、いくらでも仕事のあつた、公共事業全盛時とは違うんだ。

そんなこと言つてたら、会社はつぶれちまつ。

食えなきや理念もクソもねえ……今の社長の方針も、仕方ねえんじやないですかい？」

「降りして」

「……お嬢」

「役員会は、出ません。

支援を打ち切りたいなら、そつして。

それでトーブスが存続できないなら、私が、自分の責任で会社をたたみます。私は……私の会社が……トーブスこそが、正統に圓野組の精神を受け継いでいる。と、そう思つている。

それが、答へよ」

「それでは、私達が、社長に叱られます。

せめて、役員会には出席して、直接社長にそいつあつしゃつて下さい

「やめえ。前田ア……」

両手で顔を包むよつこじて、あおいの言葉を聞いていた後藤が、そのままの姿勢で、低い声で言つた。

「お嬢に、社長に對してそんなこと言わせられるかい。

それじゃあ、俺たちが先代に、顔向けできねえだらつが……

後藤は、信頼で停まつた時、あおいに言つた。

「どうぞ、降つてください。社長にま、あたしからかうと申し上げておきます」

あおいは軽く頭を下げる、車を降つた。

§2 学校ビオトープ

§2 学校ビオトープ

あおいは一人、歩道を早足で歩き始めた。
タクシーはたまに通つたが、一人で歩きたい気分であつたのだ。
事務所まではかなりあるが……女の足でも、1時間以内に帰れるだ
らう。

それに、あおいは体力には、自信がある方だ。

いつの間にか、先ほどまでの激しい雨はやんんでいる。
それどころか、強い日射しがアスファルトを焼き、すでに乾き始
めてすらいる。

照り返しが、容赦なくあおいの肌を焼いた。

強い日射しに田を細め、そのまま田をつぶると、瞼の裏に祖父の
顔が浮かんだ。

優しい祖父であった。

いつでも。

それこそ死の間際まで自分に向けられていた、その笑顔を思い出
し、あおいは涙がこぼれそうになつた。

あおいは自分の右頬を、力一杯ひっぱたいた。泣きそうになると、
いつもそうするのだ。

鈍い痛みが、感傷を吹き飛ばしてくれる。

涙は、女の武器だといつ。

女は、泣けば、何とかなると思つていて。

あおいは、絶対にそんなふうに思われたくはなかつた。だから泣
かない。たとえ一人の時にも。

そう決めていたのだ。

「あれ?」「は……」

気がつくとあおいは、右手にフェンスを見ながら、真っ直ぐな道を歩いていた。

フェンスの内側には、広々とした校庭と、真新しい校舎が見える。
F市立貴田小学校。

先ほどの、子供から電話のあった小学校だ。
役員会をすっぽかしたことを、真菰専務に言わなくてはいけない。
仕事があるのだから、もちろん会社にも、すぐに帰らなくてはいけないのだが……

「すみません。私、株式会社トープスの、圓野あおいと申しますが」

あおいは、職員玄関のインター ホンを押していた。
メダカのためでも、その子供のためでもなく……今の気分のまま、
真菰専務と……いや、自分を知る誰とも話したくないと思つたから
だ。

(イヤな事から逃げてるだけ……かもなあ……)

後藤に啖呵を切つてはみたものの、言い訳だと言われればぐつの音も出ないことも分かっていた。

親会社の支援打ち切りを知らず、今も必死で仕事をこなしている
真菰達社員のことを思つと、あおいの胸が、ちくんと痛んだ。

「はい。どういった用件でしょうか?」

くたびれたような、女性の声がインター ホンから流れる。

「えー……と。トーペスの圓野、と申しますが、こちらの生徒の方からビオトープについての質問がありまして」

「ああ、はいはい。お聞きしています。どうぞ。」

アポを取った記憶はないが……電話をくれた子が、話をしておいでくれたのだろうか？

急にトーンの変わった声と同時に、オートロックが開く。十数秒後、サンダルの音を響かせて玄関先まで出迎えに現れたのは、30代半ばと見える、男性教諭だった。

「あなたが、ビオトープ管理士の方ですか？」

ウチの児童が、急にお電話を差し上げてしまつたようで、申し訳ありません。私、6年生担任の佐倉井と申します」

学年だけでクラスを言わないとこを見ると、この学校も一学年で一クラスしか無いのだろう。少子化と地方都市に付き物の人口減少のせいで、市内の小学校は軒並みそんな状態だと聞いている。

「トーペスの、圓野あおいです。

早速ですが……メダカが池に入れると、死んでしまうとのお話をしたね？」

「ええ、まあ。たしかにそうなんですが……」

「なにか不都合なことでも？」

佐倉井は、何やら言いくくそつこ、言葉を選んでいた。

「実は、ご相談をした児童なんですが……少々、問題のある子なん

です「

「問題?」

あおいは驚いた。電話の感じでは、少しそっかりし過ぎていて、くらいいの印象を持つていたからだ。

「詳しい事情は、後でお話しますが……今クラス内で、メダカを世話しているのは、彼だけなんです」

「他の生徒は、メダカに興味がない、ところだとですか?」

「いや、まあ……最初から興味が無かったわけではありますんが……とにかく、今、メダカのことを心配しているのは彼だけなんですよ」

あおいは、少しむりとした。

どうしてそれで問題児になってしまったのか? 問題なのは、そういうものに興味を示さない他の生徒達であり、それをきちんと指導できない、この佐倉井という担任教師ではないか、と思つたからだ。

「とにかく池を見せてもらえませんか?」

誰が大事にしてこよつとこまつて、メダカに罪はありませんから

少し頭に来たあおいは、容赦なくトゲのある言い方をしたが、相当鈍いのか、佐倉井の表情は変わらない。

「ええ、そうですね。ご案内いたします」

「あれ? じつちじやないんですか?」

階段を上り下りする佐倉井に、あおいは驚いて聞いた。中庭に出るなり、階段下の非常口だと思っていたからだ。

「ああ、いや実は、新しいビオトープは屋上なんです」

「なるほど、屋上緑化ですか」

この地域で、屋上緑化は珍しい。

都会では、屋上からの輻射熱を緩和し、冷暖房のコストを大幅に下げ、都会全体の温度上昇……いわゆるヒートアイランド現象も緩和する、ということで、導入されている建築物も多いと聞く。しかし多雪地帯であり、建築物の強度に不安があるせいか、あおい達の住む地域では、公共施設であっても、滅多に屋上緑化は行われていなかつた。

「そうなんです。エコスクール……って、ご存じですか？」

「ええ、存じています。

そういうば、やつと県内にも補助が降りた、というニュースを何年か前に見ました」

「そうです。我が校は、その県内初のエコスクールに認定されたのです。

2年前から施工にかかり、風力、太陽光発電も取り入れ、屋上ビオトープが出来たのは、去年でした……」

佐倉井は、階段を上りながら話し始めた。

「最初の指定校でしたから、当初は、盛り上がつたんです。

「屋上緑化だけでなく、ビオトープも作りたいと言いましたのは、児童達でしてね」

本来であれば安全上、池のような重量のある施設を、屋上に配置するなど考えられない。

しかし、ちょうど建物の耐震強化工事もあつたため、構造計算をやり直して、屋上緑化を施工したのだといふ。

「電話を差し上げた彼……富堂 亮君も、張り切つて、ビオトープに放すためのメダカの世話をしていたんです。でも……」

佐倉井は、言葉を切つて、しばらく黙つた。

「でも……昨年、一人の女子児童が、その屋上から飛び降りて亡くなつてしまつたんです」

その少女も、メダカをとても大切にしていた。

だが、ふとしたことから、いじめが始まつたのだそうだ。クラス全体から疎まれ、大好きだったメダカの世話もさせてもらえなくなつた。

『お前がさわると、メダカが病気になるんだよー。』

佐倉井教諭が実際に聞いた、いじめっ子の言葉だといふ。

「子供って、どこまでも残酷になれるんだな、つて痛感しました。つい先週まで、仲良く頭を寄せ合つていた子達が、まるで汚いモノでも見るように、その子をはじきだすんです。私も……力不足を痛感しました。

何とかしたいと努力したつもりですが……ダメでした。

自殺したその子の遺書に、私への感謝の言葉があつたので、公的には何の処分もありませんでしたが……もつ、教師を続けていく自信はありません。

今のクラスが卒業したら、責任を取つて辞職するつもりです。

「その……富堂君の問題、つていつのは？」

「その子が亡くなつてから、やはり、屋上にそういう施設を作つたことが、問題だということになつたのです。

それで、屋上緑化はあくまで節電のための施設として、ビオトープは壊して普通の芝生に変える事にしました」

「……なるほど」

学校らしい、といえば、らしい対応である。

問題が起きれば、その根本を解決するよりも先に表面の原因を消そうとするのだ。

「でもね。本当にいつと……みんな、メダ力を見るのもつらくなつたとつともあるんです。輝く目でメダ力を見ていたあの子を思い出すといったまれなくなつて……」

「お気持ちは、分かります」

「ところが、富堂君は、一人だけ大反対しましてね。」

どうしても、ビオトープにメダ力を泳がすと言つて、聞かないのだといつ。

そういう事があつたものだから、屋上には、常時カギをかけてある。しかし富堂君は、カギを開けずに、どうやってか屋上に侵入し、

秘かにビオトープにメダカを放しているのだこう。

「子供のことですから、どこか、我々の想像も付かない侵入経路を見つけたのだと思いますが……どうやっているのかは、頑として、言わないのです。

危険ですし、何度も注意もしています。

しかし、その時は神妙に話を聞いているのですが、翌日にはまた、知らん顔で屋上に侵入して、メダカを見てくるのです」

親御さんを呼んで注意もしたらしい。

事故が起きても責任は持てない、と。そういうふうに、夏休みになつた。

「子供ですから、夏休みが来れば忘れるんじやないか……少なくとも、夏休みの間はあきらめてくれるんじやないか……そう、思つていたんですけどね……。

さあ、着きました。ここがそうです」

佐倉井教諭は屋上へのカギを開け、金属製の扉を開いた。開いた途端、じゅりゅ。

というような音とともに、高温の風が、激しい勢いで吹き込んできた。

熱風といつていい。

強い日射しに日が慣れるまで、数秒かかった。

屋上ビオトープは、せっかかなものだつた。

南側の隅に申し訳程度に作られた小さな池は、富堂君から3m四方と聞いてはいたが、その水深は10センチくらいしかない。

周囲はすべて芝生。

池の中には申し訳程度に植えられた水生植物が、根元から枯れ始

めている。

「……もひ、原因は分かりました」

あおいは、池を見るなり、佐倉井教諭に言った。

「え? もひ? ですか?」

最初に熱風が吹き込んできた時からまさか、とは思っていたが、この屋上緑化は機能を果たし切れていないので。

まず、予算の関係なのか何なのか、屋上緑化自体が、全面積の半分しか施工されていない。

これでは、緑化した部分にも、周囲から熱が伝わってきてしまう。池の周囲には木陰も無く、真夏の直射日光が容赦なく水温を上昇させている。

また、わずかでも日陰を作ろうとしたのだろうが、池の配置を南側の角に寄せるようにしてあるが、これがまたいけない。壁面を焼いた日光は、壁を伝導して池を熱するのだ。

「水温、計られた事はあります?」

「あ、いや、どうせ解体する池だからと……」

「池に、手を入れてみて下せ!」

怪訝そうな顔をしながら水に手を触れた佐倉井は、飛び上がった。

「つ熱やつ……」

「表面水温は、たぶん……40度を超えてますね。これじゃあ、タフなメダカといえども、ひとたまりもないでしょ?」

あおいも、池に手を入れながら言った。

この状態で、それでも即死しないでいたメダカに、拍手を送りたいくらいであつた。

「こ……こんな……屋上緑化って、屋上の温度を下げるんじゃなかつたんですか?」

「もちろん、芝生のある部分は、植物の蒸散作用がありますから、今の状況でも、無いよりはマシでしょう。でも、池は直接、太陽光が当たつてしましますから、温度上昇を防げません。

特に、この……」

あおいは、大人の膝くらいまである、屋上の縁取りをピタピタと叩いた。

「コンクリート構造物は、熱を貯めこみ、伝導します。この位置に池がある事も、水温上昇の原因の一つでしちゃうね」

「それじゃあ……どうしたら……」

佐倉井教諭が言いかけた時、入り口の鉄扉が、ぎいっと鳴つて開いた。

「あれえ? 社長、なんでここに、いてはるんですかあ?」

聞き慣れた、気の抜けたような声である。男の子を一人伴つて現れたのは社員の一人、座間くらまであった。

あおいことっては、これ以上なごくらい、気まずごタイミングである。

しかし、座間に会えて、妙に落ち着いた気分になつたのも確かであつた。

「え、あの、そりやあ、こここの生徒さんから、メダカについて質問されたからよ」

あおいは耳まで真っ赤にして、じどろもどろになりながら答えた。

「おつかしいなあ。
社長は本社の役員会やとかで、代わりにオレに行けつて、真菰専務が言わはつたんですけど……」

なるほど、それで来校した時に、既に聞いているような対応だつたのだ。つまり、真菰専務がアポを取つてくれていたわけだ。

そういうえば、学校名や連絡先を書いたメモを、自分の机の上に置きっぱなしであつた。

「そ……そのことは、後で話すわよ。今は、メダカの事でしょ？……で、その子が、富堂君？」

「はい。貴田小6年の富堂 売です」

「富堂君。メダカの死ぬ原因は、だいたい分かつたわよ」

「本当ですか？」

利発そうな少年は、ぱあつと顔を輝かせた。よほど、メダカの事が心配だつたのだろう。

「ええ。後は、対処するだけだけど……この池、撤去される予定だそりじゃない?」

「…………」

富堂君は、まるで悪い事を見つけられたかのよつて、無言で首をすくめた。

「ああ、勘違いしないで富堂君。
べつに怒つてやしないのよ。私が聞きたいのは、撤去される」と
が分かっていても、その池にメダカを泳がせたいのかつてことだけ」

「…………いいんですか?」

「いいわよ。

私達は、相談されたメダカを、死なせないよつてするだけだから。
それと…………どこから入り込んでいるのか知らないけど、メダカが
元気に泳げるよつになつたら、ここに勝手に侵入するのはおやめな
さい」

「…………はい」

富堂君は、神妙な顔で答えた。

「あつがとつざれこます」

佐倉井教諭も、深々と頭を下げた。

「いえ、構いません。

ところで、佐倉井先生。いま流行りのグリーンカーテン……でしあつけ？あれ、この学校にあります？」

「ええ、何力所か……HPSKUールなんだからやらなきゃこかんつて、校長の一聲で」

「ちょうど良いです。

何力所もあるつて事は、毎日水やりとかで相当苦労なつてますでしょ？」

「それはまあ、大変ですが……」の話、何の関係があるんです？」

「簡単な話です。

あの池には日陰が必要なわけですから、そのグリーンカーテンをここに持つてきてしまえばいいんですよ」

「ええっ！？」

でも、そんな事をしたら、水やりとかの世話がかえつて大変ですよ？」

「

「あの池の水深は、10センチ内外ですよね？」

それなら、池の中にグリーンカーテンのプランターを置いたら……どうなると思つます？」

「？？」

佐倉井教諭は、まったく理解できない様子で、きょとんとした顔をしている。あおいはさらに説明を続けた。

「ブロックとかで底上げして、ヒタヒタになる程度の水深にしてか

ら、グリーンカーテンのプランターを置くんです。そうすれば底から水を吸いますから、水やりは毎日必要ではなくなります。

そしてファンスまでロープを張つて、植物のツルを巻き付かせれば……」

「ああーなるほど。池の上に田舎が出来ますね」

「ツルを外まで垂らせば、外壁の温度も軽減できるでしょう。水温も、今のような高温にはならなくなると思います」

「それなら、手間も費用もかかりませんね」

「いえいえ。

費用はかかりまへんけど、手間は結構、掛かるんやないですかね。ほんなら、始めますか」

「ええっ……今からですか？」

早速、腕まくりを始めた座間の様子を見て、佐倉井教諭も富堂君も、驚いている。

とにかく、座間はやる事が早いのだ。それを見て、あおいもひそと話しかける。

「座間君……いいの？

仕事の方、終わつてないんじょ？ 今のアイデア、教師達にやらせようと思つてたんだけど……」

「ええんですよ。一田置いたら、その分また、メダカが死にますやろ？

お盆休みは、もう諦めました。その代わり、9月の連休は一週間

「いただきまつせ？」

座間の言つた通り、グリーンカーテンの移動は、一苦労だつた。この季節になると、ゴーヤも朝顔も、10mかそれ以上まで伸びていて、隣のロープにまでツルを伸ばしているため、簡単には取り外せない。

「空でも飛べれば、楽なんですけどねえ」

「は？ええ、まあそうですね」

3階の窓から手を伸ばし、ツルを外しながら「冗談をいう佐倉井教諭に、座間が曖昧な笑顔を返す。自分が鳥天狗であり、実際に飛べるなどとは、言えるはずもない。

「座間君、ブロック買つてきたわよ」

「了解。じゃあ先生、屋上まで持つて行きまつせ？」

「うひやあ」

軽めの種類のブロックを選んだとはい、コンクリートはコンクリートである。佐倉井教諭は、なんとか4個を持って階段を上つていいく。

それでもなかなかの体力だが、座間はその先を、平然と8個ものブロックを抱えて上つていく。

「何か……スポーツでも……やつて……おられるんですか……」

息をするのも疲れる、といった風情の佐倉井教諭が聞く。

「いやあ、何もしてまへんけど、まあ、ウチの社長につき合わされ
とつたら、イヤでもこのくらいの体力は付きますわ」

大人3人と、子供1人。

といつても、子供の力など知れているし、あおいは力仕事向きで
はないから、ほぼ座間と佐倉井教諭の二人で、あおいが提案した通
りの状態を作り出すのに、結局4時間がかかった。

「やつと、できましたな」

「いやあ、さすがに疲れました」

佐倉井教諭と座間は、一仕事終えて、なにやら、男同士の友情が
芽生えそうな雰囲気になっていた。

「…………座間君。紙とペン、ある？」

その時、あおいが佐倉井教諭達に気づかれないように、ひそひそ
と話しかけてきた。

「そりや、車に戻れば。……何ですの？」

座間も、ひそひそ声で返しながら、怪訝そうに眉をひそめた。

「なんか、感じない？」…………

「また、妖怪やとでも？」

まあ、学校はわりと良くない土地に建てられやすいもんですから、
そういうのも多 ciòでしょうけど…………

座間は、屋上の床面に手を置き、田をつぶつて何かを感じ取るつとある。

「特に強力なモノは感じられまへんけど……たしかに、ここ、屋上だけに火氣が集まりすぎている感じはありますな」

「でしょ? このままだと、また、水温が上がりかねないから、火氣除けの呪符で結界でも作つておこうかと思つて」

「そんなん、雨でも降つたら、すぐ剥がれてしまこますやう?」

「いいのよ。秋には池を取り壊すそしだし、夏を過ぎれば日射しも緩むでしょ。それまで保てば」

「まあ、やうですな。じゃあ、紙とペン、取つて来ますわ。」

座間は、なにせら理由をつけて車の方へ戻つていった。

佐倉井教諭は、池の上に影を作つてそよぐ「一矢を眺めながら、富堂君の肩に手を置いて話しかけている。

「富堂……」それで、大丈夫だな。

もう明日から、メダカは死なないんだそうだ。取り壊しがれるまでの短い間だけ、きっと元気に泳いでくれるよ

「はー……」

「もう、絶対ここに勝手に入つちゃダメだぞ」

富堂君は素直にうなづいた。

あおい達も、その様子を微笑ましく眺め、この件ははこれで収まつたかのように見えた。

§3 深夜の火事

§3 深夜の火事

「社長…どこに行つておられたのです？」

事務所に帰るなり、真菰専務が駆け寄つてきた。

「後藤副社長から、話はお聞きしましたよ。役員会には、『出席を
れなかつたそつですね？』

「…………『じめんなさい』

「私に謝る必要はありません。
しかし心配しましたよ。どこに行かれたのかと……座間君も、一
緒にいるなら連絡くらいしてください」

あおいは、真菰専務からかなり説教される事を覚悟していた。し
かし、言われたのはたつたそれだけであつた。

「二人ともサボつた分、今日は残業ですからね」

「ええつ！？オレは別にサボつたワケじゃあ…………」

座間は真菰専務の命令で、小学校へ行つたのである。それを聞いた真菰専務は、じりつと座間を一睨みすると、

「たしかに、そうでしたね。」

では、座間君、君のやるはずだつた仕事分、社長にやつてもう一

まじょつ

そんなことを言われて、さつさと帰れる座間ではない。ため息をつきかけたが、ぐっと堪えた。

「いえ。オレも残業します」

「座間君、無理しないで。

今日は、全面的に私が悪いんだから」

「いえ。オレも残業します」

あおいの言葉にも、座間は同じ台詞を繰り返した。

夜の9時を回った頃。

「座間君。ねべんと買つてきてよ

ずっと、パソコンに向かっていた稻成葉子が、ふいに頭を上げて
言った。

言われてみて、初めてあおいは、自分の空腹に気がついた。そう
いえば、あおいも座間も、昼食を食べ損ねているのだった。その上、
小学校で重労働してすぐに仕事に戻り、今まで何も口にしていなか
つた。

「買に行くのはええんですナビ……」

「何よ。何か条件でもつけよつての?..」

面白やうに、葉子が聞き返す。

「いやあ、気づいてみたら、腹減つて動けないんで、買い出しのエネルギー補給のために何か食わせて下さい。」

「相変わらずバッカねー。ホラ、これでも食べなさい」

葉子が放つて寄越したのは、「油揚げスナック・きなこ味」という、聞いた事もないスナック菓子だった。

袋を開けてポリポリとかじりながら

「うん……少し、元気出でました。みなさん、ご注文は？」

それを聞いて、「ペー機を操つていたいふきが振り向いた。

「どうせ、アップルボックス行くんでしょ？ あたしは、特製ハムエッグと、たらこおにぎりの小でいいわ」

アップルボックスとは、F市ローカルのコンビニである。店内調理の総菜モノが売りで、出来たての味とボリュームは、大手コンビニなどとは比べものにならない。店舗が少なく少し遠いのが難点だが、トーストの買い出しが、毎回のこと決まっていた。

「すみません。あたしは、海鮮やさわばで。無かつたらシャケ弁当でいいです。あ、ご飯は小盛りで」

伊園七海は、小食である。

「えじや、あたしは五田稻荷と冷やしきつね

葉子は、油揚げから離れられなこようだ。

「あたしは……いいわ座間君、一緒に行きましょ。」こんな時くらい、あたしがお金出すわ

あおいはパソコンから顔を上げて、社員達のやりとりを聞いていたが、自分の注文を言い掛けて、思い直したように同行を申し出た。それを聞いた七海が、しまつた、といった顔をする。

七海の表情を見ていた葉子は、面白そうに含み笑いをして、またからかおうとしたが、七海を可愛がっている森いぶきがこちらを睨んでいるのに気づいて、知らん顔をした。

「あれ？ 専務は？」

気づくと、真菰専務の姿がない。

「さつさき、こいつたん帰られましたよ。朝、またいらっしゃるそうです。」

「そりゃ。じゃあ、行きましょ。」

座間とあおいはジッグボーンに乗り込み、買い物出しに向かった。あおいは、夜のコンビニは好きではない。

疲れた様子の人が多く、そういう人を見ていると自分まで疲れてきてしまうのだ。

それでも、何となく行こうと思つたのは、座間と一人になりたかったからかも知れなかつた。しかし、行きの車では、何となく気まずさを感じたあおいは、一言も話さなかつた。

そして帰りの車の中。

「「」あんね。座間君」

「はあ？なんですか？」「さなつ」

「座間は、わよとそとじてこる。

「残業の事とか、買い出しの事とか、小学校のメダカの事とか……」

「……」

「そんな急に、社長が神妙になるやなんて、おかしいやないですか。社長は、もつと元気出さんとあきまへん。

「そうやない」と、俺たちが調子出ませんやん

「…………」

あおいは答えない。

「どうしてだらう？自分で自分の気持ちの整理がつけられない。自分のわがままに、座間たち社員も、圓野組も、父も……それどころか自分が大切に思っている、生き物たちさえも……身の回りの、何もかもをつき合わせてしまつてこるよりつな、そんな気持ちになつていたのだ。

「たんたんこりりん様が、言つとつたつていつ……社長が、物わかり良すぎるつて意味、分かります？」

「ううん。分かんない

「せうやうなあ

「何よそれ？」

「いや、ええんですよ。社長はそれで。だから、俺たちは……」

そこまで言いつて、座間は急に言葉を切った。

「何よ。最後まで言こなさいよ」

「ちやいします。社長。アレ、火事と違いますやうか」

夜のことと分かりづらいやが、たしかに、前方の建物から煙が出て
いるようだ。

あれは……

「あれ！ 貴田小学校よ！――」

あおいは叫んだ。

「ええ、そうです。

貴田小学校から、煙が出てるんですね。火災だと感じます。早く
来て下さー」

あおいは、すぐさま消防に電話した。

「私の通報が、一番最初みたい」

「そりやまあ夜ですし、誰も見てまへんやろ」

「どうしよう。座間君。どうぞおつかれ。」

あおいはいつも勢いを無くして、おひおひしてくる。

「どうもせんでええんやないですか？」

夜のことやし生徒も先生もおらへんですよ。こには、プロの消防士に任せらるべきで……あれ？ あの人……」

小学校の近くへ来ると、一人の女性が、手を振りながら走つくる。

「どうしはったんですか？」

火事の事やつたら、もう通報しましたから、安心してください」

「ウチの子が……メダカを助けるつて言つて、校舎の中に……」

「まさか……富堂君？」

「え？ ウチの子を！」存じなんですか？」

「オレ、行きます」

言い様、座間はビッグホーンから飛び降り、職員玄関に向かつて走り出した。

走りながら、腰のストラップホルダーに手を伸ばし、小さな葉団扇に気を送り込む。すると、葉団扇は銀色に光り輝きながら、大きくなつていつた。

光が消え、新たに形を成したそれは、細長い木の葉を十数枚束ねて作つたように見えた。形こそうちわであるが、普通のうちわより二回り以上大きい。

玄関のガラスを蹴り破つて侵入すると、座間はすぐに階段を探し

た。

だが、既に一階には煙が充満していて視界が効かない。

「消えろっつー！」

叫ぶと同時に、周囲の土地から立ち上る土氣を風に乗せて、葉団扇から繰り出した。

風とも波ともつかない目に見えない力が葉団扇から発せられ、一瞬にして一階に充満していった煙が吹き払われる。

座間のもつとも得意とする術の一つだ。

地表から立ち上る、土氣を集めて、火氣を吹き払う。ちょっとした火事ならば、今の一撃で、ほとんど鎮火するはずである。たつた今まで、1m先も見えなかつた廊下が、きれいに見えるようになった。

「どうだ!? 富堂君……返事しろ……」

返事はない。

座間は、声を土氣の振動に変えて、校舎内すべてに送っていた。意識があれば、必ず反応があるはずだ。つまり、富堂君がいたとしても、意識を失っている可能性が高いということだ。

だが、すでに気を失っているのだとすれば、かえつて好都合だ。鳥天狗の本性を現しても驚かれる心配がないし、変化してしまえば人間体より機動力は格段に上がる。

座間は葉団扇をもう一降りして変化すると、翼をたたんだまま階段へ走った。

富堂君の居場所の見当はついている。

メダ力を室内飼育している、彼の教室か、屋上の池だ。もし力尽きているとしても、そこまでのルート上にいるはずであった。座間は、階段下から一気に翼を広げ、6年生の教室のある4

階まで飛んだ。

(屋上にいてくれれば……)

座間、あおいの張つた火氣封じの結界がある。
屋上緑化施設だけは、火も煙も来ないはずであった。
しかし。

「いた！」

富堂君は、教室から屋上に向かう途中の階段に倒れていた。
その腕には、しつかりとメダカの水槽が抱えられている。しかし、
いつたん葉団扇で吹き払つたはずの黒煙が、階段をもうもうと吹き
上がつてくる。

火事の際に上に逃げるな、といつのは、こひいう事があるからだ。
熱された空氣は、上昇する。上昇する熱に乗つて、煙が襲う。そ
こに含まれる一酸化炭素や、有機化合物の燃焼ガスが、容赦なく意
識を奪うのだ。

「富堂君！富堂君！……しつかりしいな！…」

座間は変化を解いて、富堂君の顔を平手でたたく。

「う……あ、座間さん……」

富堂君を抱いて、階段を下りようとした座間は、踊り場で踏みと
どまつた。

熱風が、黒煙を巻き上げながら階段室を上つてくる。

先ほどの葉団扇の一撃では、鎮火できないほどの大火事であるら
しい。渾身の一撃で効かないとなると、相当な火力である。こうな

つたら、結界のある屋上へ逃げるしかない。

「富堂君ー屋上へ逃げるで。富堂君は、今までビリヤードで屋上へ上つていたんや?」

「足元の……換気窓……」

「……やな?」

座間は、屋上階段室の床近くにある、明かり取りの窓を開けた。
「うーん、ここから、出入りしどったんかいー。」

その窓は、一見どう見ても……そう、子供であっても通り抜ける事は出来なさそうに見えた。

「腕が、出るんです。」

なるほど、富堂君は片腕と頭を、狭い窓に通すと、そのまま、まるで蛇のようくねらせ、通り抜けた。細身だとは思っていたが、ここまで体が柔らかいとは、座間も思わなかつた。たしかに、これでは誰も想像も付かないだろう。座間は舌を巻いた。

「よし。富堂君ー外から力ギを開けてくれやー。」

屋上の力ギは、外側からは開く構造になっている。屋上に出てしまいさえすれば、なんとか結界に逃げ込めるはずだ。富堂君がドアノブをガチャガチャと鳴らした。

「今……カギを開けます！」

「開けんなつ……！」

座間は鋭い声で叫んだ。

「お前……何もんや？」

座間の田の前の階段下に、白装束の少女が立っていた。熱風渦巻く黒煙の中に、何事もないかのように、ふわりと立つ少女。

一瞬にして、座間はこの少女が人間ではない事を感じ取っていた。

「座間さん……どうしたんです？」

外の空気を吸つて、元氣を少し取り戻した富堂君が、鉄扉を開けた。しかし、内側から、黒煙が立ち上り、目を開けられず咳き込む。

「あ……開けんな言うたやん……」

今度は、座間が煙を吸つて、朦朧としているようだ。

しかし、その目はしっかりと、階段を上つてくる白装束の少女に注がれている。

「ま……牧村さん……」

富堂君が、少女の名前をつぶやく。

「なんや富堂君……知り合いかい」

そう言はしたもの、座間は少女を睨みつけたまま、一切警戒

を解かない。

「……自殺した、クラスメイトです」

「そうかあ……そやうとは、思つたけど、な」

言いながら、座間は、じりじりと下がる。
背中には、富堂君をかばつたままだ。

「久しぶりね。亮君。どうしたの？こんなところで」

「答えんな。アイツは、お前のクラスメイトなんかやない。」

「え……？でも、幽靈だとしたら……」

「その子の、幽靈でもない、言つとんのや。单なる人間の幽靈が、
こんな火イ放つたり出来るかいな」

「じゃあ……これ……牧村さんが？」

「ひどい。ひどいわ。私、そんな事してない……」

白装束の少女は、顔を覆つて泣き始めた。

その間にも、宙に浮くように、ふわふわと、一人に向かつて近づいてくる。そして、じきらを向いて、ゆっくりと顔を上げた。

「そんな、ひどい事言つ人は……」

ぐるんつ。

少女の目が、裏返るように上を向いた、と見えた瞬間。

その下から現れたのは、金色の瞳であつた。

白目部分は、充血したように真っ赤であり、顔には、青黒い隈まで浮かんでいる。

ついに恐怖に耐えられなくなり、富堂君が叫んだ。

さすがに座間はその程度では、声も出さない

てやつて来ると、まるで、何かに弾かれたように、青い火花をあげて飛び退った。

「へつ。社長の火氣封じの結界に、反応したやないか。お前が、火氣を操る妖物やということは、お見通しや」

『ふん。あのじいちゃん、おじいちゃんがいたのよ、おじいちゃんがおだな
え、じやおだな』

少女の口調が、がらりと変わっている。

声も地の底から響くよ」な不気味な響きを帶びていました。

「何い？『その子供も』やて？昼間つから、一気に火気を集め
てたのも、お前やな？何のつもりや？」

「ねえが、しゅうじゅうせない」

少女の全身から、青白い炎が立ち上る。

炎は、少女と同じ形を残像のように残しながら、結界の周りを走り始めた。そして、次第に高さを増し、結界全体を覆い尽くす。少女が起こす風に乗つて、凄まじい熱が襲つてきた。まるで、見

えないドームのように、結界が炎を遮断していなければ、一人とも、とつぐに灰になっていたかも知れない。

それでも、輻射熱は防げない。強い熱が、じりじりと一人の肌を焼く。

「あ、熱いよ。座間さん」

「我慢しいや。男の子やろ」

「そうは言つても、そろそろ、普通の人間には、耐えられない熱になつてきていた。

「富堂君」

「は……はい」

「オレは、お前を助けたい。オレを、信じられるか？」

「…………？」

「どんな姿になつても、オレはオレや。それを…………信じられるか？」

「…………は……はい」

「ほな…………行くで！」

次の瞬間、座間は、黒い翼を翻して、飛び上がった。一瞬にして、鳥天狗の姿へと変化したのだ。

「う、おおおおおおおお……。」

座間は、氣を吹き込んだ葉団扇と降魔の剣を振りかざし、宙に浮かんで「ひらりを見つめる、白装束の少女の元へ飛んだ。

「な、何？」

座間は、驚愕の声を上げた。

突き出した降魔の剣に何の手応えもなく、少女の体を素通りしてしまったのだ。

「幻影……かつ……？」

降魔の剣は、座間の持つ氣が形づくった武器である。相手がたとえ幽靈であろうとも、ダメージを加えられるはずであった。

「そう、おもうか？」

少女は、怪しい笑みを浮かべたまま、空に浮かんでいる。

「ぐははは……。」

座間は、のけぞった。

火氣封じの結界を破つて、少女の手が伸び、座間の胸に触れたのだ。幻影では、攻撃される事はあり得ない。

「なんでもや？…………！」…………の……。」

葉団扇に更に氣を送り込み、座布団ほどの大きさに変えた座間は、

少女に向かつて打ち振つた。

「じうつ。

一瞬だけ、少女の姿がかき消え、再び姿を現す。まるで効いた様子がない。

「しもた。ここは、土氣が少なすぎる！－！」

座間は思わず叫んだ。

土氣とは、すなわち大地から立ち上る氣、大きくは鉱物の氣である。

木・火・土・金・水

陰陽五行思想では、大自然の氣は5つに分類されるとしている。それぞれの氣は、お互いに関係し合い、移り変わり、強弱、陰陽を持つ。

木克土。
火克金。
土克水。
金克木。
水克火。

相剋。それぞれの性質の氣は、決まった性質の氣に打ち克つ、という意味である。

また、

木生火。
火生土。
土生金。
金生水。
水生木。

相生。それぞれの氣は、決まった性質の氣を、増幅し、強力にする場合もある。

鳥天狗である座間は、土氣を操る。

相剋ではないものの、土で火は消せる。また、火生土、物を燃やした後の灰は土に還ることから、

火は、土氣を強化する性質をも持つ。

本来であれば、座間は、『うした火の妖物は、もつとも』『しやすい相手のはずだつた。

しかし、ここはビルの屋上である。

土氣を無限に立ち上らせる大地は、十数m下だ。しかもコンクリートの鉱物としての土氣では、ここまで強く燃え上がった火氣には、対抗しきれないのだ。

「く……くそつ……！」

池の畔に降り立つた座間は、上空に浮かぶ少女を睨みつけた。少女は、不気味な形相のまま、にたり、と笑つた。

結界の周囲は、ますます温度を上げていて、上空まで炎に覆われていては、今さら飛んで逃げる事も出来ない。このままでは火氣封じの呪符も、燃え出すかも知れなかつた。

いや、すでに見えない結界の境目が、揺らいできているのを、座間は感じていた。

「富堂君……あかんわ。今は、アイツに勝たれへん……」

「……」

「しつかり、そのメダカの水槽、抱えとるんやで？」

「座間さん？」

勝
て
な
い。

たしかに、今そう言つたはずなのに、何をしようとうのか？

富堂君の田は、そう言つていた。

しかし、座間は、その日には何も答えず、葉団扇を頭上に振りかざした。

「た…！」

まるで空気を切り裂くような、鋭い気合いが、座間の口から発せられた。すると、葉団扇は銀色の光を放ちながら、さらに大きさを増した。

「勝てへんなら、防御するまでや！」「

葉団扇は、巨大な羽のように、一人を包み込んだ。すると次の瞬間、熱気も煙もまるで嘘のように遮断され、同時に外の様子も見えなくなつた。

「ふー…… もかつた。座間さん、ありがとうございました。座間さん？」

富堂君は一息つくと、座間に話しかけようとして息を呑んだ。
鳥天狗の顔。腕。体。

それは、すでに味方であると認識していたから、驚きはない。

座禅を組むように座り込み、両手を頭上にかざしている。わずか
が、ロンフリーの土氣。それを吸い上げ、葉田肺に送り入る。

座間の作った、小さな土氣結界は、少しでも氣を逸らせば、周囲の火氣の圧力に押しつぶされてしまうのだ。

「心配……すなや。仕事はつたり、仕事」

苦笑に似て、座闇の腕からは、一筋、一筋と、煙が立ち上つていた。

§4 カラス

§4 カラス

5年前……座間典健くわまのりけんは某国立大学の工学系の2年生。まだ、普通の人間だった。

「なあ、半田あ……アイツ、何やつてんのやろな?」

「ああ……あの女? 見たとこ、六掘ろくくつてんのとくわくかな」

「なんでや?」

「そんなこと、オレが知るか」

座間は、H棟の大教室で授業を受けている。

箕島治郎教授の生態学概論は、教養課程の中でも、人気の授業だ。理由は、とにかく脱線が多く、余談に次ぐ余談。しかもその話が非常に面白いからだ。

学内最大の大教室であるにも関わらず、立ち見まで出るほどのはし詰め状態である。

『みなさん。私はその時、南極基地で初の釣りを試みました。

その時釣れたのが、この魚、私達がオングルダボハゼと命名し…

…』

授業は、開始からわずか20分ほどで脱線した。南極基地の話になると、長い。今回の授業時間も、9割が脱線で終わるだろう。だがこの話、前期にもした筈だが、忘れているのだ

ううか？

たしかに箕島教授の話は面白いのだが、2回聞くほどではない。座間は早々に授業に興味を失い、大教室の窓から、ぼおっと外を眺めていたのだ。

原野を切り開いて作られたこの大学の、敷地は広い。

新しい棟の建設予定地のつもりなのか、まだそこかしこに空き地が点在しているのだが、H棟の向こうの一際広い空き地……通称『I棟予定地』には、なぜか十数本のクルミの木が植えられ、ちょっとした雑木林と化している。

そのクルミの一本の根元で、女子が一人穴を掘っているのだ。

「なんか、美味しいもんでも、埋まってるんじゃねえの？」

「アホか。イヌと違つちゅうの」

それに、その女子はスコップなどを使つたく使わず、素手で、硬そうな土を掘り返している。

座間は、その姿に妙に気を引かれた。

「出席簿、書いたし、オレ、ちょっとフケるわ」

「あ、そう。じゃあ、また昼休みに、学食でな

「おつ」

教室を抜け出した座間は、クルミの木の下へぶらぶら歩いていった。

「なあ、おまえ……」

「何?」

洗いざらしのジーパンに流行遅れのジージャン。金属縁のメガネをかけたその女子は、見た事のある顔だった。

たしか、隣の生物学系の2年生だ。周囲の学生達に呼ばれていた名前は……そうだ。

「あ、おまえ、アカハラ?」

「ま、好きに呼べばいいけど……何の用?」

アカハラの田は、あからさまに座間のことを拒否している。

「いやあ、……何しどんのかな、思つて」

「あんたには、関係ない事よ」

「まあ、関係はあらへんけど……おまえ、泣いてるやん…?」

アカハラは、汚れた袖であわてて顔をぬぐった。
おかげで黒い土が顔に付くが、それはあまり気にしていない様子で、きっと座間を睨みつけた。

「泣いてなんかないわ。用がないなら、どうか行つてよ」

「いや……用がないっていうか……」

その時、アカハラの掘った穴の脇に、黒い羽が見えた。

「あ？おまえ、カラス……埋めどんの？」

カラス、といえばたしか、学芸棟の通り道の並木の一本にカラスが巣を作っていたはずだ。

最初は誰も気にしていなかつたのだが、ヒナが孵つてから急に親鳥が神経質になり、通る人すべてに攻撃を仕掛けるので、大学が撤去すると聞いていたが……

「埋めちゃ悪いの？」

「いや、悪くは……ないんちゃうかな」

座間は、何となく立ち去りがたくなつてアカハラの手元を眺めていた。

しかしアカハラは、そんな座間を振り向こうともせず、手早くカラスを自分が掘つた穴に入れるとさっさと土をかけて立ち上がつた。

「じゃね」

「ん……あ、まあ……」

座間は泥だらけの手のまま立ち去りうつとするアカハラの胸元に、何気なく手をやつた。

「ぎゃあ

座間は田を疑つた。赤い口を開けた奇妙な生物が、アカハラのジージャンのボタンの合わせ田から顔を出していたのだ。

「いやいや、アカハラ、ちょい待ちこや。何なんそれ？」

「だから、あんたと関係ないって言つてんでしょう」

「それ……まさか、カラスのヒナか？」

「違つわ」

「いや、それ、どう見ても」

「ハシボソガラス。のヒナよ」

「ああ……まあ、ええけど。ソイツ、ビツの氣いなんや?..」

「飼つちや悪いの?」

「いや、悪くは……いやいや、悪いんぢやうの!.. カラス
いうたら、害鳥やしつ」

そこまで言つた座間は、腹に強烈な一撃を食らつて呻いた。
アカハラの前蹴りが、見事に鳩尾に入つたのだ。

「害鳥?.. そんなこと、誰が決めたの?」

生きているだけで罪な生き物なんて、あるわけないじゃない!..
カラスがいなきや、昆虫も鳥も殖えすぎるし、生き物の死体は腐
るまで放置よ!.. 木の実を食べて種子を運び、森を作るのも彼等
なのよ!..

人間の通り道に、巣を作つたくらいで何よ!.. 巣立つまで、通行
禁止にすりやあいいじやない!..

なんで……なんで殺さなきやならないわけ!..

そう言われても、言い返すにも声すら出せない。

体をくの字に折つて呻きながら、しかし座間は理解していた。こいつ、アカハラは、駆除されたカラスをどうやってか盗んできたのだ。そして、親鳥は殺されていたが、ヒナは生きていた。それを自分が育てる。そう言つているのだ。

「お……まえ……そんなことして……」

「良くないですねえ」

急に座間の後ろから、甲高い声が聞こえた。

「箕島先生！」

アカハラが、目を丸くして声の主を見る。
よれよれのスース姿。ひょろ長い手足に、常に笑つたような顔。
ちょうど授業を終えた動物生態学の教授、箕島治郎が通りがかつたのだ。

「あなたの主張は正しいが、行動は間違つてゐる、と言わざるを得ません」

「……」

「親鳥を失つたヒナを人間が育てれば、その人間を親、あるいは仲間と認識してしまいます。結果、群れにも加われず、人間にも受け入れられない、歪な存在になつてしまします。
つまりあなたは、一生、そのカラスの面倒を見なくてはならなくなるのですよ？」

「覚悟は……あります」

「カラスはもともと大変頭が良い。ですから、人慣れし過ぎたカラスの悪戯は想像を絶します。

しかも鳥の寿命は意外に長い。大事に育てれば、20年は生きますよ？……20年後、あなたは何歳ですか？　その時何をしていますかね……？」

「そ……それは……」

「ま……待つてえや、先生」

まだ痛む腹を押さえながら、座間が立ち上がる。

「何か？」

「先生ほどの偉い専門家なら、そのヒナを、ちゃんとカラスとして育てる方法もご存じなんと違いますか？」

「ふむ、なるほど……方法が無くはありません

「どうすれば、ええんですか？」

「親ガラスの頭を使って、工サやり用の手袋を作るのです」

「うえつ！？ほんまですか？」

「べつに他の素材を使っても構いませんが、一番手つ取り早いでしょう。その上で、人間の姿を一切見せずに育てます。録音した、子

育て時のカラスの鳴き声を聞かせながら、ね。

そうすれば、子ガラスは人間に育てられたことに気がつかず、健全なカラスに育つ可能性はあります」

「分かりました。やります！」

アカハラは、すぐさま先ほどの死体を掘り起し始めた。

「お、おいアカハラ……それでええんか？」

「……うん。ありがと、ええつと……あなた名前は？」

「星座の座に間つて書いて、くじま、や。くじま のじとも」

「座間君ね。私の名前はね、あおいよ。圓野あおい」

「ええ？！ アカハラちやうんか？」

「アカハラはあだ名よ。アカハライモリ、たくさん飼つているから」

「た……たくさんやつて？」

「うん。五百ほど」

それを聞いた座間は目を白黒させていた。たしかにイモリ百匹と比べれば、カラス一羽を巣立つまで世話をするなど、何でもないことがのよくな気がした。

箕島教授は、既によく知つた顔なのか驚きもしない。

「では、圓野君。カラスの鳴き声のじりが必要でしょう。私の研究

室へ寄りなさい」

「はい先生。
……じゃあね。座間君。蹴つたりして「ゴメン。また……会えるといいね」

アカハラこと圓野あおいは、初めて見せる愛らしさ笑顔を座間に向けて、そのまま教授の後について去っていった。

「また、会える……か」

だが、この大学の構内は広い。
それから、学部も違う座間とあおいは、再会を果たさないまま日が過ぎた。

§5 山の神の田

翌年の十一月一十六日。クリスマス。座間は所属している登山サークルの、クリスマス会兼、忘年会コンパに出席していた。

登山サークルであるから、会場は山である。大学近くのトーハンのキャンプサイトに、酒や鍋料理を持ち込んでの宴会だ。

「座間センパイ。クリスマスおめでとうございま～す」

後輩の女子達が、座間のジョッキに日本酒とビールを同時につぐ。登山サークルとはいっても、座間達は本格的な冬山登山などはしない。

トレッキングやハイキング中心であるため、女子部員も多いのだ。

「うわ、何しよんのこれ。ミックスはやめえ、言つとるやう

「え～？ 座間センパイ、私達のお酒、飲んでくれないって言つてますかあ？」

「飲めるかい。しかもなんやこの量？」

「まあまあ、可愛い後輩の酒だろ？ そつまわずに飲んでやれよ

同期の友人、竹内がにやにやしながら言つ。

昼過ぎから準備を始めたものの、道具の調達やらなんやらで手間取つてしまい、結局夜も9時過ぎてから始まった宴会は、盛況のま

ま口付を越えようとしていた。

「あんた達、何してんのー?」

その時、座間達の背後の闇から鋭い声が掛けられた。

「ハレ、シーズンオフは立ち入り禁止のハズよ?」

「いやいやすんまへん。勝手に使つてしまつて、すぐ片付けますよ
つて……つて、あ? たしかお前……」

相手が管理人か誰かだと思って謝りかけた座間は、そこに見たこと
のある顔を見つけてきょとんとした。

「圓野あおいよ。たしか座間君……だつたつけ? ダメよこひせ。
片付けなんかどうでもいい。全部ハレのままにしておけばいいから、
早く逃げて」

「逃げてる……ほんまの管理人でも来る言うんかい? そりやあ、
勝手に施設を使つたのは悪かつたし、怒られるかも知れへんけど……

.....

「違うのよ。

一から説明しているヒマはないけど、あなた達は絶対に来ちゃいけない日に、山に来ちゃったのよ」

「なあ座間。誰? ハレ、知り合? 」

竹内がニヤニヤしながら聞く。

あおいは何故か山伏のような、和装の白装束である。たしかに変

わった格好ではあったが、この前の流行遅れのジーンズ姿よりも格段に似合っている。

もともと素材は悪くない、と座間も思っていたが、この凛とした姿はたしかに綺麗だ。何に緊張しているのか分からないが、切羽詰まつた雰囲気がなお一層あおいを美しく見せているようだ。

「あ？ まあ……な。

なあ、圓野？どうして、こんな夜中に逃げ出さなきゃならんのや？」

「…………あなた達、ここに何人で来たか、覚えてる？」「…………あなた達、ここに何人で来たか、覚えてる？」

からな

「そりゃあ、十五人や。ちゃんと、昼間の買い出しが一緒やったからな

「へえ、十五人？ それじゃあ、テーブルの上に、いくつコップが

あるか数えてみて

「えーと……」

コップの数は、十八だった。

「そりゃまあ紙コップやから、いくつも使うやつはおるやろ？」

「取り皿も、割り箸も十八よつついでに言えば、席数もね」

「何が言いたいんや？」

「妖怪の仕業なのよ」

あまりに唐突な答えに、座間は思わず吹き出しそうになつた。それではネット上でたまに見る、出来の悪い怪談のようではないか。

「いつの間にか、オレらに三人も妖怪が混じつて宴会しついた言うんか？」

「違うわ。いつの間にか、三人、存在を消されてしまつた人がいるのよ」

「何アホな事、言うとんのや！」この世に妖怪なんかあるかいな！！！
オレらは、昼からずっと十四人一緒に行動しどつたんや。仲間のことを忘れるわけないやろ！？」

「何人……ですって？！」

「だから十四人……あれ？」

あおいも座間も……周囲の者達全員が、黙つた。
もはや、違和感は隠しようもない。

「みんな、固まって……！」

あおいの声に、全員が一つのテーブルの周りに集まつた。
あおいはそのテーブルの周囲の地面に、何か書いた紙を置き、メント用のペグで打ちつけていく。

「結界を張つたわ。

絶対にこの範囲から動かないで。こんなもんで、山神の使いを退けられるかは分からぬけど……」

「や……やまがみ? いつたい、何なんや。オレらに」も分かるようにな
説明してくれ」

「これが神隠しよ」

「神隠し?」

「旧暦の十一月七日は、山の神の日。
人間は山へ入っちゃいけないのよ。入れば、神隠しに遭つて帰れ
なくなる。それが、新暦で言えば十一月二十六日。つまり今日な
よ」

「な……なんで圓野は、そんな日^にこんな所にいるんや?」

「修行してたのよ。日付が変わる前に、帰るつもりでね。
そしたらここに人間がいるって、教えてくれたもんだから」

「教えてくれた? 誰が?」

「私の師匠。

今はここにはいないけど……味方よ」

「存在を消される……って、どうこう事なんですか?」

一年生の女子が、おずおずとあおいに質問する。

「もともといなかつた事になるの。この世のどこにも。

山神の使いは、人間の存在、つまりこの世との関わりを消してか
らその人間を食べるのよ」

その時

「おーい。座間あ、竹内い」

後ろの茂みからガサガサと音がすると、一人の学生らしき男が姿を見せた。

「おお？ 酒井やないか。

あれ？ お前、今までどこに行つとつたんや。つていつか……そもそも今まで、何でお前の事忘れとつたんやろ？？」

座間は、とんちんかんな自分自身の反応にとまどいつつ、酒井の顔を見た。たしかに、よく知るサークルメンバーの一人だ。

「んなこと、どりでもいいだろ。

お前らこそ、何やつてんだ。そんなとこに固まつてやあ？ こりち来いよ。俺達と飲み直そうぜ」

「行つちやダメよーーー」

ふらつと立ち上がった座間を、あおいが両手で押しつどめた。

「罷よ。酒井さんつていうの？ あの人。

下の名前は？ 学年は？ 学部は？ ビル出身？」

「そりゃあ……」

言いかけた座間は、今の質問に何一つ答えられない事に気がついて愕然とした。

「山神の使いは、存在を消すだけじゃなく作り出す事も出来るわ。でも、細かいディテールまでは無理なの。」

「サークルに、最初から酒井なんて人はいなかつたのよ」

「そやかて……」

そう言われても、自分は友人として酒井を認識している。それは確かなことだ。その事が、逆にあおいへの疑いへと変わつていった。本当にこの女の言つことを聞くべきなのか？

「おい、座間あ、その子、何言つてんだ？」

「あ、いや、なんて言つたらええんかな……」

座間は、困つたような顔であおいを見た。あおいも座間の表情から、何を考えているか読み取つたようだ。

「分かつたわ。今、証拠を見せてあげる」

そう言つと、あおいは振り向きやがれ、その酒井といつ男に向けて何か赤い物を投げつけた。

「うぎやあああ……」

酒井は、魂消る悲鳴をあげて飛び退つた。

「な、何投げたんや？」

「熾火よ。山神の眷属は木氣の妖だから、火氣に弱いの」

「いやいやそんなん投げたら、普通の人間でも、そりゃあ逃げるやうやく」

「あれでも、そつ言える?」

あおいの指さす先には、毛むくじゃらの巨大な獣が、火を怖がつてまるで踊るように暴れていた。普通の人間より、あきらかに一回り以上でかい。しかも類人猿のような体に、顔だけは先ほどの酒井といつ男のままなのが、なおりつそう不気味に見える。

「うわあつーー！」

「あやああああーーーー！」

「ば……バケモノつーー！」

半信半疑で座間達のやつとりを見ていた他のメンバー達も、ようやくあおいの言つ事が本当だと理解できたようだ。

「あれが正体……山神の使いで、?つて妖なのよ

正体を見破られた?は、人間の顔のまま悔しそうにこちらを睨むと、現れた時のように一瞬にして數の中へ飛び込んで消えた。

「じゃあ、なにかい……いなくなつたつていつ連中は、みんな、あの?とかつてバケモノに……」

「言つたでしょ?存在を消されたのよ。今どつなつてているのかは、私にも分からね。男は食われるらしいし、女の子は生かされていても……子供を産まされるって言わてるわ。あいつら、雄だけ

しかいないから、自分達だけで繁殖できないのよ

「こやあああ……もつやめてえええ……」

あおいの説明を聞いていた女子の一人が、緊張と恐怖に耐えきれず、頭を抱えて座り込み、悲鳴を上げた。

その途端。

「'つほ。'つほほ。'つほつ……」

「あやあつ。あやああつ」

女の悲鳴に反応したのか、頭上の枝を揺すつて叫ぶ者がいる。先ほどの^{やま}の仲間達に違ひなかつた。結界の周囲の茂みからも、足を踏みならす音がする。少なくとも一〇匹か、それ以上の気配が、彼等を取り囲んでいた。

「朝が来るまで、こいつこいるしかない……つてことか?」

「いいえ、朝は関係ないわ。今日こいつ田^やがままずこのよ。今からだと、約23時間。田付が変わるまで、この結界から出ない事ね」

「明日の夜、バイト入れとつたのになあ

「ねえー!アーティレとかどりすんのよー!」

「消えたくなかったら、何もかも結界内で済ませる事ね

あおいはこべもない。

「なあ、そんなんことよつ……なんで、そない、警戒しどんの？」

座間の言つ通り、あおこは、結界内は安全であるよつに言つながら、両手に呪符を持ち、まつたく警戒を解いていなによつに見える。

「私は、修行中だつて言つたでしょ？」

「この結界だつて、完全かどうか分からぬのよ……もし壊れたら、『こめん』

「なんやで？」

「じゃあ、このこなつても、助かるかどうかは分からんつて事か？」

「わつよ。でも、ここから出れば、確實に消されるわね」

「わ……わ……うひい……！」

先ほどから、何も言わずにガクガク震えていた竹内が、突然走り出した。

「ダメ……止めないと……」

あおいが叫んだ時には、すでに竹内は結界を走り出していた。そして、そのまま土の山道を駆け降り、駐車場に停めてある、車へ向かっていく。車で自分一人逃げるつもりなのだ。

駐車場には外灯があり、全体を薄明るく照らしている。竹内が運転席のドアに手を掛けた、と見えた瞬間。

頭上の木々から、黒い影が、ひとつ、ふたつ、みつ。

音も立てずに、飛びかかっていくのが見え……そのまま竹内も、その黒い影も背後の闇に溶け込むよつにして、見えなくなつた。消え去るまで悲鳴一つ聞こえない。

「た……た……」

座間は、竹内の名を呼んでいて、もつね前も顔も思って出せない事に気がつき、愕然とした。

「洩され……たのか？」

「…………ええ」

あおいは、助けられなかつたことを悔いているのか、自分の唇を血が出るほど強く噛みながら答えた。

§6 山の神々

座間達は、疲れ果てていた。

なにより、この寒空の中、焚き火が消えかかってしまっているのが問題だった。結界内に、薪が無いのだ。

残り13人になってしまってから、すでに4時間。いや、まだ、たつた4時間と言つべきか。あおいの言う、「明日」までは、まだ18時間もある。

それなのに、体力も気力も、限界と言つて良かつた。

もちろん、座間一人であれば、耐えきる自信はある。しかし、あおい以外に、13人中、女子が5人もいるのだ。彼女たちの体力では、真冬の屋外で、焚き火なしというのは、無理だ。

食料と酒が、多少残っているのが、唯一の安心材料といえた。

「圓野……」

「なによ?」

「さつきも聞いたか知れんのやけど、消されるって、どうこうことなんや? なんで、その?とかつてバケモノが、そんなすごい力を持つてんのや?」

「消すつていつも、物理的に消すワケじゃないわ。その人間と、周囲との関係性を、遮断する……つまり存在の意味を消すのよ」

「イマイチ、分からへんな」

「私もそれ以上は説明できないわ。じつやつてやるのか、とか聞かれても、もつと分からない。」

でも、どうしてそんな事が出来る妖なのかは分かるわ

「やあ、なんですか？」

「山神は本来、山を守る神様よ。」

あなたも登山サークルなら、いくつか山を見ているでしょ。山と、むき出しのガレ場や倒木、土砂崩れ……。そうしたものって、すこしくあこ山と、そうでない山があるでしょ？」

「やあ、山と、山と、そんな、地質や、気候のせいで違つの？」

「もちろんそれもあるけど、それだけじゃない。」

山神様はね、そういう、自分の山が荒れるような災害があると、それを消すのよ」

「消すって……山崩れとかを？ もし大災害で、すでに写真撮られてたり、報道されてたりしたらどうなるんや？」

「分かつてないわね。」

災害を元通りに直すんじゃなくて、存在そのものを消すの。なかつた事にするんだから、報道も記録もすべて消えるのよ」

「それじゃあつまり……山神様とか？とかってのは、普段は人間を消すんやなくて、災害を消して、山を守つているって事か？」

「ええ。やあこいつ」と

「じゃあ、なんで今は、俺達を狙つんや？！」

「さつきも言つたじゃない。日が悪いの。

山神様も、その眷属やまいの？も、いつでもいついているワケじゃないのよ。一年にたつた一度、山の神の日だけ山を見回つて存在力を発揮するの。だからその日、山にいるものは、すべて生け贋になるのよ」

その時

「おーい。おまえら何やつてんだよ？」

いきなり、座間達のいるテントサイトの反対側から声が掛かった。のんびりした優しげな声だ。見ると、こちらとそつくりなテープル、焚き火があり、あちらにも数人の男女が、座っているのが見える。

『それでさあ、聞いてよ。あのセンセイつたら、やんなつちやうのよ』

『へー。そんな事あつたんだー？ウケルー』

女子達の談笑している声まで、ハッキリと聞こえる。

こちらと違うのは、向いにはほのぼのとした雰囲気であり、焚き火もまだ赤々と燃えている点である。その中の一人が先ほど声を掛けたらしい。そして、その一人が砂利を踏みしめる音を響かせながら、こちらへ向かってきた。

「また、来たわよ。無視しなさい。」

あおいは、全員に鋭く命令した。

「おこ、座間あ。お前ら、何やつてんだ? ホラ、いつから来て歸りつ
せ?」

「…………」

座間は答えない。

「分かったよ。じゃあ、女子だけでも来いよ。そんな」としてたら
つつつつつつつつつつつつつつつつつつつつつつと凍死しちまう
だろ? ほり、いつか来て火にあたれよ」

その言葉を聞いて、固まつて震えていた女子達が顔を見合わせ、
全員が、すつと立ち上がった。

「よせ……やめえ……」

座間の鋭い叱責が飛ぶ。

「でも……でも……もう私達……限界なんです

女子達の言つのも分かる。

修行中とやらのあおいはまだしも、普通の女子には、この状況も
環境も耐えられる範囲を超えている。
しかし。

「他のヤツらみたいに、消えたいんか?」

「消えるかどうか、分かんないじゃないですか。この人、どう見て

も田中先輩ですよ?「

「さつ も、圓野が言つたやうに?」

「その、田中先輩とやらの、学年は?専攻は?下の名前は?初めて会つたのはいつや?」

「何バカな事言つてるんだ。君たち、ああおこで」

「田中先輩」が、手をさしのべる。

「そこへ……ふらつと、一人の女子が手を伸ばした。結界からわずかに指が出た。その指を、「田中先輩」が素早く鷲掴みにした。

「あやあつ……」

「紅谷さん……」

座間が、その女子の名を叫び、飛び出した。

「ダメよ……座間君……」

あおいの声が飛ぶ。

「田中」は紅谷さんの指先を握つたまま、走り出していた。

しかし数歩も進まないうちに正体を現し、真っ黒な毛を全身に生やした姿に変わっている。紅谷さんは、まるでマネキン人形のように軽々と引きずられ、声も出せない様子だ。

その後を、座間が追う。

「やめい」
?のダッシュはまさに野生の獣と言つて良かつた。しかし長身の座間は、飛び出す判断が早かつたせいもあってか、なんと、走り出

して數十cmで？に追いついたのだ。

「いつの時は、上半身にタックルしても、効果は薄い。ましてや、相手は重量級のバケモノだ。

座間は、怪物の膝あたりへ向けて、思い切りタックルした。

「ほきやああつ！？」

やまこの中の声が響く。おそらく追いつかれるとは予想もしていなかつたのだろう。しかも運良く座間は、両手で怪物の両膝に抱きつく事が出来た。無防備だった？はスピードを抑えきれずに前につんのめり、紅谷さんの手をつかんだまま「ぐいぐい」と転がった。

「い……痛い……」

？は、やつと紅谷さんの手を放したが、つかんだまま振りまわされた紅谷さんの腕は、おかしな方向へ曲がっている。引きずられたせいで、他に怪我もしているのだろう。

地面にぐつたりと横たわったまま、呻いている紅谷さんを見て、さすがの座間も頭に血が上った。

「ぶつ殺す！」

座間は、タックルの勢いを殺さないまま怪物に馬乗りになり、？の顔面にパンチを入れた。

ひとつ。ふたつ。みつ。

恐怖よりも怒りが込み上げ、止まらない。どんな理由があつと、仲間を消し、今まで後輩の女子を傷つけたこの化け物を許せない気持ちが、すべての感情を上回っていた。

「ダメよ……離れて……」

後ろからあおいの声がする。何がダメなんだ……と、思った次の瞬間、田の前にあおいの顔があつた。

「な……」

ほんの一瞬、座間の手が止まる。

そのあおいが、にやつと笑うのが見えた途端、強烈な痛みが走り、座間の動きが止まつた。

「か……かはつ……」

息が出来ずに、座間は呻いた。

やられた、と座間は思った。^{やまつ}が得意の変身術で、顔だけをあおいに変えたのだ。

「座間君つ……」

後ろから迫つてくるあおいの声は、悲痛な響きを帯びていた。脇腹の感覚がない。

何をされたかは分からないが、^{やまつ}の攻撃を受けた事は確かであつた。それも怪我の程度は軽くないようだ。口の中に鉄臭い臭いが込み上げてきている。

終わりか。

と、座間は思った。

どうやら座間典俱、という人間はここまでのようなだ。

で、あれば……

いや、で、あつたとしても……それでも、おとなしく消されてやる理由などない。

「圓野……」

座間は、わずかに首だけを回して振り向き、後ろから自分を追つて、必死で駆けてくるあおいの姿を見た。遠い。女の足だから、座間の元へたどり着くにはまだ数秒ありそうだった。

ほのかな想いが、胸を焼く。

だが、まだ恋というには、遠い想いだった。
それでも。

「圓野……お前だけは……」

そう呟くと、全身に残された力を振り絞るようにして右拳を固めた。

「つおおおおおおおーー！」

獣のように吼え、目の前の怪物に右拳をたたき込む。
その瞬間。

大地から立ち上る、何かを感じた。

自分の背後の、山々の存在を感じた。

土、石、岩、そいつたもので、大地も山々も出来ている。

それらの重力を感じた。

それらの物質すべてが、その質量を存在力として、強く、強く、座間を引き寄せている。その力は、自分に使えるものだ。そう感じた。

拳の速度に、山々の重力が乗る。

拳の重力に、山々の存在力が乗る。

「ほきや……」

叫び声をあげかけた？の腹は、あっけなく座間の拳で貫かれていた。

「「うふあ」

怪物の口から吐き出された黒い血が、座間の顔にかかる。そして怪物じみた？の姿は、背後の景色に溶けるように消えていく……田の前には、小さなサルの死体が転がっていた。何が起きたのか自分でも理解できず、座間はふらつと立ち上がった。

「ああやあつーーああやあつーー」

「ほあーつほつほつほーー」

周囲の木々から、怒りと恐怖の入り混じったような声が聞こえ、木の葉や枝が大量に降り注いできた。

それに混じって黒い影が次々に地面に降り立ち、座間に襲いかかる。影が触ると、腕が、足が、顔の半分が……体の部分が、ひとつ、またひとつと消されていく。

それらの攻撃を数瞬で受けた座間は、力を使い果たしたのか、まるで木偶人形のようにその場に倒れた。

そこへ、やつと追いついたあおいが、座間を守るようにして呪符を持つて立ちはだかつた。

「大丈夫？え……つと……ダメ、思い出せないーー」

あおいは必死で座間の名を思い出そうとするが、どうしても思い出せない。

消されてしまったのは、体の部分だけではないようだ。

「おやめ……おまえ達……」

その時、聞いた事のない、女性の声が響いた。

いや、その声は、座間も、あおいも、結界内にいる生徒達も聞いた事はある。だが、その女性は、ここにいるはずがない人間だ。

「わらわが神事に出ている間、勝手なマネをしておくれだね？」

林の奥から姿を現したのは、白い和装の中年女性だった。
あおいの姿と違つて山伏風ではなく、長い裾は地面近くまであり、
薄紫の帯には、桐の花が描かれている。ちよづび、時代劇の奥方の
ような服装に見えた。

「わ……鷺田センセイ？」

結界内にいる、女子の一人から声が上がる。
いつもの授業時間とは違つて時代がかつた口調ではあるものの、
たしかに、目の前に現れたのは、植物生態学の鷺田いづみ教授に見
えた。だが、これまで知つた顔だと思つた人間は、ことじとく？^{やまじ}の
まやかしだったのだ。

さすがに、誰からも安心の声は漏れない。

鷺田教授が現れると同時に、急に周囲の木々は静まり返つた。し
かし、^{やまじ}達の気配……秘かな息づかいや、怯えているような小さな
声は、隠しようもなくあおい達の耳に届いている。

「わらわの仕事は、知つておるか？……よくも、教え子達をその手
に掛けておくれだね？！！」

鷺田教授が怒りの声を上げ、すつと右手を挙げると、頭上で怪物達の悲鳴が上がった。

「ぐわやつーー！」

「わやふつーー！」

「つーつー！」

様々な悲鳴と逃げまどりのような気配と共に、体にツル植物を巻き付かせた?達が地面に次々と落ちてきた。

途中で引っかかる、宙びりになるものも、地面に激突してもがくものも、中には頭から地面にめり込んでしまい動かないものもある。

「和泉御前殿。

やまこ達は、御前の留守中、己の務めを果たしたまで。どうか、そのあたりで許してやつてはもううえませんかね?」

駐車場からの斜面を、普通に歩いて登ってきたのは……

「箕島先生ー?」

また、結界内から声が上がる。

今度は、あの生態学概論で有名な箕島治郎教授であった。

「みなさん、本当にお疲れ様でした。

ああ、そのままで結構です。私を私だと信じる必要はありません。何があつたかは、大体承知していますから」

「師匠……」

あおいだけが、満面の笑みで箕島教授を出迎える。

「圓野君、お疲れ様でした。遅くなつて申し訳ありません。思いの外、和泉御前の行つておられる神事の場所が見つかりにくかったものでね」

座間は横たわつたまま、なんとか状況を把握しようつと努めていた。独特の甲高い声と、理屈っぽい言い回しは、たしかに箕島教授のものだが……座間は確認しようとしたが、立ち上がることはおろか首を回すことも出来ない。

「圓野君。修行中の身ながら、よくみなさんを守つてくれましたね。しかし、正直驚いたのはこの青年です。一体だけとはいえ、まさか人間の身でやまこを殺すとは……」

箕島教授は、座間に近寄ると上半身を抱き起こした。

「追い詰められて、潜在力を發揮したのでしょうか……あなた、お名前は？」

座間は、返事をしようとした。
しかし、まったく声が出ない。
それどころか、自分の体すら、どこにあるのか分からぬ。
自分で動こうとして初めて、味わつた事のない不気味な感覚が襲つてきた。肉体だけでなく、思考もまとまらず、体も心も、自分のものなのかどうかあやふやである。

「ふむ……」
「ふむ……」
「ふむ……」

肉体や魂が、部分的に消されている。?達は、仲間を殺されてよ
ほど怒つたようですね。」

「「」の...誰なんでしょう?」

その、あおいの言葉を聞いて、座間は大きくショックを受けた。自分の存在を、部分的に消されているせいだとはい...あおいとの関係だけは、消されたくなかった。いや、何があろうとも自分を覚えていて欲しかった。他の誰に忘れられようと、あおいにだけは。

まとまらなかつた思考が、そのショックのせいか、急激にクリアになつっていく。

「み...しま...せんせい」

「ほつ、「」の状態でしゃべれますか。それもまた大したものです。圓野君。この青年は私が見ましょ。あなたは鷺田先生を手伝つて、消された人達を助け出して来て下さい」

「え?みんな無事なんですか?」

「無事かどうかは分かりません。

しかし一年に一度の獲物を、早々に食い尽くすほど?達も愚かではないでしょ。生きてさえいてくれれば、鷺田先生なら見つけ出せるはずです。怪我をしている人もいるでしょから、手当の方も頼みますよ」

「分かりました」

箕島教授は、あおいが立ち去るのを待つて座間に話しかけた。

「あなたは、存在を部分的に消されました。これは、非常に厄介な状態なのです。」

教授の表情は悲しげだ。

「いいですか？」

丸ごと消されたあなたの友人達は、おそらく存在を回復することができます。いえ、正確には後付けで関係性を上書き構築するだけなのですがね」

それを聞いて、動けない座間の顔にも安堵の表情が浮かぶ。

「消す。といつても、物質として存在する人間を物理的に消すなどという事は神にも出来ません。^{やましい}がやつたのは、友人や家族、学生、人間として……など、その人間と周囲との関係性を、別の存在にして向けてしまったのです。

すると、結果的に、無関係となつた人間には認識できなくなる。
これが^{やましい}の能力です」

「いったい……何に向けたんです？」

「さあ、そこが問題なのです。

彼等はその関係性を、森羅万象、あらゆるものに向ける事が出来ます。もし何に向けたか分からなければ、その内容も分かりません。つまり、上書きしようにも情報がない。しかし今回は、目的がハッキリしていますからね。

子供を産ませたり、生かしておいてたまに食つたりするためには、結局自分^{やましい}つまり、^{やましい}達自身に関係性を向けるしかありません

箕島教授の説明は、納得のいくものだつた。

「もちろん、関係性の回復には和泉御前……鷺田先生に頼る必要がありましたが、消された人達も含め、全員無事に帰れる可能性が高いでしょう。

ただ、あなただけは、そうはいかない。」

「な……ぜ？」

「彼等は仲間を殺されて、よほど怒ったのでしょう。

あなたの部分部分の関係性を自分達に向けず、でたらめに飛ばしてしまったようです。飛ばされた先が、その辺の石ころなのか、海の向こうの誰かなのか……もう分かりません。そしておそらく彼等自身にも分からいでしよう。

関係性が何に向いたか分からぬ限り、そのすべてを回復させるのは無理なのです」

「……」

「あなたには、一つの選択肢があります。

一つは、鷺田先生……山神たる和泉御前に一旦すべての関係性を消してもらい、その後に、完全に架空の関係性を後付けしてもらうこと。

もう一つは、今残っている関係性をそのままにしておき、その上に別の存在の関係性を上書きすることです」

「つまり……どちらにしても……オレは別人になるんですね

「そう……なりますね。しかし、前者のやり方は正直お勧めしません。何故なら、完全に架空の関係性は、その詳細に必ずほころびが

出ます。

つまり、あなたは自分の存在に常に違和感を感じ続ける事になります。そのせいで、正気を保てなくなってしまった人間を、私は知っています」

「では……」

「後者のやり方の場合……あなたは、今起こったすべての記憶を残す事になります。他の方達は、圓野君を含め、記憶を消させてもらいますが、あなたの場合は、上書きする存在との関係性を共有するためにも、私との関係性を維持する必要があるからです」

「わかりました。

何も……覚えていない……より、別の存在になってしまっても……

……覚えていたい」

座間の脳裏に浮かんだのは、あの時の笑顔……カラスの子を抱いたあおいの笑顔だった。

「もうひとつ。

死亡したばかりの人間でもいれば別ですが、残念ながら、今はこれしかないのです。人間でないものの存在を重ねられる……つまり、あなたは純粹な意味で人間ではなくなります」

箕島教授が懐から取りだしたのは……カラスだった。

死体……かと思ったが、かすかに動いた。瀕死という事らしい。

「まったくの偶然ですが、ここに来る途中に見つけたのです。おそらく、もう助からない」

「オレは……カラス人間……になるんですか？」

「カラス人間ではありません。鳥天狗。ですよ。

ご心配なく、私は大天狗です。箕島岳を預かる者で、真の名を次郎坊といいます。あなたは、私の息子になるのです」

それを聞いて、座間は安心して目を閉じた。

「あなたは、天狗としての素質があります。こんな事故が無くても、スカウトに行つたかも知れません」

「天狗様つて……もつと重々しくて、無口な方がと……想像していました」

目を閉じたまま、座間が呟く。

「もちろん。そういう天狗の方が多いですよ。

私は、口数が多く俗っぽいと、よく太郎坊に怒られます。しかし、仕事柄、こういう性格なのは仕方ないのですよ。なにせ、私と和泉御前は山の環境を守るために、それぞれ植物と動物の生態を人間に教えることを……おや、いけない」

箕島教授はあわてて座間の首に手を当てて心臓の動きを確認した。いつの間にか、座間の呼吸が止まっていたのだ。

カラスだけでなく、座間自身も瀕死だつたのだ。

「和泉御前！！ 和泉御前！！ 少し、こちらを急いでもらえませんか！？」

座間の意識は、暗闇を飛んでいた。

いつの間にか、背中に黒い羽がある。
自分は、すでにカラスなのだと理解した。

次の瞬間。目の前に座間自身が現れて、死ぬほど驚いた。声を出そうとする。「さやあ」という声しか出ない。

そういふするうち、目の前の自分が、前蹴りを食らって倒れる。箕島先生が現れ、あおいがカラスである座間の飼育を主張した。

（ああ、そとか……オレは、あの時のカラスやつたんやな）

それから、カラスである座間は、あおいの世話を受けて育つた。あおいは、カラスの頭型の手袋を使って、必死で世話をしてくれ。姿を見せないように、ケージを紙で覆い、親ガラスの声をテープで流す。

だが、子ガラスの座間には、誰が自分の世話をしてくれているのか、誰が自分を救ってくれたのか、よく分かっていた。あおいは、ちらちらと心配そうに、覆い紙のすき間から顔を見せるのだ。

（ありがとう。君がそう願うなら、オレは山へ帰るよ）

巣立ちの日。

子ガラスは、一気に飛び立つ。

出来るだけ、振り向かず。出来るだけ、元気よく。あおいが心配しないように。

真っ直ぐに山の麓の林へと飛び込んだ。しかし、そつと戻つて見ていたのだ。寂しそうに籠を抱えて帰るあおいを。涙を我慢して、自分の頬を叩くあおいを。

野生の生活は厳しかつたが、なんとか冬を生き延びた。

春。恋敵を蹴散らして、妻を手に入れた。妻は口うるさいが、美

しいカラスだ。子供達も無事に巣立つた。その年は食料が豊富で、2回子育てが出来た。

秋が深まり、また冬が来る。できれば、来年もまた今の妻と巣作りがしたい。

そう思った。

空からふと、河川敷を見ると、きらりと光る物がある。光り物は大好きだ。妻へのプレゼントにもちょうど良い。だが、くわえて引つ張つてみると、透明な糸が付いていてなかなか外れない。

（なんだこれは……）

口の中に痛みが走り、鋭い何かが突き刺さったのを感じた。さらに透明な糸が絡まる。喉が閉まる。

（しまった。これは……）

それは、河原にうち捨てられていた釣り道具であった。カラスである座間は、捨てられたルアーを飲み込んでしまったのだ。意識が遠のく中、枯れ草を踏みしだいて近付いてくる人影があった。その姿がかろうじて見える。

（箕島……先生……）

抱き上げられる感触があつて、座間はふたたび暗闇へと意識が落ちていくを感じた。

＊＊＊

＊＊＊

＊＊＊

＊＊＊

＊＊＊

「う……うへ

田を覚ますと、真っ白い天井が座間の田に飛び込んできた。

田を覚ます？

座間はハツキリしない頭を軽く振った。田を覚ました以上は、それまで寝ていたということになる。自分は、たしか小学校の屋上で葉団扇で火気を防ぎ、富堂君を守っていたはずだ。

ここはどこなのだろ？

「やつと田を覚ましたみたいね」

声を掛けられて、ようやく側にいる人物に気がついた。

笑みをたたえて座間の顔をのぞき込んでいたのは、葉子であった。あおいでいることを、少し期待していた座間は軽くため息をついた。

「あらあら。
社長じゃないからって、その態度はないでしょ？ あたし、ずつと側にいてあげたのに……」

「え……あ……そらあ、すんまへん」

すると、葉子はくすくす笑って

「バッカねーあんた。

私がずっといたなんて嘘よ嘘。ずっといた社長はね、ホラ、そ、
い。」

言われて、頭を巡らせると……いた。
ちょうど座間の腰のあたりに顔を埋めて、こちらを向いて眠つて
いる。

ベッドの横に座つたまま、寝てしまつたらし。

「あ、オレ、弁当……つていうか残業！！ 仕事は…？どうなつたんですか？」

「仕事はね。納期を伸ばしてもらつたのよ。

こんな事故があつたことだし、あなたは人命救助の功績もあるから、発注者も理解を示してくれたのよ。といつても、1週間だけだけね」

たつた1週間であつても、時間を稼げたのは大きい。

普通なら今回のような仕事で、納期の延長などあり得ないのだが、その点に関してだけ言えば、今回の火事は文字通り怪我の功名と言えた。

「ふつ……よかつた……」

「何馬鹿言つてんのよ。仕事なんかより、あんた死ぬところだつたんだから」

「え？」

「それに、あんだけ必死で守つていた、富堂君の事は聞かないのね？」

「あー、そういうやあ……どうなつたんです？」

「彼は火傷一つ負つてないわ。メダカたちも無事」

「そつかあ……よかつた……」

「助かつたから、そんなのんきな事言えるけどね。あの炎……物理的な熱だけじゃなく、靈体まで焼き尽くす特性があつたみたいなの。座間君は、肉体の火傷はさほどではないけど、妖としての本体を激しく損傷したわ。

一時は本当に危なかつたのよ

「そりや、あの少女……火氣を操っていた、あの少女は何もんなんです？」

「そのことだけ……社長達には、少し黙つていて欲しいのよ」

「それは……どういふ意味です？」

「あの妖……ただの火妖じゃないわ。正体を知れば、社長はまきつと放つておかない。

でも、たぶん、アレには誰も太刀打ちできないのよ

「なんでそれが……分かるんです？」

「あんたが寝てこる間に、ちょっと記憶を見せてもらつたの

「はあつー？」

それでようやく座間も気づいた。

5年も前のおおことの出会いを、夢で延々と見続けたのは、葉子の術のせいだったのだ。

「ま、ちょっとだけ余計な記憶も見せてもらひやつたけど……それで、あの火妖の正体もつかめたのよ。

「もちろん、私以外の誰もその事は知らない」

「せやけど……」

「黙つていないつて言つたら、私もあんたの社長への思い、黙つていなわけです？」

「稻成先輩……まさかそんなところまで、見はつたんですか？」

「え～え。しつかり見させてもらいました。

半分冗談でからかつてたんだけど……まさか座間君の気持ちは本物だったなんてねえ……七海ちゃん、かわいそ。」

「絶対誰にも言わんといて下さい。社長にはあの時、オレと会つた記憶すらないんですから」

「だーから。あんた次第だつて言つてるでしょ？」

「ぐ……」

「座間君は、ただ黙つていってくれればいいのよ。あの火妖については、あたしがケリをつけてくるわ」

「だつて……誰も勝てないつて……？」

「ケンカしにいくワケじやないわ。話し合ひよ。」

言いながら葉子は、すつと立ち上がつた。

「稻成先輩！」

「なごみへ。」

「おぬしつたへ…………」

「誰に回かって貰ひへんのよ。」

薬十せ後り回をのまま手を離さない、さうして脚を引ひだした。

§7 よだれ

§7 よだれ

「ふう……」

葉子を見送った座間は、自分の腹の上で寝こけているあおいに目を落とした。

よほど疲れていたのか、ぐっすりと眠つていいようだ。

それにして……

乱れた髪。化粧つ氣のない肌。斜めにズレて片方だけ鼻息で曇つたメガネ。極めつけは、半開きの口元から、透明なよだれが、……。

その寝顔は無邪気きわまりなく、好感が持てるのだが、5年前に見た修行姿の凛とした風情はカケラも見あたらない。

（うわ！ よだれが！）

すでに布団に、直径10センチほどのしみを作つている。
無邪気なあおいの寝顔を、もう少し眺めていたい気持ちもあったが、このまま放置するとさらに被害が広がる恐れがある。

座間は、そつとあおいの肩に手を掛け、丁重に起こす事にした。

* * *

* * *

* * *

* * *

「あんたら、何やつてんの？」

仕事を終え、帰宅途中に見舞いに訪れた森いぶきは、病室に入る

なり呆れたよつた声を出した。

あおいが座間の上に乗つかり、キャメルクラッチをかけていたのだ。

「座間君が元気になつたのと、お一人、仲が良いのは見て分かるけど……ヒマなら、会社で仕事手伝つて下をよこ」

「だつて、森主任！－！ 座間君つたら、私の寝顔じつくり観察した

挙げ句……

笑つたんですよ－！」

あおいは少し涙声だ。

さすがに恥ずかしいのか、よだれについて指摘された事は言わない。

「だ……から、すんまへんつて……囁つてるや……ないです……か
はつ－！」

「黙れ、女の敵い－！」

あおいは、さらに力を入れて、座間の顎に添えた手を引き絞る。

「社長－－

やめてください－！ 座間さん、死んじやいますよ－？」

いぶきの後ろから、悲鳴に近い声を上げて病室に飛び込んできたのは、伊園七海であった。

「あい、七海ちやん。来てくれたの？ 心配だつたでしょ？ 座間君、やつと意識を取り戻したのよ

あおいは、座間の顎に手をかけたまま、さうに後方に体重をかけつつ、こつこつ笑う。

「それは見れば分かりますってー もうやめて下せーーー！」

「まーまー。痴話ゲンカはそのへんにして、こいつの話も聞いてくれます？」

いぶきは、ほとんど棒読みで、無関心そうに一人を仲裁した。

「話？」

「社長、まず手を放して。せつかく助かつたのに、死にますよ？それ

座間は、泡を吹いて失神寸前であった。

「私の叔母様はこ存じでしたよね？」

あおいがとりあえず技を解き、座間が息を整えるのを待つて、いぶきが話し始めた。

いぶきの叔母とは、すなわち山姫の上位に当たる山神のことである。

あおいと七海は丸椅子に座っているが、体の大きないぶきには病室の丸椅子は小さすぎるため、座間のベッドに腰かけている。

「鷲田先生? もちろん知ってるわ。植物生態学の授業も受けたし……そういえば、座間君にとってはお義父さんの同僚になるのね」

本当は、座間も同じ大学に通っていたのだが、その記憶はあおいではない。

むろん、共にやまこと戦つた、キャンプ場での記憶もだ。あくまで座間は、箕島岳の大天狗・次郎坊の眷属である鳥天狗であり、名字は違うものの、箕島教授が身寄りのない血縁から引き取つた、義理の息子ということになつていて。

「ええ、知つてます。和泉御前様……鷲田山系の山神やつたはずですね?」

「そう。その和泉御前様が、こっち方面におかしな気の集まり方をしている場所があるつて、おっしゃつているんです」

「おかしな気?」

「気の流れって、山上から見るとよく分かるんですよ。

土気、木気、水気が、川の流れに沿つて山から市街地へ流れ込み、自動車などの機械や、人間の生活から出る火気、金気と相剋して海へ消える。

この流れが、どこか滯つているらしいんです

基本的に、自然界には山から海へ向けて、大きな気の流れがある。それ以外に、大気の対流に会わせた気の流れ、月、太陽などの天

体の動きに合わせた気の流れ、これらが複雑に絡み合って、一日の変化や、季節を作っているのだ。

その気の質は、木、火、土、金、水に分けられるのだが、大自然には、本来は火氣と金氣が少なく、木氣、土氣、水氣が中心となっている。

「御前のおわすのは、ここから数百？離れた場所ですから、どこがどう、とはいえないとおっしゃるんですが、どうも、こちらの気の流れが普通ではない……と」

「山神様のおっしゃる事だから、間違いはないんでしううけど……その話だけじゃあ、どうにも動きようがないわね」

「ええ、でも、そこで気になるのが今回の火事です」

「火事？ 座間君の会つた火妖が、何か関係があるかも知れないってこと？」

「ただの火妖なら、関係ないと思しますけど……」

本来火の氣のない小学校に火氣を溜めて、あれほどの大火事を起こすなんて、ちょっと普通では考えられないと思いませんか？」

「…………そういうえば、土氣を操り、火氣を打ち消す術を得意とする座間君が、手も足も出なかつたつてのも、変と言えば変ね」

二人は一瞬顔を見合せると、じろり。と座間を睨んだ。

何か知っている事があるなら話せ、と言わんばかりの表情だ。しかし座間としても、黙つていると葉子に釘を刺されて、一時間も経たないうちにしゃべつてしまふわけにもいかない。

座間は、わずかに何を言おうか戸惑つて、口を開いた。

「…………ちよ……ちょい待つて下さい。

オレかで、いつぺん戦つただけで、アイツが何者かなんて分かりやしまへん。せやけどアレが何もんか、いう事より、ホンマにこの土地の氣の流れがおかしいんか、いつぺん調べてみたひびついですか？

「あら？ 何よ、その間は？

座間君、あんた何か隠してない？」

座間の返事に不自然さを感じ取ったのか、あおいが田を見つめながら詰め寄った。

「そーね。今の反応は、ちよつと不自然かな？」

いふきも、田を細くして座間の胸の裡を見透かすように見つめている。

すると、座間の様子を見かねたのか、詰め寄るあおいと座間の間に七海が無理矢理割り込んだ。

「なんですかお二人とも！ まるで座間さんを怪しむみたいで。座間さんが何がご存じなら、こんな重傷を負う理由なんか無いはずじやないですか！」

「七海ちりやん、だまされちゃダメよ！ ここの野、せつき確かに何か隠している表情だったんだから！」

あおいが、ビシッと座間の顔に人差し指を突きつけながら囁く。座間はほんの一瞬迷つただけなのだが、あおいの観察力は超人的と言えた。

「いやいやいや、いつたい何を隠すいふんですか
さつさつと通り、ヤツの正体なんかサッパリ分かりまへんて！」

それは嘘ではない。

ただ、葉子は座間の記憶を見て、火妖の正体が分かつた、と言い、
座間にはその記憶を黙つておけ、と言つた。

つまりは、あの戦いの記憶の中に火妖の正体を見極める、大きな
ヒントが隠されているはずなのだ。あおい達には何も言わないまま、
座間は秘かにそのことを考えていた。

（そういうや、降魔の剣が効かへんかったな……その割に、
葉団扇は多少効果があつたんや。もう少し周りに土氣があつたら、
いい勝負できていたかも……）

それが、あの火妖の特徴と言えば、特徴である。う。

（それにしても、稻成先輩が誰も太刀打ちできへん……って言わは
つたからには、相当強力な妖やつてことや、いや……どんだけ強力
でも妖やつたら、オレ達……五尾の妖狐と山姫、鳥天狗が力を合わ
せて勝てへん妖なんぞ……）

「あーーー！」

「どうしたのよ。おつきな声出して？」

思わず大きな声を出した座間は、思わず口を押され、頭を回転させた。

何とか誤魔化さなければ……

「いや、そういえば、

オレはあの火事の中から、どうやって助かったんですやろか？」

「あーそうそう。その事だけど、

座間君、七海ちゃんにお礼言いなさいな。後でケルピーにもね」

言いながら、いぶきが座間をじろりと睨む。

「ええ？」

「社長が、現場でおろおろしている間に、

ケルピーが一人で会社まで、私達を迎えてくれたのよ」

ケルピーとは、社有車のビッグホーンを依り代としている水妖である。つまり、無人のビッグホーンが、夜の市内を走つていぶき達を迎えて行った、という事らしい。

「アイツ……まさか、一人で走れるんですか？」

ケルピーが車に憑依してから2ヶ月ほど経つが、それまで、誰も運転しないで勝手に走るような事はなかつた。

「そうみたいね。私もビックリしたけど。そんで、全員でケルピーに乗つて駆けつけたんだけど

むしろその後が、七海ちゃんとケルピーがすごかつたのよ」

現場に着いても、七海は一人で車内に残つたのだ。

そして、燃える校内にそのまま突入。一階の消火栓をケルピーが確保し、水を霧状に変えて屋上まで走らせた。その水気の流れに乗つて、七海が屋上までたどり着いたというのだ。

「……なんて無茶を……」

それを聞いて座間は絶句した。

七海もケルピーも水妖であるから、火とは相剋である。つまり、火を剋する代わりに、強すぎる火からは逆にダメージを受ける。ひとつ間違えば、七海もケルピーも死んでいたかも知れない。

一人の危険を冒しての、救出劇のおかげで、座間と富堂君は助かつたのだ。

「七海ちゃんが屋上に着いた時、まだ火妖が土氣結界の周りをうろついていたらしいからね……七海ちゃんがケルピーから水気の補給を受けながら、ありつたけの水気で攻撃して、ようやく逃げたらしいよ」

「一人がかりの水気？ それで、逃げた……だけなんですか？」

「どうしたの？」

あおいが怪訝そうに座間を見る。

「あ、いえ……伊園さん、助けてくれてほんまおおきい。せやけど、今後はあんまり無茶せんといでや？」

「いえ。私は、座間さんをお助けできただけで……」

俯いて真っ赤になつた七海は、語尾を濁らせ、もじもじとシャツのボタンをいじつている。

眼鏡を掛けたおとなしい文学系少女、といった雰囲気の彼女が、そんな激しい救出劇を演じて見せたとは、とても信じられない。

「ひゅーひゅー。座間君、いいわねー。私、七海ちゃんみたいな彼女が欲しいなー」

「しゃ……社長、私は座間さんの彼女つてわけじゃ……」

あおいがはやし立て、七海はますます赤くなつて下を向いた。しかし、その様子を見ながら座間は、また別の事を考えていた。

（普通の火妖が水気なんか食らうたら、一瞬で消されてしまう……ましてや伊園さんの力に、ケルピーの水気がプラスされとつた（ひ……）

「なあに？ 座間君、難しい顔して……どつか痛むの？」

氣づくと、三人とも心配そうな顔で座間を見つめている。

「いやいや、そうやないんですけどね……あの火妖の正体、何者なんやろ、思いまして」

「いい加減なビオトープには、はぐれ妖怪が住み着く事がよくあるし、屋上で高温になつたところが氣に入つて、火妖が居着いただけじゃない？」

「まあ、そういう妖怪でも、たまに強力なのがいますからね。座間君は、運が悪かつたんでしょう」

直接火妖を見ていないあおいといぶきは、それぞれお気楽な推測を口にした。

「で、でも……」

「なあにっ・七海ちゃん」

「あの火妖……どこへ行つたんでしょうか？
あれだけの力を持つ妖怪を……野放しにしけつて、よかつた
んでしようが？」

「まあ、良かしないでしようがね。

逃げちやつたもんは、どうしようもないんぢやないかしら？ 私
達は真つ当な営利企業であつて、妖怪退治を生業にしているワケじ
やないし」

あおいは野良妖怪の行方にまでは、全く興味がないようだ。

(ほんまに……逃げたんやろか……)

その点においても、座間には引っかかるものがあった。

「でも、社長……和泉御前の仰つている、このあたりの氣の流れ
の異常の原因がアイシやつたら、放つておくワケにはいかんのやな
いですか？」

「それにしたつて、私達が何とかしなくちやいけない理由はないわ
よ。業務上、気をつけなくちやいけない、とは思うけどね。
ま、難しい事は後にして、とにかく余計な心配しないで、座間君
は体を治してよ。

仕事の方も、納期が延びたおかげで間に合ひそうだし

あおいは、すでに一件落着といった表情である。

「はあ……まあ、とりあえずは養生させてもらいます」

「んーじゃ、そろそろ引き揚げよつか。

あんまし長居して、座間君を疲れさせるといけないし」

それを聞いて、いぶきと七海は顔を見合せ苦笑いした。

怪我人にプロレス技を掛けていた人間の言う言葉ではない。それに、ふらつと立ち寄ったように見せていくつもりらしいが、そもそもあおいは、昨夜から泊まり込んで座間を看病していたのだ。しかし、座間をゆっくり寝かせるべきなのは間違いない。

「ええ、それじゃ帰りましょう。社長、どっかでご飯、食べて行きます?」

「いーわねー。私、そういうえばお腹減つてたんだつたわ」

来た時以上に騒がしくあおい達が帰つて行き、しんとなつた病室で、座間は自分の考えを整理していた。

（まず、アッシュはおそらく火妖やない。『火を能く使う』だけで、火氣そのものの化身である火妖とは違うんや）

そうでなければ、ケルピーと七海の水氣を受けて、タダで済むわけはない。

火妖とされる妖怪には、鬼火やふらり火、つるべ火などが知られている。が、これらは陰界の存在が、現界の炎や熱、すなわち火氣そのものを依り代としている場合が多く、生物や鉱物、道具や機械が依り代となつた妖怪とは、少々趣が違うのだ。

（それと……俺達が束になつても敵わない存在いうたら……そもそも、妖怪やない可能性もあるわけや……）

ただ、仮に妖怪ではないとしても、いつたい何者なのか？
さすがに、そこまでは座間にもよく分からない。これ以上考えて
みても、座間に答えは出せそうになかった。

なにしろ、座間は鳥天狗といえども実際には妖怪歴が数年間と浅
いのだ。妖怪に関する知識は、大天狗・次郎坊から教わった事がほ
とんどである。

葉子がすぐに正体に気づいたということが、大きなヒントになり
そうだったが、葉子は齡四百年の妖狐である。その経験や知識と、
駆け出しの妖怪である座間の付け焼き刃的な知識では、まったく比
較にもならない。

（ま、ええわ。稻成先輩は話し合いや言ひてはつたし。
少し心配やけど、なんかあつてもあの人ならきっと大丈夫や。無
事に帰つて来はつたら、こつそり説明してもらおか）

座間は考えるのをやめ、とつあえず眠る事にした。

§8 圓野組

座間が病室で眠りについたのと、ちょうど同じ頃……。圓野組の自社ビル、その最上階にある役員室には、まだ煌々と明かりが灯っていた。

豪壮な社長席の前にしつらえられた会議テーブルには、後藤副社長をはじめ、数人の幹部らしき人間が座り、その中には前田常務の顔も見える。

「大変な損害だな？」

肘掛け付の大きな椅子に座った圓野組の代表取締役社長、圓野明徳は、後藤副社長の方へ不機嫌そうな顔を向けた。

明徳は、年齢は50代後半といったところか。

身長はさほど高い方ではなく、体格も中肉中背。

薄い白髪混じりの頭髪を七三に分け、半袖のワイシャツにノーネクタイという格好である。

こう書くと、ぱっとしない中年男、といったイメージが浮かぶが、一つの会社を背負う责任感からか、全身から圧倒的な存在感が滲み出している。幹部連を見据える鋭い眼光は、獲物を狙う虎のそれに近い。

しかし後藤は、虎の眼光に臆する様子もなく、立ち上がった。

「は。消防署によると、おそらく放火ではないか、ということですが、完成検査前であることもあって、当社の管理責任は問われるでしょう」

後藤の表情は硬い。

「まだ、太陽光発電装置も風力発電も試運転前でしたから、発注者としては、当社での入れ替え対応を希望してくると思われます」

後藤に続いて、立ち上がって口を開いたのは、工務部の富後部長だ。

「契約条項から言いまして、当社はそれに応じる義務があるものと思われます」

「火災保険を……掛けていなかつたそつだな？」

「いえ、そんな事はございません」

もちろん、建設工事保険は掛けおりましたが……別発注の発電施設については、機械器具組立保険の対象でありまして、そちらに実は、火災についての補償内容が無く……」

「もういい。

何にせよ、お前達のミスで、当社が三千万の損失を被る事に変わりはないのだろう？」

富後部長は、答える代わりにつなだれたまま座った。

施工途中の事故や災害対応は、施工業者の責任となる。こうした場合は、普通は現場保険でまかなわれる事が多いが、今回の場合、保険の掛け方に不備があつて、まかないきれない部分が数千万円、圓野組の負担となりそうなのである。

その時、役員室のドアが大きな音を立てて開いた。

「おやおやあ、我が社の親愛なる幹部のみなさん。夜遅くまで」苦勞様です。しかし、いけませんなあ。なにを揃つて辛氣くさい顔しておられるんですか？」

「遅いぞ志波あ！…貴様、幹部会議をなんと心得てあるか…？」

後藤副社長が、怒りの声を投げつける。

へらへら笑いながら入室してきたのは、第三営業課長の志波であつた。黒縁のメガネに四角い顔。ストレートの髪が斜めに額に掛けている。地味な色のズボンは、サラリーマンらしい服装といえたが、微妙に派手な色合いのボタンダウンのシャツは、いくらクールビズといえども、少々軽薄過ぎる印象を他人に与えていた。

「いやあ、副社長。そんな怒らないで下さいよ。

今回の議題は例の火事でしきう？ 遅れてきた代わりに、すこおし後始末に有利な話をつかんできたんですから」

そう言つと志波は席にも着かず、会議テーブルに寄りかかつたまま、社長席に向かつて軽くウインクを飛ばした。

「聞かせてもらおうか？」

「なあに、簡単な話ですよ。

当社の事情を教育委員会に率直に申し上げたんです。今回被害を受けた機材その他の代金を、こちらで持たせていただく代わりに、火災後の新校舎の建設の際に、入札情報を少おし流していただけるよう、話をつけてきたんです

「な……なんだと…？」

その場の全員が息を呑んだ。

小学校の新築工事ともなれば、少なくとも十数億円単位の案件になる。

もし受注できれば、改装工事の火災対応など安いものだ。

「あんた、まさか役人に袖の下を渡したのか?...」

背の低い眞面目そうな男性が立ち上がり、顔を真っ赤にして志波に食つてかかつた。

「このご時世、万が一そんな事が公になつたら、会社自体つぶれかねんぞ!...」極秘で経理処理するこつちの身にもなつてみろ!...」

「静かに話したまえ、塗倉経理部長。どうに耳があるか分からんのだぞ?」

低くドスのきいた明徳の声に、塗倉部長は思わず口に手を当てた。

「会社の利益のために、有効に金を使つたのならば、別にかまわん。新しい仕事が確保できそつなのも、喜ばしいと言つていい」

「さあすが社長!...話が分かるなあ」

志波は、顔の前でぽんと手を叩いて、にやりと笑つた。

「これは私の経営判断だ。お前にほめてもらつていわれはない。だが、先走つて勝手なマネをした事は、問題だぞ?」

「いやーははは、でも少し早とちりですよ。私は、袖の下を渡した

なんて一言も言つてないでしょ？

「ほひ……金を使わずに話をつけたのか？」

「お金なら、当社の被つた3千万があるでしょう。恩の着せ方つてのも営業のウデですよ。で、ね。社長？話が分かることで、ひとつお願ひがあるんですが……」

「何だ？言つてみろ」

明徳は、にやりと笑つて志波を促した。良い方に期待を裏切られ、かなりご機嫌になつたようだ。

「今後、じついう事故や災害系のトラブルがあつたら、後始末はすべてウチの課に任せさせていただけませんかねえ」

志波は、下手に出るよつた物言いをしながら、大胆なことを言い出した。

本来、災害や事故の解決は総務の仕事である。営業が、損得勘定だけでの対応でできる仕事ではないはずだ。しかし、それを聞いた明徳は面白そうに笑つた。

「ほひした対応に、自信がある。と言いたいわけだな？ いいだろう。会社に損をとれない範囲でなら好きにするがいい」

「あつがとうござります。まあ、じ覽になつていて下さい」

志波は胸の前に手をやり、大げさにお辞儀をして、退出していくた。

「気に入らねえな……」

会議を終え、副社長室にもどった後藤は、前田常務と一人でコーヒーを飲みながら話していた。

「あの、志波とかつて第3営業課長のことですか？」

「おうよ。別業界からの転職で中途入社だつて割には、この業界の裏側を知りすぎてやがる」

「くらくらした態度のくせに、妙に切れすぎのも問題ですね」

前田も、志波の一拳手一投足を思い出すように、目を細めた。

「お嬢の会社への支援打ち切りを社長に進言したのも、アイツだつて話じやねえのか？」

後藤はいかにも気に入らないといった風情で顔をしかめ、コーヒーを一気に飲み干した。

「それは聞いていませんが……社長は妙に彼を気に入っているようですね」

「アイツ……人間だよな？」

「ま、私の見る限りでは、妙な妖気は感じませんけどね」

「そりが……まあ、俺達は建前上サラリーマンだ。」

会社の決定権はすべて社長にある。ヤツが化け物だつてんなら、オレ達にもなんとかしようもあるつてもんだが、人間ならどうしようもねえ……」

「彼が人間であつても、出来る限りの事はすべきですよ。私達は先代には、言葉に尽くせない恩義がありますからね」

「そう……だつたな。俺達を創つた行者様が昇天なさつてから千年。ずっと、はぐれ鬼だつた俺達を拾つて下さつたのが、正平様だつたな」

「お嬢の会社への処遇も含めて、正直、明徳社長のやり方には、ついて行けない部分もありますが……」

「なあ義覚…… それよりよ」

後藤は前田に向き直り、声のトーンを落としてひそひそ声で言った。「義覚」とは前田の真の名のようである。

「今回の火事、夜中だつてのに怪我人が出たそつじやねえか？ 本人の希望で名前は公表されてないらしいが…… ソイツ、いつたい何やつてたんだろうな？」

「さあ？ なにか、中にいた子供を助けようとして大火傷を負つたとか……」

「そもそも、夜中の学校に子供がいたつてのが不自然だろがよ？ 放火だつて割には、犯人も特定できかけりや、そもそも火元も分かつてないらしいし…… いつたい何が起こつたんだろうな？」

後藤は、窓際に行くと市内の夜景を一望できる窓の外を眺めた。

「相変わらず立派な建物だな……」

田の前にそびえているのは、県下有数の上場企業、八社商事のビルだ。

市街中心地とはいえ、地方都市である。十階を越えるビルは、数えるほどしかない。

その中でも、この建物の豪壮さは群を抜いていた。

「そういうや、今の社長が名を上げたのは、あのビル建設の受注からだつたな」

このビルの受注までは、圓野組は、これほど大規模な建設工事の施工経験は無かつた。

今の社長、つまり圓野明徳が経験豊富な技術者を次々に雇い入れ、様々な技術提案やコストダウン案、……さらに表裏の営業活動を駆使した結果、ぽつと出の圓野組が、並み居る中堅クラス以上の地場ゼネコンを出し抜いて受注したのだ。

「先代は、あのビルの建設自体にも反対しておられましたがね……」

「そういえば、そうだつたな。

先代はずいぶん、ご立腹だつた。なぜ、そんなに反対しておられたんだらうつな?」

「分かりません。ただ……位置が良くない……そつおつしゃつていました」

「へえ……位置が……な

後藤は鬼ではあるが、陰陽道や気の流れについて詳しいわけではない。つぶやいてはみたものの、先代圓野正平の意図までは、到底理解出来なかつた。

* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *

「座間君！！！」

翌朝、突然あおいが病室に飛び込んできた。走ってきたのか、息を切らせていく。

驚いてあおいを見た。その姿を見て、座間はようやく、自分の携帯の電源を切つてある事を思い出した。

「どうしましたですか、社長？」

「稻成さんと、七海ちゃんが…………行方不明なの」

「あ!? 何書いてあるんですか?」

二人とも、若い女性の姿はしていても、その正体は妖である。
滅多な事で事件や事故に巻き込まれるはずはない。

「今朝、一人とも会社に出てこなくて……携帯に電話しても稻成さんは出ないし、七海ちゃんも昨夜から帰つてないつて」

葉子は一人暮らしであるが、七海は家族と住んでいる。

七海の家族は、ここにとこり泊まり込みの仕事もあったので、そうした理由だろうと考えて、心配していなかつたというのだ。だが二人とも、会社や家族へ何も言わずにいなくなるようなタイプではない。

「そんな……」うしちやおれんわ……先生、オレ、今すぐ退院しますわ！！

「無茶を言つちゃ いかん。

今も話していただろう？ 何をする気か知らないが、退院は明日以降！ それも条件は、毎日の通院と自宅療養だと言つたはずだ。君は、昨日まで意識不明で、ほんの2日前まで生死の境をさまよつていたんだぞ？」

「でも、オレの回復力は先生も認めてくれたやないですか？」

「たしかに、君は見た事もない早さで回復している。

しかし、皮膚が治つているからと云つて、内臓に負担がないとは思えない。若いから分からぬだけで、検査結果に出ないダメージもあるんだ。行方不明のご友人には気の毒だが、警察に任せたはどうかね？」

〔医師の言つ事はもつともであった。〕

座間は鳥天狗である以前に、人間もある。見た目ほどには、体力も靈力も回復していないというのが事実であろう。

しかし、妖怪である七海や葉子が人間に後れを取る事は考えられない以上、相手が何者であれ、人外としか考えられなかつた。そしてこのタイミングであれば、それはあの手強い火妖であるに違いない。

警察がそんな妖怪に太刀打ちできるはずもないし、それどころか、そもそも一人を見つけ出せるとも思えない。

「先生がなんと仰りれよつと……オレが行かなあかんのです。『迷惑はおかげしませんよつて……お願いします』

座間は、真っ直ぐに担当医師を見て頭を下げた。

「や」ままで言つならば、止める事は出来ないが、……服薬を忘れない事と、休息を充分にとることを条件に退院を許可しよう。もちろん、毎日通院する事。

それでも、何かあつたとしても責任はとれないからね」

「あつがとつれこます」

座間とあおいは、同時に深々と頭を下げた。

§9 行方不明

§9 行方不明

「三人は、あれからどうじはつたんですか？」

「三人でファミレスに行つて……食事の後、すぐ別れたわ。少し日程的に余裕が出来たから、しばらくは徹夜作業もやめておじうつてことになったからね」

あおいと座間が話しているのは、トープスの社内である。応接セツトに、あおい、座間、いぶき、真菰の4人が揃つて座り、状況整理をしているのだ。

「七海ちゃんは電車通勤だから、会社の前までは私が送つてあげて……それからは、どうしたか分からないうわ……」

一番可愛がつていた後輩の安否が分からないとあって、いぶきの表情は暗い。

しかも、最後まで一緒にいたのが自分とあつては、相当責任も感じているのだろう。

「……七海ちゃんに、もしもの事があつたら、私……」

普段は気の強い姐御肌のいぶきも、今回ばかりは元気がない。

「社長、真菰専務、森主任、オレの考えを聞いて下さい。ただし、当たつているかどうかはわかりまへんけど……」

いきなり言い出した座間を、三人は驚いて見つめた。

座間も、こういう事態になつてまで、隠し事は出来ないと決心したのだ。

「まず、今回の一人の失踪は、あの火妖のせいやと考えてええと、オレは思います。」

「どうして、そういう切れのいい？」

「じつは昨日、オレの病室を出て行く前に、稻成先輩がヤツと話し合いに行く、と言つて出て行かれたんですね」

「ええ？！」

「稻成先輩は、意識のないオレの記憶を術で読み取つて、アイツの正体をつかんだと言うてはりました。その正体までは言わはりまへんでしたけど……放つておくワケにはいかない、と」

正確には、あおいが放つておかないだろ、と言つていたのだが、そのことは言わぬ方が良いやうに思つた。

「稻成先輩は、アイツに会いに行かはつて、何らかのトラブルに巻き込まれたんですやる。

伊園さんのことはよく分かりまへんけど……どちらにせよ、もう一回、貴田小学校へ行つてみなあかんのちゃいますか？」

じつと目を瞑つて座間の話を聞いていた真菰専務が、ふつと目を開け、口を開いた。

「座間君。君の言つ通りかも知れませんが……現場へ行く前に、少

し君の記憶とやらを話してくれませんか？

座間は、自分の覚えている限りの事を話した。

葉団扇の最初の一撃で、火事が鎮火しなかつた事。

白装束の少女が、自殺した生徒とそつくりであつた事。

少女は屋上にいたわけではなく、階段を上つてきた事。

あおいの火気結界は、かなり効果を發揮した事。

しかし降魔の剣の一撃は、全く手応えがなかつた事。

そのくせ、葉団扇での土氣の放射は、一瞬であつたが効果があつた事。

自分の推測は極力省き、事実のみを細大漏らさず伝えたつもりであつた。

「ふむ……で、そこへ伊園さんが駆けつけ、君たちを救い出した、というわけですね？」

「はい……その辺の記憶は、オレにはないんですけど……」

「」の情報だけで、稻成さんは相手の正体を理解した。逆にその辺がヒントになりそうですね

「それなんですが……オレの考え、言つてもええですか？」

「何よ？」

「まぢ……アイツは火妖やない。そう思つんですねわ

「はあ？なんですよ？」

「社長もケルピーと戦つたなら分かるでしょ？」

アイツのパワーはハンパやなかつた。火氣そのものを本体とする火妖が、ケルピーの強力な水氣を食らうたら、ひとたまりもなく消滅しますわ。ましてや伊園さんの水氣もプラスされとるんですやろ？」

「なるほど…………」

「そやのに逃げただけ、いうのがすでに変なんですね。つまり、火妖やなくて火を能く使うだけかも知れまへん。それと……降魔の剣が効かない相手……つちゅうのは、幻でなければ、剣と同属性の氣を持つ者だけですやろ？ 降魔の剣は土氣やない。大天狗様の神気がベースになつてます。

そしたらアイツは妖怪やなくて、神靈やつちゅうことになるんと違いますやろか？」

「…………」

座間が話し終えると、その場を沈黙が支配した。

誰もが…………特にあおいは、驚いて座間を見つめていた。いつもお気楽な雰囲気の座間が、真剣に論理立てて推理するのも意外なら、誰が考えても筋が通つているように思える推理を展開したのも意外であつた。

「座間君、君の推理を私も支持します。

ただ、それだけではどうして稻成君が正体まで特定できたのか分かりません。また、社長の結界が効いた理由も謎です」

「現場に…………行つてみるしかないわね」

あおいは、誰に言うともなく呟いた。

貴田小学校は、全焼であった。

とはいって、鉄筋コンクリートであるから建物自体は残っている。火事から数日しか経っていないため、立ち入り禁止となっていたが、市役所の入堂部長にお願いし、被害状況の調査の名目で入らせてもらえるよう教育委員会に口をきいてもらつたのだ。

農村整備部の入堂部長が、別の部署にまで働きかけてくれたのは、先日のケルピー騒動の事があつたからだろう。

「……酷い状態ね」

あおいは、あらためて惨状を確認し、眉をひそめた。

建物に一步踏み込むと、合成樹脂の焼けた臭いが鼻を突く。床は消化剤や放水で、まだびしょ濡れである。真っ黒にすすけた壁は、熱でコンクリートが剥がれ落ち、鉄筋がむき出しになつている箇所もあつて、火事のすごさを物語つていた。

「結局、無事だつたのはここだけですか」

取り壊す事になつっていた、屋上ビオトープだけが燃え残つているのが、あまりにも皮肉であつた。

火事が思う存分燃やし尽くし、火氣が散つてしまつた今では、高温になる事もなくなつたためか、メダカも元気いっぱいに泳いでいる。

「稻成君は…………」JRに来ていましたね

真菰専務が、ぱつっとひぶやく。

「じつじつ、やつが言えるの?」

「もし稻成君ほどの妖狐が、正体を現して戦つたなら、一日やそこ
らで妖氣は消えません。しかし、ここには妖氣どころか火氣すら大
して残つてない」

「オレもやつ思こますわ。
あの時も思つたんやけど……アーッ、ここに巣食つとるわけやな
わやつなんですわ」

「それま、じつじつよ。」

いぶきが怪訝な顔で聞く。

「いや、これはオレのカンでしかあらへんのですけど……」

「座間君、あんな状況でよく氣ついたわね…………でも、変なよ
ね。」

なーんか、やつから座間君にしては出来すぎじゃない? あなたに色んな確信めいたものを抱かせた、何があるんじゃないの?」

あおいは、ふたたび座間に不審の目を向けた。

「いや、何を言つたんですか。そんな言いがかり…………

座間は必死で詫びようとした。しかし、さすが葉子との約束もある。

しかし、それよりも葉子の言つていた事が気になるのだ。

『正体を知れば、社長はきっと放つておかない』

『おそらく、誰も太刀打ちできない』

あおいが、あの少女に挑めば、おそらくタダでは済まないのだ。
葉子が体を張つて止めようとしていたのは、その事態だ。皮肉な事
に座間の推理は、葉子の言葉から確信を得ていたと言つていい。
しかし、あおいも引き下がる様子は全くない。

「言いかりかどうかは、私が決めるわ。
何度も言わせないで。あんたが隠している事、洗いざらしやべ
りなさい！」

「社長、少し待つて下さい。とにかく、今までの情報を整理しまし
ょう」

つかつかと歩み寄つて座間の胸ぐらをつかみ、問い合わせるあおい
を、真菰専務が横から口を挟んで制した。

「あれが神靈であり、火妖ではないこと、それでも火気を能く使い、
座間君を苦しめた事、稻成君が、一人でなんとかしようとしたこと
から考えると……正体はおそらく、神使の狐ではないでしょ
うか？」

「神使？でも、それならどうして、人間をとり殺したり火事にした
りするの？」

「人間が、何か大きな粗相をしでかしたとすれば、辻襷が合います。

稻荷大明神は五穀豊穣の神で、御利益のある非常に穏やかな善神ですが、稻荷神社は全国に数万もあると言われていて、それらすべての社に、顯現しておられるわけではありません。

そうした社は、基本的に神使が守っていますが、神使は本尊とは違つて、様々な性格、由来のものがいます。稻荷の社を粗末に扱つたせいで祟られたという話も、無いわけではありません。」

「それにしても、狐やつたら稻成先輩にとつてはお仲間ですかやろ？ なんで、話し合いが通じへんかつたんやろ？」

「相手は神使、つまり善狐です。

しかし、稻成君は稻荷大明神に仕えているわけではない妖狐です。正邪で言えば、稻成君の方がむしろ邪ですから、たとえ言い分が正しかろうと、相手が言う事を聞かなかつた可能性はありますね。」

「じゃあでも、その神使のいる場所つて、稻荷神社？ つてことですよね？」

それつて、どこなんでしょうか？ それに、どうしてそんな離れた場所の神使が、小学校にまで来るんです？」

いぶきの言う通り、真菰専務の推理ではそれらの謎は解決しない。

「可能性として考えられるのは、この小学校がその神社から見て、南に当たっているんじゃないかなってことね……」

「南？」

「二十四方位で、火気は南に当たるのよ。
ここを南とすれば、真つ直ぐ北には県下最大の河川、葛流川よ。つまり、二十四方位の水気が山から常に供給されてるわけ」

あおいは、落ちていた炭化した角材で床面に図を描き始めた。

「じゃあ……東西は……」

「東に大きな森、西には工場群があるわね。それが木氣と金氣の供給源と言えなくもないわ。火氣は、べつに集めたわけじゃないのよ。ある場所で各方位から強い気を取り込もうとすると、陰陽のバランスが崩れて、自然に一力所に特定の氣が集まる、と考えたらどう？」

「だから、地域全体の氣の流れが滞ってしまったというわけですか。しかしこれだけでは、その場所がどこかは分かりませんね……」

真菰専務の言つ通り、たしかに、川も森も工場群も広大である。小学校の位置からだけでは、神使の狐が住み着いている場所は分からぬ。

「それに……市内にはかなりたくさんの中社がありますよ。小さな祠も合わせると、大変な数です」

「…………森主任、例の小学生……富堂君から話を聞けないかしら？」

しばらく腕組みをして考え込んでいたあおいは、思いついたようにいふきに聞いた。

「そりや……連絡先は聞いてますし、座間君にお礼を言いたいとかで、電話しても不自然ではないんですけど」

「稻成さんと七海ちゃんが心配なの。一刻も早くその狐の居場所を探し出さなきゃ。今すぐ、電話して！」

あおいは真剣な顔で、いぶきに詰め寄る。しかし、それを見た座間は、あわてて一人の間に割つて入った。

「ちよ……ちよちよちよい待つて下わこーーー！」

「何よーー?」

「社長……稻成さんがその神使に倒されたとして……そんな強力な神靈と、どうやって戦わるつもりなんですか?」

たしかに、あおいの持つ術は齡四百年の妖狐である葉子のそれは、遠く及ばない。葉子が敵わなかつた相手と、まともに戦える道理はなかつた。

「だつたら放つておけつて言つのーー?」

「そつは言つてまへん。

ただ、今の様子やつたら、社長は何の対策も戦略もなしに、相手の居場所にすつ飛んでいきそつやつたやないですか。」

「座間君の言つ通りです。

ケルピーの時も、社長は一人でカタをつけよつとされて、危うく食われるところだつたそつではないですか。」

「…………そりやあ……そつだけど…………」

「社長。約束して下さい。決して一人で先走らない事。それと、い

ざとなつたら」自分の命を一番に考える事です

「…………分かつたわよ」

「では森主任、その小学生に連絡を。座間君は、次郎坊様……箕島教授に連絡を入れて下さい」

「箕島先生に?」

「残念ながら、私がヘタに動けば、稻荷大明神の不興を買つて、却つて面倒な事になりかねません。大天狗様なら、神靈への対処法をご存じかも知れませんからね」

§10 石の塔

§10 石の塔

二十分ほど後、富堂君は担任の佐倉井教諭とともに校庭に現れた。どうやら、命の恩人である座間に連絡を取ろうとしていたらしい。箕島教授は忙しいようで、後で連絡するとのことであった。

「重傷とお聞きしたのに、もう退院されたのですか？」

大した怪我でなかつたようでなによりです。うちの児童を命がけで救出して下せつて、本当にありがとうございました」

「座間さん、あの時は本当にありがとうございました」

口々に座間に火事からの救出の御礼を言つて一人に、横からあおいが話しかけた。

「富堂君……じつはその火事の事で話があるの。

例の牧村さん……だつけ？ 自殺したクラスメイトの女の子のこ

と、少しだけ聞きたいんだけど……」

それを聞いた富堂君は、急に表情を硬くして俯いた。

佐倉井教諭も、警戒した表情になる。

富堂君はともかくとして、佐倉井教諭は責任上、全くの部外者であるあおい達に、こうしたことを軽々しく話すわけにはいかない立場にある。警戒するのも無理もない事と言えた。

しかし、寸時俯いていた富堂君は、すぐに決心したよつて顔を上げ、おずおずと口を開いた。

座間の正体を知り、牧村さんの姿をした妖から命がけで救つてもらつたことが、富堂君の迷いを振り切つたようだつた。

「…………」めんなさい。牧村さんが死んだのも、火事が起きたのも……もともとは全部、僕が悪いんです」

「な……なんだつて？」

それを聞いて、一番驚いた様子を見せたのは佐倉井教諭であつた。

「先生、富堂君に話してもらつても、構いませんね？」

あおいに促されて、富堂君の話し始めたのは、次のよつな話だつた。

昨年の一学期……校舎はエコスクールの改造工事の真っ最中。

校庭の隅には、小さな林があつた。

林といつても、木の数は20本程度。とはいへ、古い大木は數本しかなく、狭い場所に下草や低木が密生していたため、ほとんど誰も踏み込まない場所であつた。

そして、エコスクールの工事と耐震工事の準備のため、工事車両の通路等のスペース確保を理由に、伐採が決定したのであつた。

「よーし。全員揃つたなー。今から、あの林の周りの掃除をするぞ

ー

佐倉井教諭は、大きな声で当時5年生だったクラス全員に指示を出した。

伐採も清掃も、そのまま業者に任せても良さそうなものだつたが、外部の人に、あまり酷い状態で見させたくない。との校長の意向だつたのだ。えんじ色と白の体操服を着た三十人ほどの生徒達。その中に、牧村さんと富堂君もいた。

「あたしねー。もつとたくさんメダカを殖やして、ビオトープに放すの」

「バツカだなー、牧村あ。メダカなんてビオトープ池に放したら、いくらでも殖えるんだぞ？」

「ええ？ そうなの？」

富堂君と牧村さんは、同じ2班であった。

2班は、林に踏み込んだ、真ん中あたりのゴミ拾いが担当だつた。 「なんだこれ、すっげえ草だな。こんな、適当にやつて引き上げようぜ？」

「ダメだよう。富堂君。きちんと掃除しないと、工事の人達が困るよ」

二人は、家が近所でもあり仲が良かつた。なんとなくお互いに意識しながらも、まだ距離感をつかめないでいる。そんな関係だつた。

「あれえ、なんだこれ？ お墓があるぜ？」

富堂君たちの班の一人が見つけたのは、小さな石積みだつた。

かなり大きなヒサカキの茂みの中に、墓……といつか、いくつかの石を組み合わせて作った、塔のようなものがある。高さは50センチもあつただろうか。

「おい、ここの石動くぜ？ 積んであるだけみたいだ」

2～3人の男子が、ふざけて石積みを崩し始めた。

「誰かが遊びで作ったのかな？ でも、けつこう古めに見えるなあ……」

「みんな、やめなよ！ もし、昔の人のお墓だつたりしたらどうすんのー？」

「なんだ牧村あ、おまえ、怖いのかよ？」

「怖いわよー！ お化けとか出てきたらびっくりするのよー！」

「バッカ。お化けなんかいるかよ」

男子達は牧村さんをからかってゲラゲラ笑う。

「いいから元に戻しなさいってー！」

牧村さんは、一度崩された石積みを丁寧に積み直し始めた。

ところが

「なんだつまんねえのー！ どうせ、工事で壊される場所じゃん」

そう言いながら、富堂君がぽいつと放った石が、石を積んでいた

牧村さんの指に当たってしまったのだ。

「あ、痛つつ……」

投げられた石と、元の石積みに挟まれ、牧村さんの指からは血が流れ出した。石積みは再び崩れ、その上に牧村さんの血が滴る。

「！」……「めん牧村……！ 大丈夫か？」

「あーっ……！ 富堂！ なにすんのよー…… 美紀にあやまんなさいよー……」

「あんた達の事、先生に言いつけてやるー！」

同じ班の女子達が詰め寄り、富堂君は小さくなつて謝り続けた。しかし、当の牧村さんは指を押さえ、しばらくじっとしゃがんでいたが、泣き出す事もなく、ふらつと立ち上がった。

「いーのよ…… ありがとうあなた…… おかげでやつと出れた……」

わけの分からぬことを言いながら、牧村さんはうつむいた口で元だけをゆがめ、富堂君に不自然に笑いかけた。

指からは、かなりの量の血が滴つている。

牧村さんは、それを口に持っていくと、なんと長い舌を見せながら、べろり、と舐め上げたのだ。

「おこし……」

＊＊＊

＊＊＊

＊＊＊

＊＊＊

＊＊＊

「その日からなんです。牧村さんの様子がおかしくなったのは……」

「今まで通り、普通でいる時もあるんです。でも、時々目がつづりになつて、よく分からない事を言つてくる時があつて、僕たちは怖くなつてしまつたんです」

「まさか……それでお前達は、牧村さんをいじめ始めたのか？」

佐倉井教諭の言葉に、富堂君は無言でうなずいた。

「それに……なんといつか、牧村さんに近づくと、すぐく、犬臭かつたんです」

「犬臭い？」

「雨の日とかに濡れた犬をさわると、すぐく手が臭くなるんですけど……」

「その臭いが？」

「いつも、牧村さんからしていました」

「そんな大事なこと、どうして先生に相談してくれなかつたんだ！」

？」

佐倉井教諭は、強い調子で富堂君に詰め寄つた。

「待つてください、先生。

それは無理ですよ。そんな怪現象、大人に言つても信じてもらえ

なこつて普通は思つでしょ?」……怖かったのよね?「

「…………はー。」

秘密にしておかないと、僕たちも牧村さんによつてなるんじやないかつて。最初にお墓を崩したのは、僕たちだつたし……怪我をさせたのも……」

堪えきれなくなつたのか、富堂君の目からは涙があふれ出した。

「牧村さんのこと…………なんとかしてあげようつて…………お寺に……相談した日に……屋上から飛び降りたつて……」

あとは声にならず、しゃくつあげる富堂君の肩に、あおこはそつと手を置いた。

「だから牧村さんのために、どんなに叱られても、メダカの住むビオトープを守りたかったんだよね」

富堂君は泣きながら強くうなづき、あおいの胸に抱きついていた。

大きな泣き声が、周囲に響く。

「もう泣かないで。こんな事になつたのは、不幸だつたけど、あなただけがそんなに責任を感じなくてもいいのよ」

あおいは優しく囁きながら、小さな肩をぎゅっと抱きしめた。

§1-1 ヒンドゥーの女神

§1-1 ヒンドゥーの女神

「どうも、分からなくなりました……」

佐倉井教諭と富堂君の二人を帰した後。

石の塔があつたという林の跡を歩きながら、真菰専務が呟いた。林の跡と言つても、今は切り株すら残つていらない。赤土がむき出しになつた地面には、工事用車両のタイヤの跡が深く刻まれている。

「てつくり、稻荷神の社を壊したとか、そういうことだと思つたのですが……塚に封じられていて、血を浴びて蘇るなんて、まるで食ゲ屍鬼ヘルです」

その時、まるで大きな雲が太陽を遮つたかのように、急に空が陰つた。突風が渦を巻いて校庭の砂を巻き上げ、視界が土色に変わり、誰もが一瞬目をつぶつた時。

「やあやあ、みなさん。『無沙汰していますね。』

突風の中に飄然と姿を現したのは、よれよれのスース姿の箕島治郎教授であった。

いきなりの登場に、座間はよほど驚いたのか口をぽかんと開けている。

「せ……先生? さつき電話した時は、忙しいから後で連絡するて言つてはつたんぢやますの?」

「もちろんです。ですから、いつして後で来たでしょう。別に電話するとは申し上げてなかつたはずですが?」

「廻過ぎから東京で講演やとか言つてはつたのは、ええんですか?」

「大天狗の翼を舐めてはいけません。ここに来るにも30分とかかつていませんよ」

「次郎坊殿、こんな所まで」足労いただいて、申し訳ありません」

真菰専務が、丁寧に頭を下げて挨拶をする。

「」無沙汰しております、蛟龍殿。なに、和泉御前からも頼まれましてね。姪御殿がご心配なのでしょう」

「それで、先生? 座間君の話から、何かお分かりになられたのですか?」

あおいが、のんびりした一人の挨拶に焦れたように、箕島教授を促す。

「座間君から電話で聞いた、あなた方の推理以上に分かった事は無いのですが……あなた方が見落としているんじゃないか……と思つ点が一つあつたのです。」

それを確認するために、わざわざここへ來たのですよ

「見落としている事……ですか?」

「ええ、圓野君、ここ的小学校はエコスクールと耐震の改装工事を

したのでしたね？」

「あ、はい。それで、業者がいい加減な施工をしていて、ビオトープの池が高温になっていたのがそもそも始まりだったんです」

「それは…………どういった業者が、施工したのですか？」

「業者ですか？ それは…………」

「そういえば、あおいはそんな事は考えた事もなかった。
専門家のアドバイスのないビオトープは、いい加減な施工が当たり前になってしまっているし、今更業者を捕まえても仕方がないからだ。それに業者に文句を言うのは発注者であって、ビオトープ管理士の役目ではない。」

「私は、その神靈を呼び起こした事と火氣の集中が、もしかすると意図的にされていたかも知れないのでは、と疑っています」

「そんな…………ただの建設業者に、そんな事が出来るわけありません」

「それは、人間を舐めすぎだと私は思いますね。
神靈を上手に祀つて、御利益を得ている人間は数多くいますよ？
祟りを引き起こさせる事など、それ以上に簡単です」

「そんな…………でも…………」

「もちろん、無根拠にこんな事を言っているわけではありません。
物理的な発火点を越えるほどの大火の集中と、自殺した少女の靈魂を取り込み、更に次の犠牲者を欲しがるほどの大祟り、といつのはあまり例を見ません。

よほどの悪意か意図的なものがあつたと考えるのが普通です

「……いつたい、誰がそんなことを意図したとおっしゃるんですか？」

あおいの言葉を聞いて、箕島教授は少し怪訝そうな顔をした後、心を見透かすよつた澄んだ栗色の目で、まつすぐにあおいの眼をのぞき込んだ。

そして、安心したよつて目をそらすと、急に話題を変えた。

「その事より、まづこの神靈の正体を考えてみましょ」

「お分かりになるんですか？」

「正直、私としても推測にしかなりませんが……これだけ状況証拠が揃つていれば、結論は導けるでしょ」……まづ狐、と呼ばれる人外の存在には、三種類あるのは知っていますか？」

「三つ、善狐と妖狐の一種類ではないのですか？」

いぶきが指を折りながら、聞き返す。あおいも座間も、怪訝そうに首をひねる。

「やはり、『存じなかつたですか……』一つは妖狐、あるいは野狐と呼ばれる妖怪としての狐ですが、善狐には二種類、といふか一系統あるのです」

少し考へ込むよつていた真菰が、はつと思い当たつたよつて顔を上げた。

「それは、もしかすると伏見稻荷と豊川稻荷の事でしょうか?」

「その通りです。

伏見稻荷は宇迦之御魂神つまり日本古来の豊穣の神を主祭神として祀っていますが、豊川稻荷は荼吉尼天を祀る寺院で、この一柱の神は由来が全く違います。

もちろん、明治の神仏分離政策までは伏見稻荷でも荼吉尼天を祀る愛染寺が、境内に置かれていたのですが、今では廃寺となっていますしね。それ以来、伏見稻荷を筆頭とする神道系の稻荷神社では荼吉尼天を祀っていません。

さて、荼吉尼天は真言密教における天女の姿の仏尊ですが、その源流はインドのダー・キーーという女神です。ダー・キーーはチベット仏教では高位の女神として重要な位置を占めますが……

「ちょちょ……ちょい待つて下さい先生。

さつきから話が複雑な上に、明治やラインドやら、ぶつ飛びすぎですわ。すこおしかみ碎いて、オレの頭にも分かり易いように話してもらえまへんか?」

座間は、箕島教授の説明を必死で聞き取ろうとしていたが、途中から全くついて行けなくなつて音をあげた。

「座間君。君の知識と思考力に合わせて話すのは大変なのですがねま、平たく言えば、豊川稻荷系の荼吉尼天の本来の姿は、食^グ鬼^ルに近い悪鬼神で、その神使は本当は狐ではなく、ジャッカル……古来日本では野干^{やかん}と呼ばれるものであり、同じ狐という括りではあっても、本来の意味で狐ではありません。

つまり、普通の妖狐とは、まったく相容れない存在だということです」

「悪鬼神ですって？ そんなもの、どうして崇拜したりするんですか？」

そう言つてふきは、全く理解できないといった表情である。

「現世の利益の究極は、他者どころか己自身すら生け贋にしてでも幸福になりたいと願つ、人間の強い欲望にあるからでしょう。もちろん、豊川稻荷などの日本における茶吉尼天信仰が、すべて危険なものである、というわけではありません。本来は憑き物落としや、病氣平癒、開運招福の神として靈験あらたかな善神です。それこそ、我々天狗の修法の一部にも習合していますよ。飯縄の法は別名、茶吉尼天の法とも呼ばれるくらいですからね」

「じゃあ、どうして今回のような事態になつたのです？」

「座間君。この神靈は自殺した少女の靈の姿をしていた、と言つていましたね？ ダーキニーは、ヒンドゥーの中では不慮の死を遂げた女性の靈魂であるとする考えがあります」

「つまり……自殺した少女の靈魂は、ダーキニーの依り代となつていふ……ということですか？」

「まあしくぞうです。

重要なのは、あくまで蘇つたのは、悪鬼神ダーキニーの化身であり、眷属でもある野干であるひとつことです。仮としての茶吉尼天ではなく……ですね」

「塚に封じられるようなものでも、やはり神靈なのですか？」

「いふきは、納得がいかないといった顔だ。

「いえ、封じられていたのではなく、おそらく、密教の隠し社として祀られていた場所を、破壊したか何かしたのではないでしょうか。とはいって、お膳立てが整いすぎています。

こんな状況で、この工事の施工業者が何も知らない、とは思えません。なぜなら……」

そこで言葉を切った箕島教授は、あおいに向き直った。

「なぜなら……圓野君、この工事をしていたのは、圓野組なのであります」

「え……」

一瞬、あおいは箕島教授が何を言っているのか、理解できなかつた。

またか、人間が意図的に危険な祟りを引き起しはじめるなどとは、考えもしなかつた。

それどころか、それをやつているのが、尊敬する祖父が創業し、今は父親が経営している会社かも知れないといつのだ。

「箕島先生、どうやら今いのこの場所に、ダークニーの塚があつたようなのですが……子供達が掃除中にその塚を壊してしまい、少女が塚に血を浴びせてしまった、ということまで、先程分かつたのです。

私は、意図的なものではなく偶然のよつた気がいたしましたが……」

真菰専務が腕を組み、首を傾げて考え込むよつとながら囁く。

「たしかに圓野組当代の社長、圓野明徳はビジネスライクな事業家

です。

が、靈的なものを軽んじる事はあっても、それを逆用して利益を得るよつなことは、やらないと思ひますか

「ふうむ……しかし、圓野明徳氏は僧籍も持つておられたはず。しかも、陰陽の世界に長けた圓野家の当代が、いくらなんでも、これほど強力な太古の鬼神を封じた塚を、見逃しますかね？」

「先生……私、父の所へ行つて確認してみます」

「申し訳ありませんが、そうしてみてください。

実はここに来るまで、私は圓野君までも少し疑っていたのですよ。もつとも、あなたの反応を見て杞憂であつたと分かりましたがね。疑つたことは謝りますが……それほどに密教の神靈は強力で、扱いが難しいものと、心得ておいて下さい」

「……はい」

小さく返事をしたあおいの顔はこわばり、真つ青であった。

あおいにとつてあまりに想定外であったが、事実だとすれば、自分自身にも責任があると考えているのだろう。

座間はそのあおいの表情を見て、よつやく葉子の言つたかったことがすべて理解できたよつな気がした。

相手は強力な神靈であり、簡単に歯の立つ相手ではない。しかし意図的であるよつとなかよつと、圓野組が絡んでいるとなれば、あおいはどんな無理をしても、一人でケリをつけよつとするだらう。

やうなれば……

（たぶん……オレ自身も見落としていた記憶の中に、工事看板がなにか……施工業者を特定できるものがあつたんやな……）

そう思つと、それに気づかなかつた自分の間抜けさ加減に無性に腹が立つた。

（稻成先輩は、それにすぐ気づいて社長に知られんよつて、なんとか片付けようとしたんや。そやのに、オレは結局、最悪の結論を社長に知られてしもうた。

オレは……ほんまにアホや）

そう思つと、どつと疲れが出て地面に座り込んだ。気がつけば、体の節々が痛む。

火事で負つた火傷の、炎症の熱が上がつてきているのだ。考えてみれば、朝から飲まず食わずに走り回り、薬も切れかけている。

「そついえば、座間君」

箕島教授が、座り込んだ座間の前に立つた。

「あなた、ダーキーと降魔の剣で戦つて、負けたそつですね？」

「いや……箕島先生。降魔の剣は神氣の武器ですし、神靈には通じまへんやろ？」

「あなたは……阿呆ですか？」

「へ？」

「太郎坊がかなり怒つています。あなたは短期間とはいえ、月ノ輪

流継承者の元で修行をした鳥天狗ですよ？ その程度にしか使えないなら、降魔の剣を返していただかなくてはなりません」

いつも笑つてゐるような表情の箕島教授が、珍しく口をへの字に曲げ、

厳しい表情で座間に詰め寄る。

「み……箕島先生、座間君は、火事で重傷を負つた直後なんです。許してやつてもうえませんか？」

あおいがあわててフォローするが、箕島教授の表情は変わらない。

「いいえ、その大火傷にしても、座間君が、きちんと降魔の剣を使いこなしていれば負うはずの無かつた怪我です」

そう言つて座間の前にしゃがむと、顔を近づけて目をのぞき込むようにした。

「太郎坊が呼んでいます。稽古をつけてやるから、来い。と。

今までは、必ず命を落とす事になるとも言つています。私もそう思う。座間君、あなたに修行をやり直す気はありますか？」

「ちょっと待つて下さい…… 座間君は、昨日まで意識不明だったんですよ？ それに稻成さんも七海ちゃんもいない今、座間君までいなくなつたら……」

あおいの声は、悲鳴に近かつた。

その理由は、仕事の事だけではないのは明らかだった。

「圓野君。もし、今の状態で座間君がダークニーと相対すれば、今

度は死にますよ?」

「………… 箕島先生。 オレ、 行きますわ」

「座間君!-?」

「社長…… オレは…… 役立たずのまま終わりたないんですわ。
それに……」

(あなたを、 なにがなんでも守りたいから)

後に続けたかつたその言葉は、 敢えて呑み込んだ。

「………… それに、 修行やいつても一回田やし、 ぱぱぱっと仕上げて、
すぐ帰ってきますつて。 そんな顔せんといて下下さい」

そして、 あおいに心配させないよう、 できるだけの笑顔を作つて
見せた。 だが、 いつもの座間の脳天気な笑顔でない事は、 誰の目に
も明らかだった。

「それでは座間君。 私につかまつてください」

「え? もう…… 行くんですか?」

あおいは、 驚いて声を上げた。

「もちろんです。 さつきも言いましたが、 私は忙しいのです。

しかし、 座間君一人では、 太郎坊のいる京都まで時間が掛かつて
仕方がありません。 私が送つて差し上げます」

「社長。さつきも言いましたやう。すぐ帰りますさかい、心配せんといへぐだぞ。」

箕島教授の右腕につかまるよつにした座間は、もう一度あおいで、あの、いつもとは違う強ばつた笑顔を見せた。

「座間君。社長の事は心配しないで、行つて来なさい。あんたたちがいない間、私が命に代えても守るから」

「さう言つてぶきの日は、すでに覚悟を決めているよつに見えた。とはいえ、相手の出方も分からぬ中、真菰専務といぶきの一人で、どこのまでやれるのか。」

「今日の講演が終わつたら、私ももう一度こちらへ顔を出します。少なくとも、圓野組の当代の考え方を知りたいですし、流れによつては、力をお貸しせねばならないかも知れませんからね」

「さう言つていただけると心強いです。ありがとうございます。先生

あおいは、箕島教授に深く頭を下げた。

しかし、その言葉とは裏腹にあおいの顔色は真つ青なままで、その表情は、まるで雨に濡れた捨て犬のようであつた。

「では」

その一言を残し、一瞬にして次郎坊と座間は視界から消えた。

その後には、小さな土煙が舞つてゐるだけだ。空を見上げてみても、影も形も見あたらない。

「社長。座間君なら大丈夫ですって」

いぶきのその言葉も耳に入らない様子で、あおいは呆然と佇んでいた。

§1-2 深山の怪

§1-2 深山の怪

「そろそろ、京都上空です。

お山の場所は知っていますね？ 私は降りているヒマがないので、このまま行きますから、太郎坊によろしく伝えておいて下さー」

箕島教授は、ひともなげに言い放った。

が、はるか雲の上のことである。京都びじりか、下には雲海が広がるだけであった。

「ええっ！？」

「オレ、こんな高度から、降りた事ありまへんで？」

「この程度で何を言つているんです。それも修行です。そつそと手を放しなさい」

箕島教授はそう言つたと、腰につかまる座間の手を軽く叩いた。たいして強く叩いたとは見えず、実際に衝撃は大したことなかつたのだが、座間は思わず手を放した。

「これが、剣術で言つ虛実の技術です。よく覚えてお……」

箕島教授の説明する声は、途中でかき消された。

慣性で、箕島教授と同じ方向に数秒間飛んでいた座間だったが、あつという間について行けなくなつて引き離されたのだ。座間は必死で飛んだが、次第に高度が保てなくなつて下降していった。

雲海を抜けると、眼下には座間にとっては懐かしい京都の町並みが広がっていた。

碁盤の目のように真っ直ぐな道。

といふどに、木造の町並みや大きな建築物が見え、その周囲には、四角く区切られた大きな社寺林が広がる。

しかし、不自然に新しい京都駅や、展望台のあるホテルなどもあり、交通量は意外に多く、そこかしこで渋滞している。

日本有数の古都と言われている京都は、上空からは少しづかばぐに見えた。

（たしか…………安宅山やつたな…………もつと北や）

修行時代…………といつても、修行したのは2年間しかない。

大学卒業までの短期間に、鳥天狗としての技や術を一通り覚えるため、箕島教授に連れられて、何度も訪れた地であった。

京都の北部と言えば、靈場や靈山の集中地帯もあるが、嵯峨野などの有名な観光地もある。割と人が多いため、真っ昼間の飛行は目撃されやすい。

座間は、かなり高度を取り、なるべく本物の鳥に見えるよう、黒い着物を大きく広げ、翼を見せた。

（懐かしい山々やな…………太郎坊様の庵は…………もつ少し先か）

そう思いながら飛んでいると、下方から甲高い若い女性の悲鳴が聞こえた。

「キャーッ！…」

多少の事なら、放つておきたいところであった。

早く修行をやり直して、あおいの元に帰りたいのだ。しかし、どうも普通の声ではない。

しかも、すでにかなり山深い場所である。登山家や修行者も滅多に近寄らない上に、そもそも道など無い領域だ。

（こんな場所で……… いつたい何なんや？）

周囲の山々を見渡しても、太郎坊の庵まではまだ幾分距離がある。しかし、とにかく一度降りてみることにした。とはいって、声の聞こえた場所に降りて、その人間に目撃されても厄介だ。

いつたん、少し離れた林に降りるしかない。座間は翼を半分たたみ、下降速度に重力を乗せた。

落葉の季節には早いが、林の中は、腐りきっていらない去年までの落ち葉が深く積もっており、

ふわりと座間が降り立つと、ふくらはぎまで埋まった。すぐさま、持ち前の素早さで、女性の声が聞こえたあたりへ走る。太陽の届きにくい林の中は、低木や草はあまり生えておらず、意外に走りやすい。走り出すとすぐに、赤っぽい服が見えた。

どうやら、大きな木の根元に女性が座り込んでいるようだ。

「どうしたんや……」

声を掛けながら、全速力で駆けた。

「助けてえ！……」

女性の声が林中に響きわたる。

「な……何やアイツ、らはーー?」

座間は、自分の目を疑つた。座り込む女性の目の前、ほんの数m先に奇怪な生き物の群れがいたのだ。

人のように後足で立つノウサギ。

異様に大きなネズミらしきもの。

両前足のないクマ。

体毛のないイノシシ。

頭の半分無いシカ。

そういうつた、異様な獣たち数十頭の群れが半円状に若い女性を取り巻き、今まさに襲いかかるうとしていた。

「つおおおおーーー!」

座間は、獣たちを齧るように叫び声を上げ、腰のキー ホルダーに手をやり、降魔の剣に気を送り込んだ。

何も知らない一般人の目の前で、鳥天狗に変化するわけにはいかないが、こうなると武器は必要である。小さな両刃の直剣は銀色に光り輝きながら、1m以上の長さになつた。

奇怪な動物たちの群れはといえば、まったく動じる様子もなく、座間の方へ向かつて来ようとしている。

並みの野生動物であれば、この勢いとスピード、そして殺氣を放つて突つ込んでくる座間を見れば、

一も二もなく逃げ出すはずだ。

(なんちゅう不気味なヤツ、らや)

座間の背筋を寒いものが走る。

(これは、関わらん方が正解やうつな……)

脳が警戒信号を発している。

座間のもうひとつ本性である、野生のカラスの本能が、危険を察知したのだろう。だが、助けを求めている女性を放つて逃げるわけにはいかない。座間は剣を左下段に構えたまま、異様な獣たちの群れに突っ込んでいった。

まず、真っ先に牙をむきだして襲いかかってきた前足のないクマを、左下から右上に向かつて、振り上げ、逆袈裟斬りに腹から肩まで裂く。

クマはあっさりと倒れ、周囲にどす黒い血が飛んだ。

血の臭い、というよりも腐臭に近い臭いがあたりに立ちこめる。

そのまま振りかぶった剣で、今度は頭の半分無いシカの首を斬り落とした。邪魔者を蹴散らすように、群がる動物どもをはじき飛ばし、大木の幹に体をあずけてしゃがみこんでいる、女性の側へたどり着いた。

一方、動物たちは座間に気づくと、わらわらと近寄ってきた。

驚いた事に、たつた今斬つたはずの一体の動物も、クマは、茶色いはらわたを引きずつたまま、シカは首のないまま、ふらふらと立ち上がりつて、やってくる。

「何い？ 死なへんのか！？」

その不気味な姿に、さすがに座間も驚きを隠せない。

だが、のんびり驚いている場合ではなそつだ。このまま包囲されてしまふことになる。

「おい！ しつかりせえ！ 逃げるで！ 」

座間は、しゃがんだ女性を抱き上げると、その場から一気に跳躍した。深く積もった深山の落ち葉は、クッショントバネの役割を果たしてくれる。

谷側に向かつて跳べば、普通の人間の跳躍力でも距離で一気に十数mは稼げるのだ。

当然座間は、並みの人間には不可能な距離まで、遠く、高く跳んだが、座間の腕にしがみついて目をつぶっている女性が、それに気づくとは思えなかつた。

落ち葉のクッショングが、一人分の重さを柔らかく受け止める。さらに、そのまま数度の跳躍を繰り返した座間は、一気に谷底まで降りた。

谷までの斜面に着地場が無く、ほとんど落ち葉に覆われていたのは僕倅であった。

谷底はあるで敷き詰めたような玉砂利の河原が広がり、その中央部には、消えそうなほど細い渓流が流れていた。

「いのまま走るで……」

「は……はいっ……」

女性を降ろした座間は、砂利の上を谷底を上流へ向かつて走り出した。

手を引かれている女性は、つまづいて、たびたび転びそうになるが、いいタイミングで座間が腕を引っ張り、転ばせない。一人は、あつという間に数百mを駆け上ると、一息ついて後ろを振り返った。そう素早くはないのか、諦めたのか、どうやら、さつきの動物たちが追つてくる気配は無い。

「あ……あの、動物ゾンビは、いつたい何なんでしょう？」

体をくねに折つて膝に手を当て、息を切らせながら、女性が座間に聞く。

「オレにも分からへん。しかし、動物ゾンビとは上手に言ひ方しよるな」

座間は息一つ切らはず、鋭い目で、自分達が今走つてきた方角を見ていた。

「わ……私、友達とはぐれて……そしたら……」

「詳しい事は後で聞くわ。ヤツらが諦めたかどうか分からへんし、もたもたしどって口が暮れると厄介や。とりあえず、オレの師匠の庵まで行こう」

「師匠？」

「オレは修験者なんや。

」の奥にオレの師匠の住んどる家があるんやけど、そこまで行けば、少なくとも雨露はしのげる

そう言いながら、降魔の剣を、先ほど剣と同時に大きくしておいた鞘に収めた。鞘に収めた剣は、そのまま錫杖のよつに杖や武器として使える。

「わわ……わかりました」

女性は剣を見て驚いたような顔を向けたが、何も言わなかつた。

細い川の流れる谷底を、さらに上流へ上つていくと、所々に大きな岩や淵があり、そのたびに迂回しながら、一人は上を目指した。しばらく行くと、傾斜が緩い場所に出た。

そこに太い丸太を三本並べ、植物の蔓で念入りに縛つてある橋が架かつてゐる。

「エエ。ここから庵まで道があるんや」

座間はさう言つと川から外れ、細い山道を歩き始めた。

「あの……私、大月姫子つていいます。ヒメコつて呼んで下さい。あなた……名前は？」

「ああ……座間や」

「クラマさん……何も事情、聞かないんですね。何で私がこんなところにいたのか？……とか、あの動物ゾンビのこととか……」

「話したかつたら話せばええよ。あんな不気味なヤツらの事、思い出したないやう思つて聞かへんかつただけや」

「クラマさんは、いつもこの山の中に？」

「修行の時に来るだけや。いつもはフツーにア界でサラリーマンや」

「なんか……」

「なんか？」

「なんか、クリスマさん、あたしとお話ししたくなさう」

「…………いや、そんなことあらへんよ」

そう言ひと、座間は改めてヒメ口と名乗つた女性を見た。
口調は幼げだが、見た目はどちらかと云ふと大人っぽい。年齢は、
25歳の座間とそう変わらないように見えた。

しかし、たしかによく見ると、こんな山奥まで来るような装備で
はない。丈の長い赤いチエックのシャツ、短パンにレギンスといつ
た服装は、少し前に流行つたアウトドア系の服装のようだ。

とはいへ、ファッショントレンドでとても機能的とは言えない。

履いている靴は革製のスニーカーであるし、肩から提げているリ
ュックも大した物が入つてゐるようには見えなかつた。胸まである
長い茶髪は、あちこち乱れたようになつてゐるが、これはこれで、
見苦しくない。今風のセットなのかも知れなかつた。

「よおまあ、そないな格好で、こんなとこまで来よつたな」

「あー……今頃になつて、そんな事言つてはるんですかあ？」

「今、氣づいたんやからしゃあない。で? なんで、こないなとこ
まで来たんや?」

「うちら、女三人で京都巡りしてたんです。貴船神社から鞍馬寺ま
での遊歩道を歩くつもりで来たんやけど、なかなか入り口が分かん
なくつて。

そしたらへんなヤツらに声掛けられて……」

言ひながら、イヤな事を思い出したのか、ヒメ口は次第に声が小

れへなつ、うつむこた。

「まあ、整備された遊歩道や思つてたら見つからんかも知れへんな。アレは、少し本格的なハイキングコースや。それでも、慣れれば子供でも行けるハズやけどな」

ヒメ口の落ち込んだ様子を察して、座間はわざと呟く言ひ、敢えて話の焦点をずらした。

「やうなんですか？ で、そのへんなヤシジに無理矢理車に乗せられてもうつ……

「なんやで？ そりや、犯罪やないか！ で、友達はどないしたんや？」

「トイレに行かせてとか言つて、途中でみんな逃げたんですね。でも、そいつらウチの方だけしつつこく追つてきて……逃げる時に、一人キンタマ蹴つ飛ばしてやつたから、怒つたみたい。山の中に逃げ込んで、まじたんやけど……道に迷つてもうで

「『迷つてもうで』やあるか。いい、貴船から10km以上離れとるで」

「えーつ！？ ウチ、そんなに走つてへんでえ！？」

少しリラックスタしたのか、ヒメ口の面葉は露骨な関西弁になつてきた。

「当たり前や。たぶん、ソイシラが車に乗せて、けつこいつ走つ回つたんやる」

「そんなに長くは乗つてへんかったんやけどなあ……あ、そりや。で、ね。山道を歩いつたら、イヤな臭いがして……」

「で、あの動物ゾンビが出たわけかい」

「あーん。もうー。話、飛ばしそぎや、クラマせんー。そりやなくつて、茂みがガサガサつて鳴るから、のぞき込んだんやねん。やしたう……」

「動物ゾンビがいた。と」

「もひー！」

「話聞く氣あへんの？ のぞき込んだらウサギがおつて、何が食べとったんや。何やつたと思つ？」

「？ 動物ゾンビとかひつかつたんか？ ゾンビの食いもんは、死体が定番や」

それを聞いたヒメ口は、ふつと頬をふくらませると、何も言わずに先に立つて歩き始めた。

「ちょい待てや。離れると危ないでー！」

「クラマさんなんか好かん！」

ヒメ口は振り向きもせずに、道の先へと歩き始めた。

座間は苦笑いをすると、ぽりぽりとこめかみを搔いて、後を追つた。太郎坊の庵への道は、険しくはないが単調である。

しかも、つづら折りの山道は、先が見通せないため、同じ所をぐ

ルグル回っているような錯覚を覚える。一人とも、じ邯ひ黙つたまま一本道を歩いた。

「あー！ もう…」

沈黙に耐えかねたかのよつて、ヒメコが叫んだ。

「だから、なんやねん？」

「疲れた。おぶって」

向ひつを向いたまま急に立ち止まつたヒメコは、ぶつめひつて言つた。

「師匠の庵は、むつすぐわいや。むつ少し辛抱してねや」

「こや。もう歩かへん」

ヒメコは道に座り込んだ。

「置いてくどい？」

「クラマをとて、ほんまに女の子の扱い、知らへんのやねー。」

ヒメコは振り向くと、座間に向かつて思つつきあかんべーをして、また、やつと歩き出した。

（女の子の扱い……か……）

座間に普段顔を合わせてこむ女性陣は、あおこを含めて、こわゆ

る普通の女の子とは少し……いや、かなり違う。

どんな状況に置かれたとしても、間違つても、今のヒメ口のよつてな反応はしないだろ?」

しかし、座間が今のヒメ口の心情を理解できないわけではなかつた。座間も数年前までは、ヒメ口でもいる普通の若者であったのだから。

（しゃあないなあ……せやナビ、女の子に久しづりに会つた気がするわ）

座間にとつて、拗ねたヒメ口は不思議に新鮮だつた。
いついつ時は、とにかくきちんとコミュニケーションを取つて、
座間が自分に興味がないわけではないのだと、理解してもらう以外
にない。

「ヒメ口」

「…………何やの?」

「あの動物ゾンビ、な。思ひ出すると、妙な特徴があるんや」

「特徴?」

「動物の種類、どんなのがいたか、覚えどるか?」

「シカとか、ウサギとか……」

「そりや、それ以外には、クマ、ネズミ、イノシシ……ムササビやリスみたいなんも、おつた」

「それがなんやのん？」

ヒメ口の声は、まだ怒っているのか、素つ氣ない。

「キツネやタヌキ、カラス、テン、イタチ、ヘビ、ガマ……」この山には、他にも色んな生き物があるけどな。そういう、妖怪化しやすい動物がひとつも見当たらへんかった

「え……？ 妖怪化？」

へんな事を言い出したと思つたのか、ヒメ口はよつやく振り向いて、座間の顔を見た。

「ああ、まあ、少し分かりにくいか。

ホラ、キツネやタヌキに化かされたとか、昔話とかにあるやう？

「うん……聞いた事、あるかな」

「あれはまあ、年を経たり神さんの影響を受けたりして、動物が妖怪になる……まあ、普通やない力を持つよつになるからや。つまり、化けダヌキ、化けギツネ、うわばみ……そういうたもんになる。

せやけど、化けウサギとか、化けシカとか、聞いた事あるか？」

「ない」

「まあ、まったくそういう事が無いわけぢやうけどな。

ああいつ草食性の強い動物や、ネズミやリスみたいな寿命の短い動物、あと、クマみたいにもともと靈格が高い動物は、妖怪になりにくいや

「なんやの、それ？ なんやまるで、妖怪がほこまこねるみたいな
言い方して」

「動物、ゾンビがおったつちゅうの、元のうつ、妖怪ほこりこくゆつとか？」

「そ……それは……」

「ヨで修行してると、な。妖怪ぐらこせ、普通に会つ

「こやーー、脅かせとつてよーー。」

ヒメノは身をくぐめり、座間の側に駆け寄り、腕をがりゅうと握
つてきた。

「べつに、脅かしどりよ。」

妖怪も動物も同じや。つきあこ一方せえ間違えへんかつたら、何も
怖い事なんかあらへんよ」

「ほんまっ？」

「ほんまや。

せやけど、わっかのヤツらは様子がおかしい。あんなん、見た事
も聞いた事も無こし、対処法もわからへん。オレの師匠やつたら、
分かるやうひとは思ひつけだな」

「ねえ……」

「なんや？ もひすぐやから、辛抱してくれや」

「違ひんや。」の「オイ……」

「…? なんやこの甘つたるこ……死臭か…?」

座間は、腰の剣に手をやり、身構えた。

急にあたりの空気が変わった。漂い始めたその臭いは、熟し切った果物の甘い匂いに似ていたが、よく嗅ぐと、肉の腐臭に変わつていいく。

「この臭いやねん……アイシウ……おのの?」

「分からへん」

座間は短く答えて振り向くと、数m後方に下がり、軽く身を沈めて構えた。

そして居合の要領で、一気に低木の茂みを薙ぎ払う。視界を邪魔していた茂みは、支えの枝を失い、自身の重みで沈んだ。

「あ……あほな……」

たしかに、何の気配もなかつた。

何の物音も聞こえなかつた。

しかし、茂みが消えて開けた視界に立つていたのは、はらわたを引きずつたままの、あの前足のないクマだった。

それだけではない。

そのすぐ真後ろで、ふらふらと立ち上がったのは、先ほどより数を増した、動物ゾンビでもあった。

「ヒメコ… 先に行け！ 走るんや…」

「イヤヤ……クラマはんはどつするん？！　それに……先つて言うたつて、どこの行けばええん！？」

「そこを曲がつたら、すぐに庵があるんや……　見た田は古いけど、カギはあるー　中に入つて、カギを掛けて閉じ籠もるんや……」

「すぐ……すぐ来てや……」

ヒメコの枯れ葉を踏む足音が遠ざかっていく。

座間は、前足のないクマと対峙しながら振り向かずにそれを聞いた。降魔の剣で斬つたところで、大して効果は無いのは分かっている。

座間は、葉団扇を大きくして、クマを思い切り扇いでみた。

もし、葉団扇と同じ土氣、あるいは相剋の水氣が火氣の宿つた化け物なら、いくらかでも効果があるはずだつた。しかし、強風で少しよひめいたものの、クマにはまったく怯む様子もない。

「やつぱ、あかんか……」

だが座間は、葉団扇をしまいかけて、おかしな事に気づいた。牙をむき、座間に襲いかかるうとするクマが、何度も空を噛む。べつに座間が避けたわけではない。

「コイツ……田え見えへんのか？」

よく見ると、欠損している部位は、田だけではない。片耳も千切れおり、そこから頭蓋骨らしき白いモノが顔を出している。

その他の動物ゾンビどもも、五体満足なものは一体もなかつた。

「ほんまに……何なんやコイツらー？」

座間は適当なところを見計らつて、きびすを返して走り出した。いまだ決め手は見つからない。だが、このまま持久戦になるなら、太郎坊の庵に立て籠もつた方が有利だ。

山道を急な角度で曲がり、数十m走ると、ぱつと開けた場所に出る。

そこには、よく手入れされた小さな畠があり、その奥には、茅葺きの小さな庵が建てられていた。

「ヒメ」「… 無事か！？」

無事にたどり着いたなら、返事があるはずである。しかし、庵の中からは何の応えもない。

「ヒメ」「… ヒメ」「…」

「やあひい…」

返事の代わりに、奇怪なうなり声と共に庵の戸口が破られ、内側から巨大な牡鹿が飛び出した。

§1-3 親子対決

§1-3 親子対決

「お父さん……少し聞きたい事があるのよ」

座間が京都の山深くで、奇怪な獣たちと戦っていた頃。あおいは圓野組の社長室で、父、明徳と対峙していた。

モダンデザインのプレジデントチェアに腰かけた明徳は、年季の入ったマホガニー製の机の向こうで、不機嫌そうに煙草をくゆらせている。

夏の強い日射しが傾き始め、部屋の中に射し込む時刻になつてきていた。閉められたブラインド越しでさえ眩しく照り返し、逆光になつた明徳の表情は見えにくい。

「こちらも言いたい事がある。あおい……何故、先日の役員会を無断欠席した?」

「無断じゃないわ。

後藤副社長から、何も聞いていないの?」

「聞いているとも。

だが、あんな理由は理由にならん。一方的に相手を非難すれば、約束事を反故にしても良いといつなら、どんな社会も成り立たんだろ?」

「だから、トープスへの支援は打ち切ればいい、と、そう言つたわ

「だから、お前はまだまだ甘ちゃんだと言つんだ。

社員に通告もせず、感情にまかせて破滅の方針を決めてどうする？ それで、誰かついてきてくれる者がいるとでも言つのか？」

「みんなには、後で了解を取つたわ。

全員で頑張つていくつて決めたのよ……誰一人、欠ける事なくね……」

言いながら、あおいは行方不明の葉子と七海、そして、いつ終わるとも知れない修行に旅立つた座間を思い出し、唇をかみしめた。

「破滅的な社員どもだな。呆れたものだ。

まあ、だから利益もとれない会社に入社したりするワケか

明徳は鼻にしわを寄せ、煙を一気に吐き出すと、灰皿に煙草を乱暴に押しつけた。

「何とでも言えればいいわ。

もう、あなたには関係のない話よ。そんな事よりお父さん、圓野組は貴田小学校のエコスクールの工事を請けているわね？」

「それがどうした？」

「伐採した敷地内の林に、ダーキーの塚があつたでしょ？」

「何だと？ ダーキー？ 何の事だ？」

「ヒンドゥーの悪鬼神、ダーキーよ。

野干、ジャッカル、何でもいいわ。あの小学校には、そういう神

靈を祀つた塚があつたの。それを圓野組が黙つていたせいで、小学生が一人自殺し、校舎が全焼したのよ！」

「馬鹿な。伐採した林はそう古いものではないはずだぞ？ ダーキニーの塚だといつなら、少なくとも明治5年の修驗禁止令以前のものはずだろ。何かの間違いではないのか？」

明徳の反応を見て、あおいは心底ほつとした。何者かの仕業としても、少なくとも父のやらせた事ではないらしい。

「箕島先生はそう思つてはいらつしゃらないわ。圓野組が、いいえ、お父さんが塚のあることを知りながら、意図的に破壊したのだ、と考えておられるのよ。」

「信じるも信じないも勝手だが、少なくとも、私は知らん。だが、ウチの社員が知らなかつたかどうかまでは分からん」

「社員が知つていて、そんな危険な鬼神を意図的に解放したのなら、当然、社長であるお父さんにも責任があるわ」

「そうかも知れんが、それがどうした？」

建設工事をやっておれば、塚も、祠も、古墳も、遺跡も腐るほど出る。

文化的に意義がありそつなら、発注者に報告はするが、邪法の祀られた塚など、いちいちそんなものに構つておつては、仕事にならんわ

明徳は吐き捨てるよつて言つた。

「人が一人、死んでいるのよ？」

「わしらも命がけで仕事をしておる…… 予測不能の靈的な危険にまで気を配れるか！」

「そり…… そういう考え方なのね？」

「先代はどうだつたか知らんがな。

私が社長を継いだ時、圓野組は利益などほとんど出ておらんかつた。それも当然だ。

大きい仕事には手を出さず、小さい仕事も、地元業者に配慮して手を広げず、あまつさえ、わずかに受注した仕事もいちいち着工前に出向き、妖どもを使って生き物を避難させておつてはな

その言い様に腹を立てたあおいは、思い切り机を両手で叩いて明徳を睨みつけた。

「それの何が悪いのよ！－

利益は出でていなくても、損はしていなかつたんじょ！？ いたずらに手を広げて、古参の社員をクビにして…… 会社が大きくなる事がそんなに大事！？」

「力のない小さな会社がいくら頑張つても、出来る事は知れておるのだ！」

圓野組があつたからといって、この地域の自然破壊は止まつたのか！？ 圓野組のおかげで、この地域の何が変わつた！？

建設業は社会資本を整備し、国土を保全し、より多くの人々が安心して暮らせるようにするのが責務だ！！ それが、会社の利益となり、社員の生活の安定と幸福につながり、ひいては地域社会、国家への貢献となるのだ！

言いたい事があれば、自分の会社を、今の圓野組に負けない規模にしてから出直してこい……」

「古参の社員をクビにした事は！？ 社員の幸福を目指すが、聞いて呆れるわ……！」

「先代の雇つた化け物どもの事か？

工事で住みかを失つた、大して力のない妖怪なんぞ雇い入れてどうする？ 結局、そんな連中は社員としても役に立たんから、お引き取り願つただけだ。

私の法力で滅してしまわんだけでも、ありがたく思つて欲しいものだな」

「じゃあ……ダーキーのことも、知らない、で済ませる気なのね？」

「知らんものは知らん！ わしは会社を守るので精一杯なのだ。

余計な話を持ち込むな！ 用が済んだなら帰れ！！」

「言われなくとも、帰るわよ……」

あおいが、ドアを激しく閉めて立ち去つた後、明徳は頭を抱えて、ため息をついた。

売り言葉に買い言葉であった。あおいと話すと、いつもこうだ。本当はもつと穏やかに、自分の娘と接したいのだが……

（あおいめ。口ばかり達者になりおつて、社会や経営の本質が、何も分かつておらん……）

明徳は、大きく一つため息をついた。

しかし、そういうえばあおいは、一つ気になる事を言っていた。

（ダーキーの塚だと？ そんなものが、あの歴史の浅い小学校に存在するはずがない。それに、わしも現場へは行った事があるが……そんな気配はまるで感じなかつたぞ？）

少し考え込んだ明徳は、受話器を取つて内線番号を押した。

「後藤副社長を呼んでくれ」

＊＊＊

＊＊＊

＊＊＊

＊＊＊

「どうでしたか？」

社長室を出てエレベーターから降りたあおいを、真菰が出迎えた。

「話になんないわ。

でも……箕島先生の言つよつな、意図的なものは無かつたように思つ。」

「私も、そつは思つのですが……」

「何？ 何か気になる事でもあるの？」

「たしかにおかしいのです。あの場所にダーキーの塚があつたとして……火気の集中が塚の南にあつたせいだとすれば、もつと周辺で相応する水気や木気の集中が起こつても良さそうなものです。

なにより、ダークニー本体が、単純に塚から出てきた様子なのが妙です」

「言われてみればそうね……」

「それに、稻成君や伊園君は、いつたいどこへ行つたのです？ 少なくとも、塚のあつた場所はダークニーの本拠ではなかつたのではないですか？」

「ダークニーの性質や由来から、洗い直す必要がありそうね……」こんな時、稻成さんがいてくれたら……

「そうですね。

彼女の知識と情報収集能力があれば、ダークニーの本拠を見つけるのも簡単だつたでしが……」

蛟龍である真菰は、市内を流れる真菰川の主でもあるため、流域の大きな気の流れを読み、ある程度は操る事も出来る。

だが巨大すぎる力を持つため、小さな気の流れをキヤツチする事は出来ない。

また山姫であるいぶきは、植物の生活反応や水気の流れには敏感だが、そうしたことに関係のない特定の神靈の存在は感じる事ができない。

「とはいえ、なんとかするしかありません。

私はいつたん自宅に戻ります。見込みは薄いですが、真菰川水系全体の情報を、私の血族や配下の妖どもに調べさせてみましょう」

「私は……小玉鼠たちに頼んでみるわ」

あおいは、先日知り合つたばかりの小妖達の事を思い出した。

「名案ですね。」

「個体数の多い彼等なら、情報量も多いでしょうし、なにより本来、
野干やかんはネズミの天敵です。もしかすると、彼等の方が良い情報を持
つているかも知れません」

「師匠シフウ…………箕島先生のいらっしゃる夕刻までに情報収集を終えて、
真菰専務も、いつたん会社に戻つてくださいね」

「了解しました」

§14 邪法の結末

§14 邪法の結末

「まさか……ヒメ口! ? ビー! や! ! ! 」

庵から飛び出してきた巨大な鹿は、座間を威嚇するように前足で土を搔きながら、こちらへ角を向けていた。あの巨体で庵の中にどうやって入り込んでいたのか?

ヒメ口は無事か?

そしてこの緊急事態に、師匠の太郎坊はいつたいどこののか?

何にせよ、彼女に何かあつたら、先に行かせた自分のミスだ。その時、座間は気づいた。

牡鹿の枝分かれした巨大な角にまとわりついている、あれは……

ヒメ口の着ていた服の……残骸。

「ヒメ口! ? ! ! 」

座間の血が沸騰した。

急に頭の中がクリアになり、目の前の敵に意識が集中していく。それまで頭のどこかに引っかかっていた、すべてが消え失せた。あおいの事。

ダーキーの事。

葉子や七海の事。

太郎坊の用意しているであろう厳しい修行の事。

後ろに迫っているであろう、他の動物ゾンビの事も。

怒りのせつかけになつたヒメコの事ですらも、座間の意識から消え失せた。

座間の周囲の景色が、やけにゆつくりになつたよつに感じた。

その、スローモーションな世界の中で、座間はゆつくりと考えていた。

（やうや……忘れとつたわ。？を殺したあの日……まわり中の気が、オレの味方になつた気がした……それと同時に、相手の存在の中に氣の流れが見えたんや……せやから素手でも、その氣を破壊して倒せた……倒せるんや）

座間はあらためて牡鹿を見た。

半分白骨化した牡鹿……その存在そのものに、黒い影がまとわりついている。

（コイツは屍体なんや。

屍体に、何か術を掛けたヤツがある。その術で……死体をあやつとむ何かが取り憑いとるんや）

黒い影は、完全に牡鹿の存在と重なつていて。

しかし座間には、それを斬り分ける太刀筋がハツキリと見えた。

屍体は斬らない。

黒い影も斬らない。

この二つを斬り分けるだけだ。

構えは八相。

剣を担ぐよし、斜めに振り上げた型だ。自然と、切腹の際の介錯と同じ構えになつた。

スローモーションな世界の中。

一步、大きく踏み込むと、降魔の剣を右斜めから袈裟懸けに斬り降ろしながら、突進してくる牡鹿の脇を、すっと通り過ぎた。

ぐしゃ。

座間とすれ違い、数歩進んだ牡鹿は、前足を折つて頬くほれた。その時には、完全な白骨と化している。

座間の数m後方に、乾いた音を立てて、白い骨が散らばった。

「ちん」

鞘に剣が収められた。

まさに流れる水の如き、自然な動作である。

「ヒメ口つーー！」

叫んで庵の中へ入ると、奥の壁に寄りかかるように座り込んだヒメ口がいた。

だが、目を瞑つたままで反応がない。

「大丈夫かー？ヒメ口つー？」

「あ……クラマさん？」

氣を失っていたらしい。

ヒメ口は目を覚ますと、怯えたように周囲を見渡した。どうやら、大きな怪我はないようだ。

ぎりぎりで牡鹿の突進を躱したのだろう。シャツの右袖が無くなっている。

座間は、ほつとして大きなため息をついた。

「もう大丈夫や。アイツらの倒し方、分かつたさかいな」

「ほんま? クラマさん、すこいなあ……」

ヒメコは力無く微笑んだ。

妙に元気がない。どこか怪我をしているのかも知れない、と座間は思った。まったくの無事、というわけでもないようだ。

庵の周囲からは、下草を踏みしだき、茂みをかき分ける音が響いている。完全に動物ゾンビどもに囲まれたのである。だが、もう座間に不安はなかつた。

「ソリで座つて休んじるんやで?」

座間は、ヒメコの肩をぽんと軽く叩いて立ち上がつた。庵から外に出、暗い林に向かつて歩を進める。

林の手前の開けた場所まで進むと、真っ先に近づいてきたのは、あの前足のないクマだった。

「……成仏しいや」

一言呟くと、青眼の構えのままクマの方へ一步踏み込むと同時に、抜き胴。

白骨化して頬れるクマを振り向くこともなく、次のゾンビに向かつた。

両足で不気味に歩いてくるノウサギ。

振り抜いたままの右中段の構えを崩さず、返す刀で薙ぎ払う。

背後から突進してくる毛のないイノシシ。それを見もせずに、わずかに身を躱して、胴体を両断するように振り下ろす。

大型犬ほどもあるネズミ。

飛びかかってくる喉元に、剣を差し出した。

どの動物ゾンビにも、黒い影が見え、目を凝らすと、その影を死体と切り離す太刀筋が自然と分かつた。どれくらい剣を振り続けていただろか……。随分長く戦っていたような気もするが、実はほんの数分の事だつたのかも知れない。座間がはつと我に返ったとき、周囲には白骨の山が出来、動物ゾンビは一体もいなくなっていた。

「合格だ。やはりお前は、スジが良い」

背中から急に声を掛けられて、座間は驚いた。

しかし、もちろんよく知った声である。

「ダーキーーー」ときに後れを取つたと聞いた時には、厳しく叱らねばと思ったが、ぐじくどと理屈を言つより、実戦で追い詰めた方が良いようだな

振り向くと、一抱えほどの平たい石に腰かけて微笑む、小柄な老人の姿があった。

長い髪も、あご鬚も、来ている着物も、すべて真っ白である。

額に着けた、兜巾だけが黒かった。

「太……太郎坊様！ いつたい、ジンに行きはつたのかと……」

「私は、ジンにも行つてはおらぬよ。ずっと、ジンにおつたのだ」

「そんな……ジンにもお姿は見えまへんでしたが？」

「位相をずらしていたのだ。陰界と現界の狭間から、ずっとお前を見つかった」

「位相…………そつやつたんですか」

修業時代に聞いた事がある。

陰界と現界は、同じ空間を共有して重なり合つように存在している。しかし「位相」の違いによつて、お互に認識できないということらしい。

「位相」とはその世界共通の波動周期の事であり、妖怪は、この「位相」を変える事で両界を行き来するのだが、それを行うには強いエネルギーといくつかの条件を満たすことが必要であり、とても自由自在とはいかない。

たいていは、自分の住みかからしか行き来できなかつたり、多くの仲間の力で無理にこじ開けるようにして位相を変えたりする。

だが、神靈や強力な妖怪は比較的自在に、しかも単独で位相を変えられると聞いたことがある。

しかし、「陰界と現界の狭間」というのは、座間も聞いた事がなかつた。

「わしが見えるようになったのは、お前が多少進歩したせいで。
そやつらを斬れるようになっただろ？」

太郎坊は白骨を指すと、また優しく微笑んだ。

「まさか……これが修行やつたんですか？」

「そうだ。

良いか座間よ。こやつらは依り代としての屍体に、本質となる靈魂が重なりて、ひとつの中存在となつておつた……だが、こやつらに限つた事ではない。

妖怪も人間も、それ以外の生物も、また、石も、山も、川も、山も、海も……

すべては依り代と、それをその存在たらしめてある本質によつて成り立つてあるのだ。

本質と依り代を切り離せば、生き物ならばただの肉。妖怪ならば、当たり前のモノや生き物に戻る。そして物体であれば、構造が破壊される。

つまり、何者であるかと倒せる」

「ほんなら…………今の技があれば、どんな妖怪も倒せるつちゅうんですか？」

太郎坊は目を閉じ、首を静かに左右に振つた。

「お前は、月ノ輪流の入り口にやつと立つたに過ぎん。

極める事が出来れば、どんな妖怪も、生物も、神ですら斬れるかも知れん。だが、大きな存在や強力な妖怪になればなるほど、依り代と、それに重なつておる本質の結びつきは強固に、また複雑になる。

しかも本質たる魂も一つとは限らず、種類も多彩になる。もちろん、黙つて斬ってくれるものばかりでもない

「……あの奇怪な獣たちは、いつたい何だったのです?」

「……座間よ」

「はい」

「『反魂の法』といつものを知つてゐるか?」

「はい。たしか、西行法師が白骨を集め、薬草を塗り、植物の纖維でつないで蘇らせたものだと……」

「そうだ。

ただ、西行の術は不完全であった。由来のはつきりしない白骨をかき集め、周囲の山野の氣を宿させて、新しい生命を作ろうとした。それゆえ、意思も記憶もないモノとなつて蘇つたのだ

「なるほど」

「もし、完全な形で反魂を行えば、普通に生きている人間とまったく見分けの付かぬものとなるという。みなもとのもがな源師仲が蘇らせた人間は、その後大臣にまでなつたそうだ」

「は……はあ。しかし、伝説なんですか?」

「たしかに伝説だ。

しかし、死して本質の失せた屍体に、術によつて本質としての氣を再度宿らせる、と考えればどうじゅ?」

そこまで聞いて、座間はようやく気づいた。

「まさか、あの獣たちは、師匠がお創りになられたもの……なのですか？」

そうである、とすれば人が悪すぎる。

何の関係もないヒメコを驚かせ、こんな大変な思いをさせてしまつた。もし、座間が通りかからなければ、ヒメコはどうなつていたか分からぬ。師匠のする事であるから、表だつて文句は言えないが、あまりにいい加減だ。

座間は、少し眉根を寄せて不機嫌そうな表情をした。

「正直、お前の修行に使える、とは思つたがな。あれらは、私の作つたものではない」

「では……」

いつたい誰が、と言いかけた座間を手を挙げて制した太郎坊の目から、涙があふれるのを見て、座間は息を呑んだ。

涙の理由がまったく分からぬまま、黙つて言葉を待つ。

「……座間よ」

「はい」

「西行の術が不完全だつた理由は三つある。

ひとつ、屍体が複数の人間の寄せ集めだつた事。
ふたつ、生前の魂を宿した依り代がなかつた事。
みつつ、生命の核となるものがなかつた事」

「…………」

「2年前の事だ。

大切な一人娘を、暴漢どもに殺された修験者がおつた」

「え？」

座間は、怪訝そうに聞き返した。

突然、太郎坊の語り出した話は、何の関係も無さそうに思えたからだ。

「その修験者はこの一年間、苦労して反魂の術を再現し、一人娘を生き返らせるために使つたのだ。術は成功し、娘は生前のままに蘇つた」

「…………まさか」

「そうだ。

あの娘は、死人しびとなのだ」

「ヒメコが…………嘘や」

そんなわけはない。

そう、座間は叫びたかった。

抱き上げた時には、たしかに鼓動を感じたし、手を引いた時のぬくもりも残っている。普通の人間と、何ら変わるところはなかつたはずだ。

「反魂の術は、邪法だ。

生命の核となるべきものは、生きた素材である必要がある。その修験者は、自分自身の生き肝を使った。

また、どうやったのか、屍体に氣を吹き込む反魂香までも再現したのだ」「

「反魂香?」

「あの娘が体から発する香りの事だ。その香りが、山で死した獣どもを、不完全な形で蘇らせる」

座間は理解した。

あの動物ゾンビ達は、追つてきたわけではなかつた。ヒメコのいる場所で、蘇つたのだ。

あの甘つたるい腐臭のような臭いは、動物ゾンビの臭いではなかつた。ヒメコ自身から臭つっていたのだ。

そういえば、庵の中にはシカの角や毛皮があつた。

あの牡鹿は、庵に逃げ込んだヒメコの発する反魂香で、それが蘇つてしまつたのだろう。

「娘を蘇らせた後、修験者は生き肝を与えたせいで死んだ。そして、蘇つた娘は記憶を無くしたまま山野を彷徨い、獣の屍体を蘇らせてしまつたのだ」

「そんな…………それは、ヒメコのせこやあらへんやないですか」

「その通りだ。」

しかし、このままでは理由も分からぬまま獣の屍体を呼び覚まし、それに怯えながら、死ぬ事も出来ず、永遠に山中を彷徨うことになつた。

あの娘の苦しみを止めてやるには、誰かがどざきを刺してやらねばならぬ

」

「ヒメ口に事情を話して、屍体のない場所に匿つてやればええんやないですか？」

「今の状況をあの娘が理解した瞬間、術は解ける。

そうなれば娘は白骨に戻るだろ？が、魂はどこにも行けず、この世を永遠に彷徨うことになるだろ？

それに、この世に屍体のない場所などありはせんよ。今のところ人間が蘇つておらぬだけ、マシというものだ」

「やつにえば、どうしてなんですか？」

山中といえど、長い歴史においては、人の屍体もあつて不思議ではない。キツネやタヌキなどの、妖怪化しやすい動物のゾンビがいなかつた理由も不明なままだ。

「人もそつだが、キツネやタヌキなどの化けやすい連中は自我が強い。

それゆえ、意識が黄泉から呼び覚まされるのが遅いだけだ。クマのよつに殺される事も少ないから、恨みを呑んで死ぬ事も少ない。

……あの娘が蘇つて、まだ半日。

反魂香が香り続ければ、次第に広い範囲で、古く、化け物じみた屍体も蘇るう

「じゃあ……どうすれば……」

「月ノ輪流の技で斬つてやるしかないのだ。
見よ。

「まだ反魂香は香つてあるのに、獣の屍体は蘇らぬ。哀れな魂は、やつと今、輪廻の大流に還つたのだ……」

太郎坊の言う通り、死臭に似た甘い臭いは漂い続けている。しかし、累々と転がる白骨は一度と動き出す様子はなかった。それにしても、夢中で気づかなかつたが、獣の骨は百体近くもあるだろう。

半日でこれである。

反魂香を止めなくては、どうなることか。

「座間よ。

つらいであるから、無理に、とは言わぬ。だが……これを頼みたくて、お前を待つっていたのだ。できれば、お前が斬つてやつてくれぬか？」

「…………太郎坊様。

それは、私の修行のためなのですか？」

「それもある。

お前は心が優しすぎるゆえ、な。しかし…………それだけではない

「わかりました」

これ以上は聞くまい。と、座間は心に決めた。

疑問はある。

何故、太郎坊は自分自身で始末をつけようとしているのか？ ヒメコと太郎坊は、どういう関係なのか？ ヒメコを蘇らせた修験者と太郎坊は、どういう関係なのか？

しかし、成りたての鳥天狗であつた自分を導き、術や技を、惜しみなく授けてくれた太郎坊を信じられないのであれば、もう一度と太郎坊を師匠とは呼べないと思ったのだ。

「クラマさん。誰かと話しているの？」

「…………ヒメコ」

庵の中から、ヒメコがそつと顔を出した。

「…………大丈夫やつた？」

「あ…………ああ、もう安心や。これ…………見いや、動物ゾンビビドもは、全部成仏しよつた」

「す「い」ーーーー！ クラマさんつて、強いんやねえ」

ヒメコの屈託のない笑顔が、座間には痛かった。
本当の事を言わずに、斬らねばならないとすれば……騙し討ちにするか、悪人として怖がらせた挙げ句、斬るしかない。

（もう、充分怖かつたに違いないわ…………これ以上、怖がらせてどうするんや）

座間は、ヒメコを騙し討ちにする覚悟を決めた。

太郎坊は、石に座つたまま向こうを向いている。しかし、ヒメコには、その姿は見えていないようだ。

あらためて、ヒメコを見る。

さつきまでは見えなかつた、ヒメコの本質が見える。

動物ゾンビ達と、まったく同じ黒い影が、ヒメコの存在そのものに重なり、まとわりついて見えた。

「ヒメコ、中に入ろ。」

疲れたやうから、少し休むと言え。師匠もそのうち帰つて来るやうに……。そうや、飯でも食お。」

大天狗といえども、依り代は人間であるから、太郎坊の庵は小さいが、生活感がある。

食料もある程度は貯蔵してあるはずだつた。

「うん」

裏の土間に転がしてあつた、芋や大根、玄米を使って、座間は雑炊を作つた。

「クラマさんつて何でも出来るんだねえ」

ヒメコは感心したよに言つ。

「修業時代に、師匠に何でもやらされたからなあ」

二人は囲炉裏に火をくべ、温かい夕食を食べた。

「あたしねえ、来年の春から、高校の先生になるんだよ」

「く……くー、そなんや。ヒメコが先生やなんて、なんか、ビックリやな」

「へんかな？」

「いや、きっと、こい先生になると思つで」

「ホンマっ？」

「ああ、ヒメ口は優しいからな。生徒達に好かれると思つわ
「そうだといいな……
ね。

クラマセとつて、好きな人いるの？」

「ん……おるよ」

座間の脳裏に、あおいの笑顔が蘇つた。

「なんだ、そりが。なんだか、運命の人に会えたような気がしたのに。

少し残念。」

「運命の人は、きっと他にあるやう。未来で、必ずヒメ口を待つてくれるとははずや」

「そりかなあ……そりやとええな……ね……今、何時？」

「ん……まだ、7時くらいや」

「そつかあ。

でも、なんや疲れたせいか、眠くなつてきてしまつたわ。寝てい
い？」

「ああ。布団、敷いてやるわ」

座間は、押し入れから布団を一組出し、囲炉裏を挟んで、敷いた。それを見て、ヒメ「はくすくすと笑った。

「隣り合わせでも、ええのに」

「あほ。

嫁入り前の娘さんと、おかしなことになつたらどうないすんねん」

「うん。

クラマさんの恋人に悪いもんね……」

「いや、そういう意味やない……」

言いかけて、座間は田を丸くした。
さつさと布団に潜り込んだヒメ「は、もひ田を閉じ、寝息を立て
始めていたからだ。

座間は横になつたヒメ「を、もう一度、田を凝らして見てみた。

太郎坊の言つた事が、間違いであつてくれれば……いや、そもそもそれが大嘘で、座間の眼力を試す罠であつてくれてもいい。
そう何度も思つた。

だが、ヒメ「の存在と重なる黒いもやは、歴然と存在していた。
それを切り離す太刀筋も、ハツキリと見える。

座間は剣を取り、柄に手を掛けた。

息を整え、覚悟を決める。

剣を抜こう、とした時。

手が、ガクガクとふるえた。
いや、ふるえというレベルではない。
どうしようもなく、勝手に手が動き、まるで自由がきかない。
自分の胸に、膝に、熱い滴りを感じて、初めて自分が泣いている
事に気づいた。

剣が、抜けない。
前が、見えない。

覚悟は決めたはずだった。

それが、ヒメコのためになるはずなのだ。

これほどとは、思わなかつた。

罪のない者を、斬る。ということ。
自分に信頼を寄せていてくれる者を、裏切る。ということ。

(ダメや……斬れへん……)

その時。

ふ、と、ヒメコが目を開けた。

そして、座間を見て、ふわりと笑つた。

凶器に手を掛け、ふるえている座間を見て。

笑つたのだ。

座間は理解した。

ヒメコは、気づきかけている。

記憶が戻りかけているのか？

座間の様子を察したのか？

その時、座間は思い出した。庵の中で青い顔をしていたヒメコ…

…ヒメコは毛皮と角から、牡鹿が蘇るのを見たに違いない。

太郎坊の言葉が座間の脳裏によみがえる。

『今の状況をあの娘が理解した瞬間、術は解ける。そうなれば娘は白骨に戻るだらうが、魂はどこにも行けず、この世を永遠に彷徨うことになるだらう』

ヒメコの存在を覆う黒いもやが、勝手にヒメコの肉体から離れ始めた。

あれが離れきつてしまえば、ヒメコは屍体に戻り、その魂は永遠に救われない。

(ダメや…………ヒメコ…………)

「のまま放置すれば、ヒメコの魂は永遠に救われない。

「…」

自然に、体が動いた。

降魔の剣が一閃し……ヒメコは再び目を閉じた。
そしてもう一度と、目を開ける事はなかつた。

「うあああああ…！」

慟哭が、小さな庵に響き、太郎坊は外の石に腰かけたまま、澄み切った星空を見上げて滂沱の涙を流し続けていた。

§1-5 小玉鼠

§1-5 小玉鼠

いつの間にか月が中天に上り、長く^{こだま}寝していいた慟哭の声が途絶えた。そして、壊れた引き戸^戸がきしみ、庵の中から憔悴した様子の座間が歩み出てきた。

「……師匠」

太郎坊は石に座したままである。

「すまなかつたな……」

「ヒメ^{ヒメ}を殺した暴漢どもは……ど^どうおるんですか？」

やりきれない悲しみの中、せめて憎しみをぶつける相手を探すよう^に、座間は問いかけた。太郎坊はやつと振り向き、悲しげに笑つた。

「とつぐに私が始末した」

その言葉を聞いて、座間は死ぬほど驚いた。

太郎坊は、妖怪化したばかりの座間とは違つ。

強力な神靈たる大天狗である。土地神にも等しい力を持ち、うかつに動けば、天と地を巡る氣の流れを、大きく損ないかねない。ゆえに、どのようなことがあろうと、決して世に出ず、世に働きかけず、地を守る事のみに生きる。

特に人の生き死には、絶対に関^{かか}わらない。

太郎坊自身から、そう教わったはずだ。

「どうして……」

「ヒメ」「……大月姫子はな、私の孫娘だ」

「……」

座間は驚き息を呑みながらも、心のどこかで、『やはり』と思つていた。

「反魂の術を使つた姫子の父は、娘婿……つまり義理の息子だ。姫子の母である私の娘は、早くに病で死んだゆえ、姫子自身は、私の事を知らなかつたのだ」

「お子がおられたとは、知りまへんでした」

「お前も知るようだ、私も大天狗となつてから千年を生きておる。今の依り代の人格となつてからは、三百年ほどだがな……妻と出会つたのは、四十年ほど前のことだ。千年生きてきて……ただ一度の恋であつた」

今は小さな老人の姿だが、もともと力ある神靈である。姿を変えることなど造作もない。太郎坊は人間の男性として、山中で遭難していた一人の女性を助けた。そしてその女性と恋に落ち、大天狗である事を隠して、共に二十年暮らしたのだという。

「そのうちにこの体……依り代のもので良いから子が欲しい、とそう思つてしまつたのだ。

そして娘が生まれ、出産の際に妻を失つた。

さらにその娘を病で亡くし、今まで、義理の息子と孫をも死なせてしまった。」

再び、太郎坊の頬を涙が濡らした。

「私はな、もう、生きるのに倦んだ」

「師匠……」

「人の生死に、神靈が関わってはならぬ理由が分かつた気がするよ。

人の人生は、あまりに理不尽で、辛い事が多すぎるのだ。そんな人生でも、終わりがあるから生きていく。

永遠を生きる神靈には……耐えられぬ

「太郎坊……様？」

座間は、目を凝らした。

太郎坊の影が、すうっと薄くなつたように感じたのだ。

「義理の息子の暴走を止められず、姫子に、一度も死の苦しみを与えてしまつたのは、私の落ち度だ。それに、私の殺した若者達も無法な暴漢どもとはいえ、親も兄弟もあつたろう。その罪も償わねば、な」

「どういづ……事です？」

「私は、狭間の世界に行く

「……狭間？」

「陰界と現界の狭間は、生と死の狭間である。せいでひつ一度、姫子の靈魂に会いたい。会つて、話したい、と思つ」

それで、最初から太郎坊は位相をずらしていたのだ。

そのせいで、自分自身でヒメコを斬ることが出来なかつたのだろう。いや、そうでなくとも斬ることは出来なかつたのかも知れないが。

「帰つて……来はるんですね？」

「分からぬ。

行つた事がないので……な。

分からぬが……帰つて来たのでは、償いにはなるまじよ

話しながら……太郎坊の影は、更に薄くなつていく

「座間よ……

まだまだお前は天狗としては未熟だが、見込みがある。私がおらぬでも、月ノ輪流を極められるだらう

「し……師匠……」

「よいか。何も恐れるな。

月ノ輪流を継ぐ者として、たとえ相手が何者であろうと、決して後れを取るなよ」

「師匠……」

一度は乾いたはずの涙が、また座間の両目に溢れた。

「悲しむな。

胸を張れ。

お前は為すべきことを為しただけだ。

そして姫子を救い、私も救つてくれた。私の誇るべき弟子だ」

太郎坊は握手を求めるより、すっと右手を差し出した。

座間は、太郎坊の手を握ろうと手を伸ばしたが、すでに実体を失っているのか、空をつかんだだけであった。

「次郎坊に……ようじへ言つておいてくれ」

最後に、にこり、と笑つと太郎坊の姿は消えた。

座間は、しばらく空を握つたまま座り込んでいた。
まさか、太郎坊とまで別れることになるとは、思つてもいなかつた。

心も、そして体も疲れ切つていた。

忘れていた火傷の跡が、じくじくと痛み始めている。だが、悲しみ続けるつもりも、休むつもりもなかつた。たつた今、師匠とヒメ「のおかげでつかんだ技を持つて、すぐにでも帰らねばならない。

あおいが待つてゐる。

いや、あおいに……会いたい。
今、すぐに。

座間は無言で変化した。

すつと立ち上がり月を見上げた。

漆黒の翼が、月光に映える。猛禽の瞳が、虚空を見据える。

鋭い爪のある両手で、葉団扇と剣を持ち、目を閉じた。

自分で、気が満ちていいくのが分かる。もう、火傷も疲労も気にはならない。

師匠の事。

ヒメ口の事。

あおいの事。

葉子や七海、いぶきや真菰達の事。

ダーキーの事。

心に流れ来る様々な事象を、そのまま受け止め、憎しみや、怒りや、喜びを、すべて気を高めるきっかけにしていく。師匠から習つた瞑想法だ。

充分に気が満ちたことを確認すると、座間は瞳を開いた。

そして、夜空に向かつて一気に飛び立つた。

＊＊＊
＊＊＊
＊＊＊
＊＊＊
＊＊＊

「小玉鼠さん。いる?」

あおいは、池の畔のアシの茂みに向かつて声を掛けた。

いぶきと共に、先日ケルピーと戦つたビオトープ池を訪れたのだ。まだ日暮れには時間があるが、すでに日は傾いている。

「オヒサシブリデス」

その返事は意外な事に、あおい達の頭の上から聞こえた。見上げると、池の畔に立つ大きなハンノキの枝に十数匹の小さなカヤネズミ達が、並んでこちらを見ている。

「あら？ あなたたち木にも登るの？」

カヤネズミは本来、草地を住みかとするネズミだ。木に登るという話は、あまり聞いた事がない。

「イチオウ、妖怪デスカラ」

たしかにそうである。

見た目があまりにも普通のカヤネズミであるので、忘れてしまつていて、妖怪小玉鼠は一定以上の妖力を持ち、人語を解するだけでなく、素早く木々を渡つて移動し、悪い気を見つけては吸収して浄化する性質があった。

「ナニカ……ガヨウデスカ？」

十数匹並んだ小玉鼠の中でも、一際目立つ大きな個体が声を発した。

以前見た、小玉鼠の頭領と思われる。

だがほんの2ヶ月しか経たないのに、あの時と比べると随分大きい。また、背中から頭にかけての体毛がとりわけ白っぽくなっているのは、老成してきたしるしなのだろう。

「あの……最近、この町で変わった事……ないかな？」

「カワツタコト……デスカ？」

小玉鼠はくじつとした目をこぢらに向け、首を傾げる仕草をした。

「うん。変わった事なら何でもいいんだけど……そうね……」

「妙に強力な妖怪を見た……とか、ヘンに気が集まっている場所がある……とか」

言いよどんで考え込んだあおいに代わって、いぶきが小玉鼠たちに問いかける。しかし、彼等は顔を見合せるようにすると、申し訳なさそうに答えた。

「イエ、ココシバラクデ、カワツタコトハアリマセン」

「本当に、全然、変わった事はない？」

「ボクタチノ眷属ハ、マチジュウニイマス。
ドブネズミヤ、クマネズミモ仲間デスカラ、カワツタコトガアレバ、ワカルハズデス」

「ええっ！？ ドブネズミも、妖怪化しちゃってるの？」

ドブネズミの個体数は、カヤネズミの比ではない。
妖怪化したドブネズミがその気になれば、動物パニック映画もさながらの、人間への反乱も可能だらつ。そんなことになつたら、取り返しがつかないような気がした。

「イエ、カレラハ妖怪デハアリマセン。

ボクタチノ血族シカ、コダマネズミハ、イマセン。シカシ、ドブ
ネズミハ、下水や倉庫、クマネズミハ、ビルノ内部、ハツカネズミ
ハ、人家や農地ノ情報ヲ、クレマス」

「なるほど……それで、町中で分からぬ事はないってわけね」

だが、それはつまり、捜索が行き詰まつた事を示していた。
あおいは、深いため息をついた。

＊＊＊

＊＊＊

＊＊＊

＊＊＊

＊＊＊

「そんなんに、落ち込まないで下せこよ」

いぶきは、あおいを慰めるように言った。

ため池ビオトープからの帰路。ビッグホーンの車内である。

あおいは、小玉鼠たちから有効な情報が得られなかつたことで、
ふさぎ込んでいた。

「ネズミたちだつて、完璧に情報を集めているとは限らないじゃな
いですか」

「でも、小玉鼠の頭領……相当自信持つていたわよ？ もしかす
るとダーキーは、もつ、この町にはいないのかも……」

そうであれば、葉子や七海の居所は、どうやって探したらいいの
だろ？ もし、真菰専務の血族や配下の水妖達にも心当たりが
なれば、完全に行き詰まつたことになる。

「おこ、あおこよ

その時、突然、ラジオのスイッチが入り、ケルピーの声が流れ出した。

「困つておるよひじやな。だが、どつも端で聞いておつても、おかしな事があるぞ?」

「え? ケルピー、あなた、何か分かるの?」

「何か分かるの、とは「」挨拶じやな。ワシもあつりでは、いたわかな名のある妖怪なのがな?」

「「」、「」めんなさい。私……」

「べつに謝りんでも良い。

あおい。自分の乗馬になれ、と書いたのはお前じやる? ワシは、とつぐに前達の仲間のつもりなんじやがの」

そういうえば、座間達を助けに走つてくれたのはケルピーだった。あの時、七海達を連れてきてくれなかつたら、そして、火事の中に突つ込んでくれなかつたら、座間達は間違いなく死んでいただろう。

「……」「めんなさい」

「謝りんでも良い、と書ひて。

まあ、よいわ。

まあおかしいのは、遠く離れた山神殿が気づいた、氣の流れの異常を小玉魔びもは気づいていなかつたという事じや

「言われてみれば……へンね」

「それと……小玉鼠どもは、貴田小学校の火事の事は知つておつたのか？」

「いえ……聞かなかつた。

あれだけの大きな火事ですもの。知つていたかも知れないけど……何も言わなかつたわ」

「つまり、あれほど異常な火事でも、ネズミどもには、普通の火事と見なされていたという事じや。

それは、普通の火事と見分けが付かなかつたからではないのか？
何故なら、火氣の集中していたのは屋上のみだつたからじやろう。
町全体の氣の異常というのも、もしかすると屋上にしかなかつたのかも知れん。

つまり……」

「分かつた！！

建物の中も、野山も、農地も……すべてを行動圏にしているように見えて、ネズミたちの行動範囲外の部分があつたのね。
そこでは、いくら異常が起きていても、ネズミたちには分からないんだわ！！」

「それが、屋上……つて事ですか」

＊＊＊

＊＊＊

＊＊＊

＊＊＊

＊＊＊

「屋上がキー・ポイントですか…………」氣づきませんでした。

私の配下の妖たちからも何の情報もなく、何か手の打ちようがないかと思案していたところでした」

真菰専務が、感心したように言つ。

トープスの社内である。あおい達は、箕島教授の到着を待ちながら、情報を交換していた。

「市内の5階建て以上のビルの配置を、赤で塗つてみました」

パソコンのモニター上で、いぶきが説明を始めた。

「田舎町といえど、たすがに多い。これでは、よく分かりませんね」
「で、屋上緑化や屋上庭園など、屋上を有効利用している建物が口
レです」

今度は、地図の上に緑の色が重なつた。今度は雪国だけあって、かなり少ない。

しかし、それでも7～8棟の建物が緑に塗られていて、絞り込めてもないし、何か法則も見いだせない。

「で……ここからビオトープ管理士会メンバーによる施工実績のビ
ルを……消してみたのよ」

「これは……！」

「残つたのは、3つのビル。
等間隔で、南北一直線になつてゐるわ。しかも、その一つは貴田
小学校なのよ。これは偶然ではないと思つ」

「いつたい、どうこいつです？」

真菰専務の疑問ももつともである。ビオトープ管理士の携わった仕事を消した意味が分からない。

「小玉鼠が情報を収集しきれなかつたのは、単純に、ネズミが屋上へ行けなかつたからよね？ つまり、屋上がほぼ生態的に隔離されている場所つてことになるわ」

「なるほど。

ビオトープ管理士であれば、何を置いても、まずは、生態的回廊をつなぐ事を考えますね」

生態的回廊、ビオトープとも言つ。

生き物が行き来するための、道の事である。人工のコンクリート構造物や、大型道路、三面護岸の川などは、生物がそれを利用して移動することも、横切ることも困難である。

だから、空き地や路傍の緑地を残し、そこを伝つて生物が行き来できるように配慮する。

それも難しい時には、植え込みやトンネル、場合によつては動物専用の橋まで架けて、生き物の行き来が出来るように設計するのだ。

「でも……いくら管理士だからって、5階建て以上の屋上なんかに、どうやって「リゾーをつなげられるんです？」

「以前、事例研究会で紹介していたわ。

建物のすぐ脇に生えた高木を生かし、地際からツル植物を這わせて、さらに枝を、緑化したベランダまでつなげる。その先は、またツル植物で屋上まで「リゾーを作るのよ」

「……よくまあ、そんな事を考えつきますね」

真菰専務は呆れた表情で呟つ。

「私が考えついた訳じゃないし、管理士のみんなが同じ方法をとるわけでもないわ。

でも、みんな流石ね。

どんなに無理そうでも、やるべき事はやつてることね」

「でも……」のダーキーと関係があると思われる場所は、ビルにて「リードーをつなげていないんでしょう？」

「生き物が行き来していると、

せつかく溜めた気をその生物が使って変質しまうかも知れないわ。それに、それで殖えた生物が出て行けば、気のものも流出してしまつ……

何より外部との生物の連絡が無ければ、気の異常も見つかりにくいでしょう？

だから、わざと「リードーをつなげなかつたと考えられるわね」

「一番南が貴田小学校、北が西北新聞本社ビル、真ん中は八杜商事本社ビルですね」

「八杜商事は、一番大きなビルよ。この三つのビルが関係しているとすれば……確証はないけど……探すなりこからね」

あおいは、早速立ち上がりつた。

「社長。待つて下さい。どこに行かれるのです？」

「八杜商事ビルよ。決まつてゐるじゃない。」

「最初にお約束したはずです。一人で先走らない事。自分の身を第一に考える事」

「でも、稻成さんや七海ちゃんを助けなきゃ。行方不明になつてから、もう、丸一月経とうとしているのよ？」

「あなたに万一一の事があつては、何にもなりませんーー」

真菰専務は、あおいの行く手をふさぐように立ち上がつた。
しかし、あおいも引き下がるとはしない。この一人が険悪な状態になるのは珍しい。

いふきは、仲裁することもできず、ソファから立ち上がるタイミングを逃して、おろおろと二人の顔を見比べているだけだ。

「おいーー お前たちーー ラジオかテレビをつけろーーー」

その時、階下からケルピーの声が響いた。

あまり性能の良くないカラーラジオからの声なので、まるで拡声器のように割れた声であつたが、間違いなくそう聞こえた。

§1-6 西北新聞社

「何よこれ…………」

事務所に設置してある小型ＴＶの電源を入れたあおいは、自分自身の目を疑つた。

いぶきも、真菰専務も、信じられないものを見る田で画面を見つめている。

そこには……西北新聞本社ビルの周囲が、浸水していく様子が映し出されていた。

『えーーーひらり、西北新聞社前から中継です。

先ほど、急に葛柳川の水位が上昇し、堤防が決壊いたしました。局地的豪雨などは観測されておらず、上流のダム湖の水位の異常減少が見られる事から、放水システムの故障という見方が強まっています』

局地的な現象であるせいか、アナウンサーは落ち着いてしゃべっている。

「西北新聞！？ 一れつて、どうこうことなのかしら？」

「おそらく…………南の貴田小学校が火氣であることから考へると、北にあたる西北新聞社は、水氣を溜めていたのでしょうか。それに氣を高め……中央に木氣と土氣を集めていく…………本来それが

目的だったのかも知れません」

「画面を食い入るように見ていたあおいは、思いがけないものを見つけて声を上げた。

「ちよつと待つて！　今の……七海けやんじやない？！」

水位が次第に上昇し、次々に避難していく社員達に混じつて……人の流れに逆らい、建物に入つていったのは、たしかに七海のよう見えた。

「でも……なんだか、様子がおかしかった。ふらふらしているよう見えたし、何より、一人だけどうして建物に？」

いぶきも、七海の姿に気づいたようだ。

「専務……まだ、私を止める？」

真菰は、ふう、と大きなため息をついてあおいを見た。

「どうしても行かれるなら、私も行きましょう。

不幸中の幸い、というか、あれだけ水が氾濫していれば、私の動きも目立たないでしようから」

「我が儘言つて、『じめんなさい』」

「いえ。社長が従業員の身を心配するのは当然です。では……この姿では意味がないので……先に、現場へ向かいます」

そう言つと、真菰専務の背後に、黒い渦が現れた。

「あーっ！　するい、専務だけ抜け駆け！！」

「抜け駆けではありません。こうしないと、本体で戦えないでしょ
う……」

声がフェードアウトしていく、

黒い渦に呑まれるように、真菰専務の姿が消えた。あおいは、く
やしそうに頬をふくらませると、事務所を飛び出した。いぶきがそ
れに続く。駐車場へ行くまでもなく、玄関先にはエンジンを掛けた
ビッグホーン……ケルピーが待っていた。

「遅いぞ。早く乗れ」

あおい達が乗り込むのとほぼ同時に、ビッグホーンはタイヤを滑
らせる音を鳴らしながら発進した。

＊＊＊

＊＊＊

＊＊＊

＊＊＊

＊＊＊

「うわ、ちょ……待つて……！」

国道高架の斜路ランプを降りようとすると、警察が通行止めにしている。
それを見たあおいが考える間もなく、ケルピーは勝手に動き出したのだ。あおいはブレーキを踏んだが、全く効く様子がない。

ケルピーは、普通の車ではあり得ないアクロバットで、中央分離
帯の植え込みを飛び越え、反対車線の斜路、つまり登り口の方へ進

路を向けた。

そちらから登つてくる車は無いため、警察も人員を割いていない。赤い円錐形のセーフティコーンをはね飛ばし、一気に斜路を降りる。しかし、斜路の途中から完全に水没している。水深は1m以上あるだろう。

「わしは水妖だぞ。信じろ」

見る見る迫る水面に、悲鳴を上げるあおい達に向かつて、自信に満ちた声で言つと、ケルピーは水中に飛び込んだ。

そしてタイヤを半分ほど出した状態で水面に浮かび、そのまま、前に進み始める。車内には全く浸水しないばかりか、呆れた事に、舗装道路を走るより、速い。

「あ……あなた、本当に水陸両用車になっちゃつたのね……」

「そうなれ、と言つたのはお前だろ?」

ケルピーの声はこれまでにないほど得意げだ。その表情が見えないのが残念なくらいである。

「お見それしました」

あおいは、素直に実力を認めた。

見た目完全に普通の乗用車であるせいで、侮っていたのは事実である。

まるで四角い形をしたイルカの背に乗せられたように、あおい達は、あり得ない早さで西北新聞本社ビルに到着した。

西北新聞の周囲は、既に2mほどの深さまで冠水しているようだ。

乗用車の屋根は完全に水没しており、一階の窓近くまで水位は上昇している。特に窪地、というわけでもないにも関わらず、この周囲にだけ水が集まっているのは、明らかに異常だ。

だが、ここに来てマスコミや警察、消防のボートやヘリが田立ち始めた。

水上を疾駆してきた乗用車に驚き、警察が拡声器で叫びながら、こちらに向かってきているし、中には、こちらにカメラを向けている記者らしき者もいる。

「これじゃあ……建物に入れないわね

あおいが呟いたとき。

「ご心配なく」

水中から、聞き慣れた真菰の声がした。そして、突然建物を中心には、水が渦を巻き始めた。普通のエンジン駆動である警察や消防のボートは、なすすべもなく流されていく。しかも、空からは大粒の雨が降り始め、雷鳴が轟いて、ヘリも撤退を余儀なくされた。

「今だ。窓から出て、飛び移れ」

ケルピーの指示は容赦がない。

あおい達は、一階の窓の下にある、狭いキャットウォークに足をかけ、窓を蹴破つて侵入した。

部屋の中には人の気配はない。

しかし、廊下をバタバタと走る足音と、得から人の声は聞こえ

てくる。新聞社ともなれば、この状況をスクープにするため、記者チームなどは残っているのだろう。

だが、この混乱の中、だだっ広いビル内で見とがめられる心配は無さそうだった。

「Hレベーターは使えそうにないわ。非常階段を探しましょ！」

非常階段はすぐに見つかった。

鉄の防火扉が閉まっているが、問題はない。あおい達は、非常階段を一気に駆け上った。この建物は9階建てであるが、いぶきはもちろん、あおいも息一つ切らしていない。

「屋上庭園…………！」

鉄の扉を引き開けると、足元に水が流れ出してきた。

「何か…………います……！」

警戒したいぶきが、山姫の本性を現して変化した。

後ろでまとめてあつた髪をほどき、一度、一度と頭を振ると、髪の色が赤っぽく染まり、目の色も薔薇色に変化した。着ていた作業服が、派手な色彩の和装に変わり、体も一回りほど大きくなる。

あおいはあおいで、懐から呪符をいくつか取りだし、簡易結界で体の周囲を守る用意を始めた。

あおいの髪が、ふわりとふくらみ、体の周囲に銀色の膜が出来たように見えた。

真菰の降らせている雨は、未だやむ様子はない。

屋上庭園は、土砂降りの雨が流れる先を失ったかのように、水深

20センチほどに漫水していた。下は漫水、前は雨。いつなれど、周囲が水だらけで何も分からぬ。

しかし、屋上を覆い尽くす浅い水の中に、確かに何かがいる。水中をあり得ない速度で、太く長い生き物らしきものが、ぐねぐねと蠢いている。

「これだけ水があれば……負けないよっ！――！」

水生木。

つまり、水気は木氣を強化する。いぶきは、懷から取りだした細い木の枝を、水につけた。

小さな枝は瞬時に、大きく育ち、木製の大槌に姿を変えた。柄や先端には、緑の葉が茂っている。いぶきは、それをグルグル振り回して目の前の水面に叩きつけた。大槌は、木製とは思えない固い金属音を立てて、屋上の床面に激しい衝撃を与えた。

水中を振動が伝わり、潜んでいたモノがたまらず水面に飛び出す。

それは、全長10mに及ぼうかといつ、蛇であった。

だが、その蛇の頭部に当たる場所には、人間の女性の上半身が付いている。

その顔は……

「な……七海ちゃん！」

「七海ちゃん！？」

ふたりは異口同音に叫んだ。それはたしかに、磯女の本性を現した、伊園七海であった。

§17 磯女・七海

磯女である七海は、人を愛したこと、愛された事もなかった。

いや、正確には少し違う。

人に愛されなかつたり、裏切られたりして、海で死した女の念が、ウミヘビの一種を依り代として妖怪化したモノ。それが、磯女であつたから、前世、というと変だが、彼女が『七海』という名の磯女として生ずる前には、愛し、愛される、感情に満ちた存在であつたはずであった。

だが、自分が生ずる前の記憶など、七海にはない。

「また……今日が終わる……」

自殺の名所として名高いこの灯籠望岬に、磯女として存在するようになつてから、かれこれ、三百年が経と/orしていた。

磯女は自殺者の怨念を集め、深夜一人で磯に来る不用心な男の血を吸う。それが磯女の存在理由である。

七海はなんの疑問も持たず、そりやつて三百年生きてきたのだ。

いや、本当は生きてきた。というのとは違うのかも知れない。

最近、七海はそう思つようになつていた。

磯の生物たち……魚も、カニも、エビも、サザエも、ヤドカリも

……みな、ふらふらと何の目的もなく泳いでいるように見えて、どれもが必ず、恋をして子孫を残し、次の世代へ変わっていく。中には、卵や連れ合いを守るために、敵と戦って犠牲になり、死んでいくものもいた。

生きる。

ということは、じつじつ事なのではないか。

（私は、本当の命を持つていない。この小さな魚や、ヤドカリたちの方が、私なんかより、ずっと『生きて』いる）

七海は、そう思い始めていた。

（私は、恋をした事がない。

憎しみに満ちた、女達の情念は感じても、どうしてそこまで男を憎むのかさえ、理解できない）

そんな七海が、ある時夢を見た。

男の夢である。

その男は、七海が悲しみに暮れ、困っていたとき、誰かに解決法を尋ねて助けてくれた。

正直、出会ったときは軽薄そうで、邪魔な人だと思つていたが、見た目で判断したことを、少し反省した。

七海は感謝の気持ちが、ほんのりした恋心に変わったのを感じていた。

とても、幸せな夢だった。

「あ……あれ？」

そこまで見て目覚めたとき、七海は自分が海の底にいるのを思い出して、心底驚いた。

そして、これまでにない感情を抱いていた。冷たい海底の横穴にいながら、胸が熱くなるのを感じたのだ。しかし、それと同時に、自分の境遇を呪わずにいられなかつた。

（私は醜い化け物なのに、どうして、あんな夢を見てしまったんだろう。

私は一人なんだ。

これからも……ずっと……）

寂しさと悲しさで、胸が張り裂けそうだったが、水中だから声は出ない。

涙も流れない。

だが七海は、自分のまわりの海水すべてが、七海自身の涙であるかのように感じていた。

次に眠つた時、七海はまた夢を見た。

その夢の中で、七海は戦つていた。

あの男と共に。

相手は見た事のない化け物である。男とその仲間たちを守るために、七海は技と知識を駆使して戦つた。しかし、仲間の中に数人いた女性を気遣う男に対し、七海は秘かな嫉妬心を抱いていた。

その嫉妬心が、大きな失敗につながつた。

一人の女性が化け物にさらわれた時、男が飛び出したのを止められなかつたのだ。本当なら自分が助けに行かねばならないのに、躊躇した。

そのせいで、男は化け物達に攻撃を受け、倒れてしまった。男は

大丈夫なのか。

心配で泣きそうになりながら走った。自分の危険も顧みず……。

そこまでで、また七海は目覚めた。

この前以上に、胸がドキドキしている。夢の男への恋心は、疑いようがなかつた。

あの、一見優男のように見えながら、いざとなると行動力のある男。

身長は高く、他の人と比べて頭一つ大きかつた。彫りの深い整つた顔立ちは、少し日本人離れしていた。言葉もこのへんのものとは、少し違つていたように思つたが……。

その男の顔を思い浮かべるだけで、七海はフワフワした気持ちになるのを止められなかつた。

その夢を繰り返し見始めてから、5年近くが経つた。

「どうしよう……」

七海は自分が、良くない状態である事を理解していた。
最初は、眠るのが楽しみになつた。

夢で男に会えることを願つて、早々に眠りにつく。
最近は、男が人間である自分の職場にやつてきて、一緒に冗談を交わしながら、働くような夢まで見始めていた。

しかし、ここしばらくで夢を見る頻度が急に増え、七海は、磯女としての役割を果たせていない自分に気づいていた。

妖怪として、なんの疑いもなく存在していればよかつたのだ。
確かに、磯女は哀しい、しかも邪悪な妖怪だ。だが、哀しいには哀しいなりに、邪悪は邪悪なりに存在意義がある。

魚が陸を歩けないようだ。

チョウが花の蜜以外を食べられないようだ。

それぞれの存在には、この世での役割がある。

磯女が、磯女としての役割を放棄すれば、消滅するしかない。すべての男に対する、謂われのない憎しみと、世を呪う思いこそが、磯女の存在意義であつたはずだ。

だが、七海の心に根付いてしまつた恋の炎は、もつ消えそうになかつた。

(会つたこともない男に……恋？

でも……私はもう、磯女であり続けることに疲れた。相手に会つたこともない……こんなおかしな恋でも、抱いたまま消える事が出来るなら……それもいいかも知れないわ)

その時。

磯女としての、七海の感覚に何かが引っかかった。

(防波堤に、男が一人で来ている)

そこは、最近出来た防波堤である。

何度か、釣り人の血を吸つた場所だ。だが、あの夢を見てから、人間を殺す事が出来なくなり、適当に血を吸つて逃がしてしまつて

いた。

そうすると人間どもの間で噂になり、獲物が来にくくなる。そのせいでもう、数ヶ月、磯女としての仕事をしていなかつたのだが……

（間抜けな人間もいたものね。でも……けつどいい。今日で最後にしようかな……）

七海は、磯女であることをやめ、明日消滅することに決めた。

最期に、防波堤に来ている男に説教でもしてやろう。

これまでも、一人で釣りに来る男に、口クな奴はいなかつた。趣味にかまけ、奥さんを泣かせ、子供も親もないがしろにし、さりとて仕事も中途半端。

血を吸いながら、人間の記憶をのぞくことが出来る七海は、何度も呆れたものだつた。

「あの……すみません」

人間の女に化けた七海は、防波堤で釣り糸を垂れている男の後ろに近寄つて、声を掛けた。

案の定、男はびくつとして振り返つた。

「お魚、釣れましたか？」

七海は、にっこり微笑んで話しかけた。

大抵の男は、深夜、暗闇から突如現れた若い女に、恐怖の色を浮かべる。そうしたら、難癖をつけて魚や釣り具を取り上げる。逃げ出すようなら追いかけて、蛇身の正体を現して締め上げ、血を吸い尽くすのが七海のパターンだつた。

しかし、その男は違っていた。

少しも恐れる気配もなく、言葉を返してきたのだ。

「ああ、やつと来はつた。もつ、朝まで釣つとつたら、クーラーに入り切らんといやつたわ」

まるで、七海を待つていたかのような言い草である。

言葉通り、その男のクーラーからは、大きなクロダイの尻尾が、いくつもはみ出している。男は、すっと立ち上がって振り向いた。

背が高い。

人間に化けた七海の、頭一つ分は確實に。

一見、優男風の表情。

ゆるんだ口元は、常に微笑みをたたえているようだ。しかし、鋭く澄んだ目は、強い意志を宿して見え……

「なあ、磯女はん。悪いんやけど、もつ、人の血イ吸うの、やめてくれへんかな？」

「…………はい」

「え？ ええの？」

「はい。やめます」

七海は、男の顔をじっと見つめたまま言った。

まだ、信じられない。

夢のあの男が…………田の前にいる。これで、本当に明日消えても悔いはない。

「ええええ！？ 何よそれえ？」

突然、背後の闇から声が上がった。

女の声だ。

現れたのは、青い作業服姿の若い女性であった。手には、呪符を持つている。

「まあ、ええやないですか社長。ケンカせずに済むなら、それに越したことはないですよって」

「拍子抜けしたわね」

別の女の声がした。もう一人、闇から現れたのは和装の大柄な女だった。

「変化するんじゃなかつたな」

「もう、結界は要らんみたいですね」

坊主頭の男も現れた。

「入堂部長が、凶悪な妖怪だとか言つから、私達だけじゃ手に余ると思つて来てもらつたんでしょ？」

社長と呼ばれた女が、坊主頭の男に文句を言つ。

男一人だと思っていたが、三人もの人間が闇に隠れていたのだ。どうやらあの坊主頭の男が張つた結界に入つていると、妖怪には見えないらしい。

「でも、磯女さん。

血を吸うのやめるつて……」これからどうするの？ 血を吸うのは、磯女としての存在意義でしょ？ それをやめちゃつたら……」

「消滅……しますね。たぶん。」

「死ぬ…………つて」とよ？

「いいんです。

私が生じて300年。磯女でいつづけることに、疲れました。それ……もう思い残すことはないし……」

七海は言しながら、ちらりと男の顔を見る。

思い残すこと……あるとしたら、この男と一度だけでも……そう思つたが、首を横に振つて忘れようとする。

しょせん、人間と妖怪なのだ。どうなるものでもない。

しかし、海底へ帰ろうとする七見を引き留めたのは、夢の男だった。

「いやいや、待ちいな磯女はん。

そんなん、後味が悪うてしゃない。そや。磯女やめるんなら、ウチに来いへんか？ 社長、たしかに A D 使いが一人、足らんて言うてはつたけど……どひやう？」

「座間君、あんたまたウチに妖怪の社員を増やそうつての？」

あおいは、渋面を作つて言つ。

しかし、口元のほころびが、完全に拒否している訳ではないこと

を教えていた。

「ちやんと、エサをやるのよ？ 散歩も、あんたの仕事」
「犬ちやいますがな。それに、そんな言い方は、磯女はんにも失礼でつせ？」

「そうね。」「めん」「めん。で、磯女さん、あなた名前は？」

七海はあまりの急展開について行けず、口をポカンと開けて一人を見つめている。

「あの…………私、妖怪なんですけど…………それも邪悪な…………」

「知ってるわよ。

ああ、なるほど、」こちらの自己紹介がまだだつたわね。この背の高いのが、座間典俱君。実は鳥天狗なの。

こちらの女性は、森いぶきさん、山姫。

」の人は社員じゃなくて、市の農村整備部長の入堂さんで、見越入道。

心配しなくつても、仕事関係はほとんど妖怪よ。私は、社長の圓野あおい。私だけ人間なの」

「は……はあ

「他にも一人、蛟竜と妖狐の社員がいるけど……また、後で紹介するわ。

で、勤務条件はね……」

「あ……あの、ちょっと、まだ私、働くとは……」

手持ちのリュックから、『ジセ』そと、会社案内の書類を取り出そ
うとし始めたあおいを七海が制した。

「つづりじゃ……イヤっ」

「いえ、そうじゃなくって。私、働いた事なんて無いし、何も出来
ないと思います。

それに、磯女をやめるつて決めた瞬間から、もう私、いつ消えて
もおかしくないはずなんです。いきなりそうなつたら、『迷惑だし
…………

「その辺は心配しないで。

この森さんはね、山神様の血を引いていて、妖怪でも人間でも、
関係性や意味を少しだけ付け替える事が出来るのよ

「意味？関係性？」

「うーん。まあ、平たく言えば『業』ね。

磯女さんの磯女としての業を、その辺の蚊にでもくつつけちゃう
の。そうすれば、血を吸わなくても消滅しないでござれるんじゃな
いかしい。

仕事だつて、仕事の出来る人の業を磯女さんにくつつければOK

「でも、その人は仕事が出来なくなつちゃうんじや…………」

「だから、もう仕事してない人の業をもらひつゆ。死んだ人なら大
丈夫でしょ？」

「戸籍とか、住まいは……入堂部長？お願いしたわよ

「あおいちゃん……こんな妖怪まで社員にするつてのかい？
あきれたもんだな。でも、これで市民の安全が担保できるなら、
仕方ないかなあ……副市長にでも掛け合つてみるよ」

まつたく、呆れるほどの行動力であった。

なんと翌日から七海は、人間、伊園七海としての立場を得、トーピスの社員として働くことになったのだ。

（なんか……夢みたい。でも、夢なら今度は覚めないで）

毎日夢に見たあの男、座間と机を並べ、和やかに会話しながら、人間として生きていけるのだ。

最近亡くなつた、若い女性の関係性をくつづけもらつたおかげで、家族まで出来てしまつた。邪悪な妖怪としてこの世に生じた自分が、ほんの数日前まで、海底の横穴で一人孤独に過ごしていた自分が、である。

これ以上の幸せは、望んではいけない。

この状態が、いつまでも続けばいい。

七海はそう思つていた。

あの日、座間の見舞い帰りに、暗闇から誘いかける不気味な声を聞くまでは。

「七海ちゃん……私よ……田を覚まして……」

いぶきが必死の声で叫ぶ。

しかし、七海は全く言葉が通じない様子である。今まで聞いたことのない、低い唸り声をあげながら、あおい達に迫ってくる。

燃えるように真っ赤に光る田はは、何も映つていなことうつだ。

「七海ちゃん、どうして？ こいつ、どうなったのよ……」

あおいは水浸しになつた屋上で、なんとか、四方に水氣を抑える結界を張りうとしているが、足元を浸す水と風雨、そして長く伸びた七海の蛇身に阻まれて、なかなか呪符を張り切れない。

「社長……逃げて下さい…… 七海ちゃん、なんだか社長ばかり追いかけます……」

いぶきの言つ通り、水に足を取られて、動きの鈍くなつたあおいの行く手をふさぐように、まさに、獲物を狙つ蛇のよつて鋭く動きながら、七海は執拗にあおいだけを追い詰めていく。

「七海ちゃん…… うひー……」

追われている」と云ふことを聞いたあおいは呪符を張るのをやめ、敢え

て七海の動きを誘つみつけ、屋上の縁へと走った。

「何やつてんですか社長……」

「あおいを追つ七海の動きに容赦がない。いぶきは危険を感じて叫んだ。

「いいのよ……このまま私が七海ちゃんの注意を引き付け続ければ、なんとか、時間を稼げるわ……！」

「でも、そんな事したって……」

「七海ちゃんがこうなった理由が、必ずここにあるはずよ……。森主任は、何が何でもそれを探し出して、七海ちゃんを元に戻すのよ！」

あおいは、膝近くに達した水をかき分けながら、七海の攻撃をかわいで避けている。

「わかりました……！」

いぶきは胸の前で印を組み、手を瞑ると、周囲の氣の流れを読み始めた。

のんびりしてこるヒマはない。この荒れ狂う天候と、七海のかき乱す水氣の中で、この屋上の異常感を感じ取らなくてはいけないのだ。

しかし、山姫であるいぶきは、水氣と木氣には敏感である。すぐにおかしな事に気がついた。

「社長……あの築山、氣の流れが変です……！」

いぶきが指したのは、箱庭状に作られた屋上緑化施設の中にある、小さな緑地であった。

屋上緑化には珍しく盛り土がしてあるため、水没を免れていた。そこだけまるで、自然の草地のようになつていて。

「たしかにおかしいわ……なんであんな所にウバユリが咲いているわけ!?」

ウバユリは大型のユリだが、そして花が美しくないため、庭園などに植えられることは少ない。しかも、根が深いので屋上緑化には向いていない。

なにより、日陰を好むウバユリがこんな場所で育つのは、異常と言えた。

「見て……石の塔がある……」

ウバユリの数本生えた緑地の中心に、古びた小さな石の塔が見える。

「きやあつっ……」

その塚に駆け寄ろうとしたあおいは、七海の尻尾に足を掬われて転んだ。

派手に水飛沫が上がったが、怪我はない。次第に増えてきた水に、逆に助けられた形だ。しかし、立ち上がるひつとするとこりく、七海が迫ってきた。

あおいは水氣を封じる土氣の呪符を持つて身構え、戦う覚悟を決めた。

その時、一際大きな雷鳴が轟き、一人の間に落雷した。
きなくさい臭いが、周囲に立ちこめる。

ほとんど七海に直撃した雷は、不思議なことに周囲に放電しながら、七海に巻き付くようにして、そのまま形を取り始めたのだ。

「危なかつたですね」

足元から低い声がした。

土砂降りだつた雨が、一瞬にして小雨に変わつてゐる。ようやく視界が良くなり、周囲の様子が分かるようになつてきた。

七海の体に巻き付いていたものは、鋭いかぎ爪の付いた、三本指の巨大な腕であつた。

黄金色の鱗が雨に濡れて鈍く光つてゐる。

その腕は、あたかも水中に巨大な龍が潜み、七海をつかみ上げているかのように見えた。

「真菰専務！」

「少し市内の浸水エリアを増やして、警察やマスコミを遠ざけました。あとは、伊園さんを連れて帰るだけです」

つまり市内を水浸しにして、この場所が注目されなつようにした
わけだ。真菰専務らしからぬ荒っぽい方法である。
だが、そんなことを言つている場合ではない。

「真菰専務！！ あの石塔が怪しいのよ！ アレ、何だか分かる？」

すると金色の龍のものと見える巨大な頭部、その更に一部が、せり上がるよつにして水面上に顯れた。

「！」

「」の屋上を覆い尽くしている浅い水面に、陰界との境界面を作り出しているのだ。

真菰専務が、容易に動けない理由の一つが、これであった。全身を現すには、莫大な妖力と条件が必要な上、身じろぎするだけでも、住みかである真菰川が氾濫してしまつのだ。

真菰は水面上に片眼だけ見せると、『せんつ』と石の塔を見た。

「さひ……」「」から見ただけでは、何とも言えませんが……ダーキーの事もありますから、辻闇に破壊したりしない方が良いと思します。

それよりも、呼びかけて伊園さんの意識を取り戻せませんか？」

「やつてみる。七海ちゃん……私よ……分かるよね……？」

「わ……かる」

驚掴みにされたままの七海の目に、かすかに理性の光が戻つたよう見えた。

「良かった。もう、帰つましょう！」

あおいは、やうに深さを増した水をかき分けながら、両手を伸ばして、七海を抱き留めようと近づいていく。

「帰……る……？　わたし……帰りたくない……あの海の底は……もつ……いやあああああ……！」

突然、暴れ出した七海は、かぎ爪の拘束を抜け出して、先ほどの石塔に向かった。

「な…………何を！？」

七海は蛇身の先端にある、人間の上半身部分を、石塔に叩きつけるようにぶつかっていった。小さな塔は木つ端微塵に吹き飛び、石で怪我をしたのか、血飛沫が飛んだ。

「七海ちゃん！！」

成り行きを見ていたいぶきが叫んだ。

深傷を負った七海は、いつそう激しく暴れ出した。頭を両手で抱えるようにしながら、蛇身はぐねぐねと周囲をのたうち、水をはね飛ばして荒れ狂う。

たいした水深ではないとはいえるで津波のような勢いだ。その様子に、いぶきも、あおいも、真菰のかき爪もうかつに手を出せない。しかし、そのうち急に水深が下がり始めた。

「これどうしたの！？ 水が引いてく！？」

あおいが叫んだ。

先ほど石塔のあつたあたりに、周囲の水が渦を巻いて吸い込まれ始めたのだ。あれだけあつた水が、数秒もせずに消えていく。

「ぐあつ！－－ これは…………ダメですね」

真菰の巨大な爪は、水面の消失によつて存在を維持できなくなり、煙のようにかき消えていった。そして現れた時とは逆に、床面から上空に放電が起こり、あたりには再びきな臭い臭いが立ちこめた。

「真菰専務！－－」

境界面が突然消失すれば、こちら側にあつた体の一部が大きく傷ついた可能性もある。状態によつては、しばらく人間体に戻れないかも知れなかつた。

あおいは心配そうに、屋上の床面を見るが、陰界の様子は窺い知ることはできない。

「わ……わたし……もどりたくない……うみのそこは……い……や……」

七海の体が金色に輝き始めた。頭を抱えてつぶやきながら、蛇身のまま光り輝いていく。

「これは……！……」

「何？！ 何なの！……！」

七海から発する光が、風のように周囲のものを吹き飛ばし始めた。この光には、質量があるとしか思えない。このままでは、光の圧力であおい達も吹き飛ばされる……そう思った時。

轟つ

時ならぬ強風が吹き荒れた。

さつきまでの暴風雨の風とは、明らかに質が違う。植え込みの植物が飛ばされ、どこかで窓ガラスが割れる音がする。あおいは腕で頭をかばい、目を瞑つた。

目を開けた時、そこに立つていたのは、僧形に赤ら顔、しかし、特徴的な眉に笑つたような目とひょろ長い手足、……大天狗・次郎坊

の本性を現した、箕島治郎であった。

「師匠……」

「あなたたちは気が早すぎます。びひつて、事務所で私を待たなかつたのですか?」

「でも……七海ちやんが……」

「彼女はあなたたちが刺激したから、こうなつてしまつたのではないのですか?」

これはおそらく神靈の憑依現象です。

神靈が憑依したという事は、神靈でないと太刀打ちできないという事です。たしかに私も神靈の端くれではあります。今や、私の力でも抑えきれるかどうかは分かりません」

次郎坊は葉団扇を大きくして、防御の姿勢を取る。すると、途端に光の圧力が和らいだ。

まるで傘で横なぐりの雨を防いでいるかのようだ。

「この神靈はどうやら、サラスヴァアティ……弁財天のようですね。しかも……復活させる際に、血を捧げてしましましたか。サラスヴァアティの暗黒面とでも言ひべき、嫉妬と情念の面が顕れています」

次郎坊の言つ通り、七海の顔は苦しそうに歪んでいた。

穏やかな学芸の女神の表情とは言い難い。

強い光が收まり、ようやく激しくのたうつのをやめた七海は、頭を抱えたまま、とぐろを巻き始めた。

「へりかん……わん……わた……しは……くらまさんが……」

「ああ」

「分かつていいわーー！ 私も応援するーー 頑張ればいいじゃないーー！」

あおいは必死で声を掛けた。

「でも……わたしのおもいは……せんとは……わたしのものじゃない……なかつた」

「何ですかーー？」

あおいは驚愕の声を上げた。

「わたしのおもいが……『せせものなら……わたしは……うみこかえらなくちゃ……いけない』

七海の輝いていた体が、今度は次第に青黒く変色していく。

「おもいを……せんものにするよ……おもいの……せんとのもじぬしを……いろか……しか……」

それまで、苦しみに悩んでいた表情が、見るも恐ろしい憎しみの表情に変わっていく。

その憎しみのこもった目で七海が睨みつけたのは、あおい、ただ一人であった。濁った青色の皮膚に覆われた七海の、つり上がった目や牙の見える口元だけが、血を塗つたよつと真つ赤である。

「何……言つてゐの？ 七海ひやんーー？」

あおいは、七海の言葉の意味が分からなかった。

鬼女の形相に変じた七海を前にして、不思議と恐怖は感じていない。しかし、どう反応したらいいのか分からず、ただ立ちつくすしかなかった。

「逃げなさい！… 何をばーっとしているのですか！…」

呆然と立ちつくすあおいに、七海の尻尾が襲いかかったのだ。次郎坊がそれをかばって、代わりに巻き付かれてしまった。尻尾から巻き付き、胴体まで引き寄せて締め上げるのに、数秒もからない。

「し……師匠……」

「大丈夫です！ かえつて、都合が良い。こつすれ……ば！…」

次郎坊が気合いを入れると、七海がどぐろを巻いて締め付けるその内側に、巨大な銀色の剣が現れ、

巻き付いた蛇身を、ブツブツと断ち切っていく。

次郎坊が、巻き付かれた状態で降魔の剣に気を注ぎ込んだのだ。大天狗の強力な気を最大級に注ぎ込まれた降魔の剣は、長さは3m以上、太さもそれに見合った巨大な長剣となっている。

「ぎやああああ！…」

七海の絶叫が響き渡り、血飛沫が飛ぶ。いくつかに寸断されてしまった蛇身が、それぞれ別の生き物のように蠢いた。

「七海ちゃん！… 七海ちゃん！… しつかりして！…

「師匠…… やめてください…… もう、七海ちやんを傷つけないで……」

「何を馬鹿なことを…… いつなつては、手加減などすれば」「ちりが死にます……」

次郎坊は、巨大化したままの降魔の剣を真っ直ぐに突き出して、うずくまつた七海にとどめを刺そうと飛びかかった。

七海の背中に降魔の剣が突き刺さる。と、見えた。

しかし、次の瞬間。降魔の剣は固い金属音を響かせ、屋上の床面にはじかれていた。

「何……？」

次郎坊は自分の目を疑った。一瞬にして、石塔のあつた築山^{いづみやま}と、七海の姿がかき消えていたのだ。

「「」の術は……」

いぶきが大槌を携えて、身構える。

「関係性を移動させる術…… 山神の眷属の技ですね」

次郎坊も剣を持ちやすいサイズに戻し、疲れ果てて座り込んだあおいを守るように、いぶきの隣に構えた。

「敵が他に…… いるの？」

その時、上から声が降ってきた。

「さすが大天狗様だつべ。もつちつとで、大事な依り代を殺される
どいじりだ」

振り返ると、エレベーターの機械室の上に人影がある。だが、既に日が沈み、暗さが増しているため、顔は判別できない。

「あなた…………？」やまこ「ですね？」

次郎坊はその人影に、まっすぐに剣を向けながら言つ。それを見て、人影はゲタゲタと笑いながら答えた。

「ああ、そうだつべ。
邪魔つけが入つてどうすつべかと思つたが。おめえら**ど**戦わせだ
おがげで、逆にうまく神がかつてくれだ。礼を言つよ」

「まさか…………ダーキーの塚を、貴田小学校に転移させておいた
のも…………」

「もぢろん、オレ様よ。

んだげんど、これ以上、おめえらに話すわげにはいがねえなあ。
まんだ、最後のシメが残つてているがらな」

不敵に言つと、やまこ「はまた下卑た声で笑つた。

「山の妖の総元締めたる大天狗と、山神正統の血を引く山姫から、
たかが、はぐれ？」やまこときが逃げられるとでも思つてんの？」

いぶきは怒りに燃える目で、影を睨み据えている。

一見わざかに屈んだだけの姿勢に見えるが、脚に現界まで力を溜

めていた。変化した**いぶき**の脚力なりば、一跳びで?の元に達して攻撃を加えられるであろう。

「オレだけだつたら、無理かもしんねえな。だが、ベビにオレ一人だと言つた覚えもねえですかね?」

「わうこり」とだ。わあ、行くぞ!

?の側に、すつとまつ一つの影が現れた。

やや小柄に見えるが、やはり顔は見えない。

「へえ?今までコソコソ隠れてたつてわけ?

わね!-

こつたい、あんた何者よ!-?」

あおいが挑発的な口調で囁く。

「オレはマイツと違つて口が軽くないんでね」

あおいの問いかねは一切答えず、もう一つの影は出てきた時と同じように、すつと消えた。

?の影も同時に消える。

後に残つたのは、すつかり水が引き、何もかもが破壊され尽くした屋上施設だけだった。

§1-9 天部神

§1-9 天部神

「しまつた……逃げられたようです。空間の歪みが見えました。どうやら、あいつは観念空間を操れるタイプの妖のようですね」

次郎坊が、悔しそうに一いつの影が消えたあたりを睨みながら言つ。「観念空間？ つて……何なんですか？ 隕界に逃げ込んだんじゃないですか？」

「隕界ではありません。

しかしもちろん現界でもない。人の観念が作り出した世界。大乗佛教で言う八識のひとつですよ。」

「それは……どういう事なんですか？」

いぶきが不思議そうに聞く。

あおいも聞いたことのない概念だ。次郎坊の元で、妖怪と人間、そして神々の関係について3年間学んだはずであったが、『観念空間』という言葉は初めて聞く。

「観念空間は、人間などの意識の働きによって作られると言われています。妄想や、空想、野望、信念、夢、……… そうした思いが強ければ強いほど、大きく、強い観念空間が形成されます。そして……その空間は逆に現界にも影響を及ぼすのです」

「それを……操る？」

あおいもいぶきも、もう一つ理解しきれていない様子だ。

「どこまで操れるのかは分かりませんがね。

観念空間は、宗教上の神靈のエネルギーの根源ともなっていますから、行き来できるだけでも、大したものですね」

「次郎坊様。ヤツら……どこへ行つたのでしょうか？」

いぶきが大槌を元の小枝に戻しながら言つ。

「どこにでも行けるでしょう。観念空間は、人間がいる限りどこにでもつながっていますからね」

「でも、この状況から考えれば、行き先は三つ目のビルしかないわ。すぐに行きましょう！！」

疲れ果てて座り込んでいたあおいが、すつと立ち上がる。しかし、歩き出そうとしてすぐに一、二歩よろめいた。

「大丈夫ですか、社長？」

いぶきがあおいを横から支える。

その時、急に鉄扉が開いて屋上に上がってきた人影があった。

「入堂部長！ 豆田さんも！… どうしてここに？」

あおいが、驚いたような声で言つた。やつて来たのは農村整備部長の入堂と、その部下の豆田だったのだ。

「何言つてんの。あおこちゃん達も不用心だなあ……あんだけ派手にテレビに映つてたら、ただの事故や災害じやないつて誰にでも分かるよ。」

「ええつー? テレビに映つちゃつたの?」

「す……水面を走るビッグホーンから、社長さんと森主任が出てきた時にはビックリしました。あの……それと、葛柳川だけじゃなく、支流の真菰川まで決壊してしまつて……真菰さんは、びこなんですか?」

豆田がおどおどしながら言つが、真菰の姿は今はない。

「真菰専務は……たぶん、まだ陰界よ。
さつき、現界との境界面を破壊されてしまつたから……もしかすると大怪我をされているかも知れないわ」

「そりや弱つたなあ。

早いとこ真菰川の水位を元に戻してもらわないと、一部住民に避難勧告しなきゃいけなくなつちまうんだけど……」

入堂部長は、髪の毛一本もないつるつとした自分の頭を撫でながら、口をどがらせて思案顔だ。このF市は、災害が少ないことで有名な市だ。その実は、入堂や豆田のよつな市職員に紛れ込んだ妖たちが、守つているからなのだ。だから河川の氾濫など、ここ数十年は無かつた大災害なのだ。

真菰川は市内の田園地帯を蛇行しながら、葛柳川につながつている小河川である。だから決壊したといつても、被害はまだ水田地帯だけなのだろう。

だが、このまま水が引かなければ、住宅地にまで被害が及んでもうに違いない。

「悪いけどそれどころじやないのよ。

ダーキーとサラスヴァティが復活して……しかも怪しい連中が、更に気を溜めて何かしようとしているんだから」

「その通りです。あの?^{やまい}の言葉から考へても、これだけで終わるはずはないと思います。おそらく、三柱目の天部神の復活を狙つているのではないでしょうか。

いや、それこそが彼等の最終目的なのかも知れません」

次郎坊は顎に手を当て、考え込みながら呟くよつこして言った。

「天部神?」

「茶吉尼天も、弁財天も、天部神なのです。

一般的には単に仏法守護の神々とされていますが……実は天部神には、別の側面があるのです」

「別の側面とは……何ですか?」

「菩薩や如来、大神は、天の光を地上に伝える象徴のような神々です。

ですから、常に人々の幸福を願い、遍く衆生を救おうとなさいます。しかし、そうすると人によつて龐彌するわけにいきませんから、結局、現世利益を「えにくくなります」

「ええつ、龐彌? 御利益が龐彌なんですか?」

いふきが驚いたよ'つに言ひへ。

「もちろん贔屓です。

受験一つとっても、誰かが合格すれば、別の誰かが泣くわけでも「つ、金運も恋愛運もすべて同じではないですか」

「それは…………たしかに」

いふきは納得してうなずいた。

「それに対しても天部神は、直接的に御利益を『与える』ことができる神々です。

しかしそうした神々は、基本的に『意志』と『力』は持っていても、『意識』がない。ですから誓願に見合つた犠牲を払わなければ、何もしません。

つまりギブ・アンド・テイクですね。

逆に相応の犠牲を払えば、どんな相手に対しても、それなりの御利益を授けます」

「どんな相手でも…………つて、さすがに悪人や私利私欲の願いは、聞き届けたりしないんでしょ?」

「とんでもない。

たとえ何者だらつと、どんな身勝手な願いだらつと、きちんと作法を踏んで、誓願に見合つた犠牲を払いさえすれば聞き届けます。大昔の話ではありますが、ライバルの失脚や呪殺まで成功させた例すらあります」

「本当にですか!?」

あおいもいぶきも、信じられないといった様子だ。

「彼等はダーキーとサラスヴァティを、依り代を通じて顯現させました。

この一柱だけでも充分な力があるのに、三柱目の神となると、いつたいどう対応したらいいか、私にも分かりません。

今、出来るのは、そうなる前に止めることだけですね」

だが、戦局はかなり悪化している。

敵は？と正体不明の妖一體。七海と葉子を人質に取られたようなものである上に、相手は力ある神靈一柱だ。しかも放つておけば、さらにもう一柱増えるかも知れないというわけだ。

「こちらは、大天狗・次郎坊が最強と言えるが、さすがに天部神に対抗できるほどの力はない。

その上、身動きのとれない真菰、修行中の座間、疲労困憊のあおい……からうじて無傷と言えるのは、いぶきだけである。

「なんだか、とんでもない事になっちゃってるみたいだねえ……で？市民の安全を守るために……やっぱり我々、市職員も協力しなきゃならないのかな？」

入堂部長は、話を聞いてこりのうちに浸水被害どころではないと悟つたのか、覚悟を決めたように、参戦を申し出た。この男も、見た目はただの中年オヤジにしか見えないが、その正体は見越入道という、かなり強力な妖怪である。

「一緒に戦つて下さるんですか？助かります」

あおいは丁寧に礼を言い、ぺこりと頭を下げる。

普段、仕事上のやりとりでは互いに悪態をつきあい、納得できないと、面と向かつてすら禿げオヤジ呼ばわりするほどだが、だからこそ危機に陥った時には、無償で協力し合いつ。

互いに強い信頼関係があるので。

「ええええっ！？ 部長！？ 私は、ただの化けダヌキですよ？ 神様相手とか、荷が重すぎますっ！？」

しかし、入堂の言葉を聞いた豆田は、目を丸くして震え上がり、自分の目の前でぶんぶんと手を振つた。

その様子を見て、あおいは氣の毒そうに言つた。

「そうね。豆田さんは『無理なさらいで下さい』。稻成さんも、倒されてしまつたくらいだし……ヘタをすると、稻成さんを依り代にした天部神と戦うことにも……」

「え？ ちゅちゅ…………ちょっと待つて下さい……葉子さんが？ 倒されたって…………誰にですか？」

「たぶん、ダーキー……に。今、どうなつているかは分からないわ」

「そんな…………」

豆田は、自分の片思いの相手が安否不明と知つてよほどショックだつたのか、口をポカンと開けたまま立ちつくしている。その様子を見て、入堂部長は豆田の顔を少し心配そうにのぞき込んだ。

そのまま顔をギリギリまで近づけるが、あまり反応がない。

「豆田君。君、いったん災害対策本部に戻つてよ。

消防防災課長に言つてさ、やつぱし、避難勧告出しどう。悔しいだらうけどさ、豆狸では天部神に一矢も報いることは出来んだろ。あと、時間があつたら陰界におられる真菰専務に連絡を取つてみてよ。

君ほど妖力が小さければ、むしろ簡単に陰界へ行けるだらうからや。

いいね？」

入堂部長にしては珍しく、優しげな声で言つと

「…………はい」

半分上の空の表情のまま、豆田は小さな声で返事をした。

「あとは…………つと。

神靈クラスに少しでも立ち向かえる連中つて言つたら、商工観光課の白井女史と、副市長の野槌さんくらいしか、思い浮かばないな。ま、携帯で連絡とつてみるよ」

「入堂部長、ありがとうございます」

あおいは、入堂に更に深く頭を下げた。

この状況では、入堂を含め三人もの戦力プラスは、正直ありがたい。

「では、戦力の確認が出来たところで八社商事ビルへ向かいますが

…………

圓野君。

君は、出来れば残つて欲しいんですがね？」

「師匠！？ ビリしてです？」

まさかそんなことを言われると思つていなかつたあおいは、驚いて次郎坊を見つめた。

「君の術は、周囲の木火土金水の気を利用、増幅したものです。自ら気を発して戦う複数の妖怪同士の乱戦では、効果が薄い。ましてや神靈相手には、力不足もいいところです」

「でも！… 何かできることがあるかも知れません！…」

「いえ。確実に足を引っ張る可能性の方が高いです。厳しい言い方かも知れませんが、人間の身で妖怪と並んで戦うのは、どだい無理なのです。これもあなたの身を案じて言つているのですよ？」

「それでも……七海ちゃんは私の大事な友達でもあります。稻成さんも、きっと助けを待つてているんです。

一緒に……行かせて下さい…… お願いです師匠！…」

あおいは次郎坊の前に跪いて、懇願した。

「ふうむ……

そう言い出すのではないかと思つていましたが…… ビリしても行く、と言ひのなら圓野君。これを貸してあげましょ！」

そう言ひと次郎坊は、自分の背中に背負つていた袋から、黒い和弓と派手な装飾の矢筒を取り出し、あおいに手渡した。

「これ、弓…………ですか？」

「サラスヴァーティの憑依した、あの磯女の嫉妬の念は、明らかにあなたへ向いています。

先ほどはうまく逃げましたが、何の装備も無しに呪符だけを頼りに戦つても、

あつという間に殺されるだけでしょう。

その弓は……」

次郎坊は矢筒から矢を一本取り出した。

「念の力で、矢に込めた氣を打ち込めます。

ほら、小さい文字ですが、矢尻に呪が書かれているでしょう?」

「はい」

「矢羽根の色が青は水氣、赤は火氣、緑は木氣、黄色が金氣で黒は土氣です。あなたは、何があろうと前に出ず、最後方からこの矢で攻撃するのです。

約束して下さい。

いいですか? 何があろうと、です」

「分かりました」

なんとか戦えることになつたあおいは、ほつとした表情で弓矢を抱きしめた。

§20 野槌と白粉婆

八杜商事ビルはまだ、明かりが煌々と灯っていた。
時刻は午後8時を回ろうとしている。

夕方から荒れ狂っていた風雨は、ようやく収まりかけていたが、
それでも時折、思い出したように突風が吹き付けてくる。
しかし、すでに川からあふれた水は引き始めたようで、住宅の浸
水被害も大したことはなさそうだ。

あおい達は、入堂部長たちの手引きで、なんとか人目に付かずに
西北新聞社を離れることが出来た。

あおい、いぶき、入堂の四人でケルピーに乗り込み、いくつかの
検問を入堂の顔でクリアして、ようやく玄関前に到着すると、そこ
にはすでに一人の女性が待っていた。

二人ともきちんとしたスーツ姿であり、50代を少し越えたくら
いに見えた。

一人は異常なほど色白で細身。もう一人は大作りな顔立ちの優し
げな女性だったが、一見しただけでは、二人とも普通の中年女性で
あり、上品で穏やかな物腰は、上流階級のご婦人といった雰囲気で
ある。

いきなり彼女らが妖怪であると言われても、たぶん誰も信じない
であろう。

「やあ、すみませんね、お二人とも。お忙しかったでしょ？」

入堂部長は、氣さくに話しかけた。まるで、雑事をこなすために集まつたかのようである。

今から神様と戦うとは、とても思えない。

「呼び出したのは君でしょう？」

しかも、相手はこの浸水災害の原因となれば、副市長の立場上、断れないですからね。それに、天部が一柱も顕現して、何をするか分からぬとなれば、市民の安全の為にも放つておけないじゃないの？」

不機嫌そうにこちらを睨んだ、大作りな顔立ちの縁のスーツの女性の顔は、あおい達もよく知っていた。
副市長の野槌薫乃のづち かやのである。

「でも、入堂君。

本当に、天部を呼び出したうつけ者がいるのですか？

許せませんね」

真っ白なスーツをまとつた女性は、商工課長の白井仙子しらい せんじ。

あおいとは直接の面識はないが、そのカリスマ性と辣腕は、市役所の外にまで知れ渡つている。彼女が妖怪である。ところことは、あおいも入堂部長から聞いていた。

「商工課長として、このビルのオーナーには一通り事情を説明しておきましたの。

妖怪退治だと言つたら驚いてらつしゃいましたけどね。快くご協力いただけるということで、ビル自体を壊さない限りは、何をやつてもお咎め無しですわ」

白井はそう言つと、クスクスと笑つた。

実際には妖怪退治ビコウか、神様とのケンカなわけだが。

「じゃあ、ここのビルの方達は？」

「もちろん、全員帰宅してもらいましたわ。

明かりが付いているのは、人がいるように偽装して彼等の決行時間を見らせる為ですよ」

さすが商工関係を業務としているだけあって、手回しが良い上に抜け目がない。

「じゃあ……行きましょうか」

そう言つと、白井は両手を広げて周囲に白い粉を振りまき始めた。粉はまるで煙のよう舞い、周囲に漂つっていく。

まだ強い風の吹きすさぶ屋外であるにも関わらず、その粉だけはなぜか、吹き飛ばされる様子がない。化粧水のような芳香が漂い、たちまち視界がふさがれて、あつといつ間にまるで白いドームに入つたようになつた。

「な……何よこれ？」

あおいが警戒して声を上げた。いぶきも身構えたが、入堂達は粉の正体を知つてゐるのか、平然と笑つてゐる。

「脂粉結界ですの。

あとは、野槌副市長がこの結界」と呑み込んで、屋上まで連れて行つてくれるだけですわ」

言われてみれば、野槌の姿だけが見えない。

しばらくすると、白いドーム全体が動き出す感覚があり、その揺れが止まると同時に白い結界は薄れ始め、ほんの数秒で視界が戻つた。

「……」

そこは、一見して地上の庭園と見まごう日本庭園であった。

小さな池の畔には、カエデやサツキが植えられ、池の周囲には大きな擬岩を配し、ロックガーデン調にデザインされている。

一見して、計算された美しい日本庭園であると分かるが、なぜか池の畔には一抱えほどの丸い石が不自然に落ちていた。

「屋上です。敵はまだ来ていなようですわね」

白井課長は、歌つよう言ひながら艶やかな仕草で上着を脱ぎ始めた。

妖怪の本性に変化するのだ。

見る見るうちに顔の皺と白髪が消え始め、脱いだスーツの上着がほどけるようにして、真っ白な羽衣状になつていく。舞い踊る白粉の中に姿を現したのは、美しい少女・脂粉仙娘の姿だつた。

脂粉仙娘という神靈は觀音の化身とも言われ、強力な神靈系の妖怪である。

白井課長の本性である白粉婆おこひいばばは、多くの伝承で腰の曲がった老婆とされているが、それは白粉を売り歩く際のカムフラージュであり、本来の姿はこの少女なのである。

「いえ。

敵は觀念空間を渡れるそうですから、いつでもやって来れるはず。

今、姿が見えないのは……最後の天部神召還の前に、邪魔者の私達を始末したいからじゃないかしらね

野槌副市長も、不敵に笑うと変化を始めた。

草色のスーツの色が更に濃くなり、丈が長くなつて足元にまとわりついていく。そのまま下半身を鱗が包みこむようにして、蛇身が形成されていった。

しかし蛇身といつても、磯女の七海ほど長くはない。長い髪も濃い眉も、大きな目も、すべてが美しい翡翠色に変わつた。

彼女は野槌……口の大きな蛇と伝承されるが、そのルーツは草の女神・カヤノヒメであり、古さと強力さでは、大天狗にもひけを取らない。

変化した顔は、普通の人間よりは多少口が大きく見えるが、人間の姿をしていた時と比べて若々しく、美しいのは白井と同じである。

一柱の女神が並び立つと、神々しい光があたりを照らし始めた。

「早速来たようですよ」

次郎坊が指さした先には、うつすらと人影が浮かび上がろうとしていた。

あの、半透明の小さな人影は……

「あれが……ダーキー？」

あどけない表情で現れた少女の姿をした靈に、初めて見るあおいはとまどいを隠せない。話には聞いていたものの、実際に見るととても凶悪な鬼神には思えないので。

「外見にだまされではいけません。

ダーキーは少女の靈魂に憑依していますから、物質としての実体がない。しかし死靈を喰らつてエネルギーを得て、集めた火氣を

操ります。見た目より相当厄介な敵ですよ

「火氣使いなら、私にお任せを」

しぶんせんじょう

白井課長の変化した脂粉仙娘が、ふわっと前に出る。

半透明の少女は、その場でくるりと回転すると鬼女の形相に変化したが、初めて見る白井の姿に、さすがに警戒したのか、いきなりかかつて来る様子は見せず、自分の周囲に火玉を飛ばし、火氣で結界を張った。

「では、こちらは私ですか」

カヤノヒメは、ふいと向きを変え、庭園の池の側に立った。

池の畔でカヤノヒメがふわりふわりと手招きすると、小さな池の水面が急に泡立ち、水面をまるで海藻のような黒い髪が覆い尽くしていく。

そして池の中心が、まるで下から持ち上げられるようにして、人型を作り……水中から青黒い肌の女怪が姿を現した。

§21 黒幕の正体

§21 黒幕の正体

「…………七海ちゃん！」

水中から姿を現した女怪は、七海であつた。先ほど次郎坊に寸断された蛇身は元通りになつており、その姿は、更に醜怪に変貌を遂げていた。

毒々しい青と緑の鱗に覆われた体は油を塗つたよつに黒く光り、太さは一回りほど増している。そして、目や口は血のよつに濁つた色で赤く縁取られ、下から睨め付けるようにカヤノヒメを見つめていた。

あまりの変貌ぶりに、いぶきが見るに堪えないといつた様子で目をそらす。

「お一方が天部神を抑えている間に、我々は、さつき現れたあの一匹の妖どもを見つけ出し捕獲しましょう！」

次郎坊がいぶきとあおいを促す。

いつの間にか、身長3mほどの僧形の一つ目入道に変化した入堂部長も、それに従つた。しかし、相手はこの世界でない観念空間に潜み、こちらを見ているはずである。

見えない相手をどうやって探し出したものか……あおいが考えてみると、次郎坊がこともなげに言つた。

「わざわざ連中を探す必要はありません。

自分達の不都合になれば、出て来ざるを得ないでしょう。この屋上庭園にある石組みのどれかに、三柱目の天部神を呼ぶための石塔が紛れ込んでいるはずです。

私がなんとかそれを見つけ出しますから、いぶき君が元の場所に転移させてしまつてください

すると。

「そうだじじされちゃあ、困るんだよねえ。

出来れば、おめえらを片付けでがらゆつくり天部神を呼び出したがつだけど、そもいがねえか」

言葉と共に、黒い影が空中からすつと現れ、ロックガーデンの擬岩の上に降り立つた。

聞き覚えのある声と強い訛りは、やまいである。

顔は意外に凡庸な、40前後の人間であるが、その身体はやまいい真つ黒な毛に覆われた巨体になつてゐる。もうカムフラージュはやめた、といふことらしい。

「出たわね！ あんた一匹くらひ、私だけで片付けてやるわ――！」

言つが早いが、いぶきが大槌を構えて跳躍した。

「待つて森さん、ダメよ――！ もう一匹がどこにいるか分からないわ――！」

ああいが叫んだ。

が、時既に遅く、振り上げた大槌がやまいに届く寸前で、いぶきは横合いから何かの強い力で弾き飛ばされ、床面に叩きつけられた。

その様子を見て笑う^{やまく}、下卑た声が響く。

「きやはははーーー

山神正統の山姫殿^{やぢや}よりも、情げねえなあ。頭に血いのぼつたら、イノシシ並みかあ？」

「ぐ……あつつーーー

そのまま転がり、さらにコンクリート製の柵壁に叩きつけられたいぶきが呻いた。

と、そのすぐ側に別な影が現れる。

「今、一番厄介なのは、あんたの能力だからな。とつあえず……封じさせてもうつ」

「きやあああつーーー

いぶきの悲鳴が響き、その場で動かなくなつた。

「森さんーーー」

あおいが駆け寄ろうとするが、次郎坊が手を伸ばしてそれを押しとどめた。

「もう、約束を忘れましたか？

あなたは後衛に徹して下さい。いぶき君なら大丈夫。あの妖は山姫を一瞬で殺せるほど強力ではありません」

次郎坊は現れた影を睨みながら言う。

その影は^{やまく}と同様、40代くらいの人間の男の姿をしていた。や

はり、どちらかといえば平凡な顔つきである。

だが、伸び放題の髭と髪、薄汚れた白いTシャツにボロボロの作業ズボン姿は、風呂に入るどころか何日も着替えてすらいない様子に見える。

だが、人間の姿でのイメージは、妖怪の本性とは基本的に無関係だ。一見しただけでは、何の妖怪が化けているのかは分からない。

「へえ。大天狗様は、オレの実力を見切つたって感じか？ それとも正体まで分かつちまつたか？ だがあんましオレを舐めない方がいいと思うぜ？」

「舐めてはいませんよ。

確かにあなたの能力が、？の術と合わされば厄介でしょうね。しかし、単独では恐るるに足りません」

「何？！」

それを聞いた男の表情が凍る。

「うわあ！ なんだこれは！？」

その時突然、？の声が響き渡った。見ると、？は巨大な手に掴まれている。驚いて見上げた？を見下ろすように、手の持ち主はどんどん巨大化していく。

見越入道、入堂の術である。

「くつ……バカが。あんなチンケな結界に捕まりやがって」

実際には、入堂部長は大きくなつてはいない。

結界内に取り込んだ相手の意識を掌握し、相対的に小さく感じさ

せていく術なのだ。いつなると、無限に小さく感じさせられるため、大抵の術は効かない。

「あなた達の負けです。一柱の天部神も召還できたのは暗黒面のみ。しかも、依り代の意識に縛られていては、あくまでその実力の一部しか発揮できないでしょう？ しかし、こちらの一柱の女神は、本来の強さは天部神には及ばないでしょうが、眞の姿を見せていますからね。」

次郎坊の言う通り、脂粉仙娘もカヤノヒメも、少女の靈と後逸したダーキーと、女怪となつたサラスヴァティ・七海を圧倒している。

脂粉仙娘は、手の平から小さな白い玉を無数に出して、それをまるで鳥か虫を思い通りに飛ばしてでもいるかのように操り、ダーキーの少女靈の発する火氣をことごとく中和している。

白い玉は、土氣結界に包まれた白粉の塊なのだ。

そして隙を見ては玉から白粉を噴出させ、ダーキーの全身を白く塗り固めようとしているようだ。

半透明だったダーキーは、白い粉で固められていいくにつれ、青黒い天部神の暗黒面の実体を見せ始めている。しかも憎しみの表情を強めながら、攻撃を受けるたびに、次第に褐色の毛を生やした、

肉食獸の姿に変身していく。

野干と呼ばれる、野獸の本性だ。

カヤノヒメは、サラスヴァティの水氣を一方的に受けていくように見えた。

しかし、強い水流を浴びるたびに、体表面にびっしり生えた緑色の植物が翡翠色の輝きを増していく。水氣は木氣を育していくのだ。しかも、全身の輝きが一定の強さに達すると、大きく口を開けて

強い光線を放ち、高熱でサラスヴァティを焼いた。体内で木氣を変換して、火氣に変えているのだろう。

サラスヴァティと化した七海は、蛇身をくねらせてそれに耐えている様子だ。

一撃一撃は、大して効いていなさそうに見えるが、次第に動きが鈍くなっているところを見ると、確実にダメージが蓄積していく。

「降伏しなさい。今ならまだ、命までは取りません」

見下ろすように睨みつける次郎坊に対して、それでも男の目は屈していない。

「幸福だと？ 命だとお？」

男は突然ゲラゲラと笑い出した。

「いいかあ？ オレ達の命なんかなあ、とっくに終わってるんだよ！ 唯一の生き場所、圓野組をクビになつた時になあ！！」

あおいは、その声を聞いてはつとした。

「あなた、まさか…… 金石さん？ 金石 猛さんじゃないの！？」

「………… オレのこと、覚えていらっしゃいましたか、お嬢。

オレの正体が分かつたのなら…… オレ達がこうしている理由もお分かりでしょ？」

「分からぬわよ！ あなたは、猿…… 人の悪夢を食べるだけの優しい妖怪だったじゃない！！

「こんな………… こんな酷いことする人じゃなかつたわ！」

あおいの脳裏に、金石の笑顔が蘇る。圓野組の社員だと言つて、祖父・正平に紹介されたのは、あおいがまだ高校生の時だつた。過去の心的外傷から、悪夢を見続ける友人を救つてもらつたのだ。金石は笑顔を絶やさない、優しい男だつた。なぜいつも笑つているのか、と聞いたあおいに、人の心をよく知らなければ、人の心には入り込めないのだ、と語つてくれた。

猿……人の夢に入り込み、悪夢を食べる妖である。

人の夢は観念空間につながつてゐる。いや、観念空間そのものと言つてもいい。

つまり猿である金石は、観念空間を行き来する能力を持つていたのだ。

「オレが……オレ達が、圓野組をクビになつてからどんな思いでいたか、あんたには分からねえだろうよ……！」

「俺達つて……じゃあまさか、あの?は……小山さん?」

あおいには、?の心当たりもあつた。

小山猩吉。

やはり圓野組古参の社員であつたが、父・明徳によつて解雇されたうちの一人だ。

よく現場での動きが鈍いと言われ、後藤副社長に怒鳴られていた。しかし、事務所に遊びに行つたあおいに、建築廃材を使つた竹とんぼやコマなど、変わつた玩具をよく作つて遊んでくれた。

山林開発のせいで、縄張りが無くなつたのだとついていた。

それで仕返しをしようとして、開発工事をした圓野組に忍び込み、逆に捕まつたのだ。滅殺されるかと思いきや、逆に正平は、？に土下座をしたのだといつ。

自分の下調べが足りなかつたと。

それが縁で？は、小山やまという名で圓野組の社員になつた。自分の住処を壊した、憎い土建業じくぎょうだつたはず……なのに、いつの間にか自分が山林を壊す土建業に情熱を燃やしている。と、自嘲氣味に語つてくれたことを思い出した。

「そうだ。

ヤツはあんたに正体がばれないように、わざわざお国言葉で話していたのさ。

オレ達は元々、人間のせいで住処を無くした妖だ。

先代の正平様は、そんなオレ達を雇い入れ、居場所と生きる意味を与えてくれた。だからあんたの親父にクビにされ、どこへでも行けと言われたつて、もう妖怪としても生きられねえし、当然、人間としても生きられねえんだ！！」

金石は、暗い田たであおいを睨みながら言つた。

「だが、ある男に教えてもらつたのさ。一体ずつでは無能な化け物でも、能力を組み合わせればすぐこどが出来るぞ……つてなあ！！」

「ほつ……教えてもらつた？ いつたい、誰にですか？」

次郎坊が鋭く目を光らせて迫つた。だが、金石は鼻で笑つて答えた。

「ハツ！ 誰が教えるかよ！－

「いいか？ オレの観念空間を操る力じゃあ、自分がその空間に潜るだけだ。せいぜいもう一人を連れて行くくらいしかできねえ。あとは、離れた空間を投影して、モノの影をそこにあるように見せるだけだ。

逆に^{やまに}？の関係性を操る力じゃあ、モノの意味しか転移できねえ。だが、一いつの能力を同時に一つのモノに使えば、影と意味……つまり、ほぼ完全に空間転移させられるんだよ！ そうやってな！

！……

「……なるほど。どこかで見つけた天部神を祀った石塔を二つのお山を象つた、二つの場所に転移させた……というわけですか」

激昂し始めた金石の言葉を、次郎坊が引き継いだ。

「へ……さすが天狗様だ。ようやく氣づいたようだな。そこまで気づいたなら、オレ達の最終目的も分かるだろう？」「

「闇の別尊曼荼羅の完成……ですか？

だとしても、そんな古い修法が残っているわけがありません。ツメを誤れば、所願成就の代償として魂を取られますよ？」

「修法も知らねえで、こんな事に手を出すわけがないだろ！－

『立川流真言』だよ。あんたも名前くらいは知っているんじゃないのか！？」

金石は次郎坊を馬鹿にしたように囁いた。

「立川流真言……天台、真言ことらわれず、実効性のある修法なら、仏教、神道、民間呪術まで混淆させ、さらにはヒンドゥーの神々から

古代中国の神仙思想まで取り入れて発展した実践密教ですね。

しかし、あまりに突き詰めすぎた修法は髑髏崇拜や呪法へと進化し、結局は邪教と断定されて迫害され、闇に沈んだはずですが？」

「その通りだ。

だが、その儀式、修法のあらゆる奥義は、様々な寺社の秘伝として、形をえながら伝承されていたんだ。オレはこの1年間、それを探し出し、一から学び……やつとこここまで漕ぎ着けたんだ。

今、その成果を見せてやるぜ……！」

叫ぶが早いが、金石は変化を始めた。すっと目を閉じ、次に開いた時には、瞳が銀色に染まっていた。

上唇が鼻とつながって長く伸びていく。

口からは上向きの牙が一本、小さな象牙のように突き出す。

髪の毛は抜け落ち、茶色い剛毛がその下から生えてきた。

ほんの数秒で貌の姿に変わった金石は、口の中で何かを唱えながら、入堂の作つた見越入道の結界へと飛んだ。

「むつ！？ しまつた！？」

次郎坊が剣を構えて追いかけるが、入堂部長と一緒に斬つてしまいそうで、手が下せない。

貌の本性を顯した金石は、次郎坊の目の前でふいつと姿を消し、次に現れた時には、？^{やまじ}を抱えていた。

一瞬にして易々と、入堂の結界の中から？^{やまい}を救い出したのだ。

ロックガーデンの大岩の一つの上に、本性を現した一体の妖が立つた。

「う……すまねえ。油断しでいだぜ」

「いいんだ小山。礼を言うのはこっちの方なんだから。
オレのために、生け贋になつてくれて……すまないなあ……！」

「な……何だと？」

猿は突然、^{やまに}？の腹にその牙を突き立てる。

§22 大聖歡喜天

§22 大聖歡喜天

丸く突き出た腹に猿の牙を受けた？は、驚いたような表情のまま、ぐらり、と傾いた。

その腹からは大量の血が流れ出し、足元の岩を濡らしていく。猿は？（やまこ）をそのまま牙で持ち上げると、頭を左右に振るようにして、後方へ投げ捨てた。

「これで、生け贋はOKだ。

最後の天部神召還が成就するつてわけだ。つまりお前らの勝率はゼロつことになるな。ひやははははは！」

狂つたように笑いながら、猿の体が金色に輝き始めた。天部神の憑依現象だ。

七海の時と同じである。物質的圧力のある光が、周囲の様々な物を吹き飛ばしていく。

ダー・キーもサラスヴァティも、それと戦っていた二柱の女神も、突然起きた光の洪水を呆気にとられて眺めている。

光に当たる面積が広いと、そのぶんダメージが大きい。大入道に変化していた入堂も、たまらず人型に戻つて物陰に隠れた。

「ついに……あれを呼び出してしまったのですか……しかし、まだ戦う方法はあるはずです！」

次郎坊がまた葉団扇を広げて、光を防ぎながら言った。

「くつくつ……！ 大天狗様。

おめえ……意外に熱血なんだなあ。でもよ……これかうじつ
いつ事になるが……分かつてはるはずだつべ？」

腹から血を流して次郎坊の足元に転がつた^{やまく}が、挑発的な口調で
言つ。

「何ですつて？」

あおいは、倒れたいぶきを抱き起^こしながら、倒れ伏^よして^{いる}？
の顔を見た。

次郎坊は、固く口を引き結び、光の源を睨んで^{のぞ}いるだけだ。

「そろそろ、効いてきだんじやねえが？」

あおいの目を白目^{しゆめ}がちの濁つた眼で見返しながら、？^{はまた}下卑^{わま}た笑いを浮かべた。

光が收まり始めた時、あおいは急に体に違和感を覚えた。
体の芯の方から、何か熱いものが込み上げてくる。生まれて初めて
覚える感覚だ。まるで夢の中に投げ込まれたようで、氣を抜くと
その夢の底まで突き落とされてしまいそうになり、立つていられな
い。

「な……何よ。これ……」

見るとあおいの腕の中のいぶきも、氣を失つたまま脂汗を流して
身悶えしている。

どうやら、同じ感覚を感じていようつだ。

そればかりか、脂粉仙娘とカヤノヒメまでも、それまで放つていた強い光を急に失い、顔に手を当ててよろめいた。

戦いの相手であるサラスヴァアティとダーキーまでもが、ぼうっとした表情で立ちつくしている。

「大天狗様！！」りやあ……何が起きたってんですか！？」

入堂部長が物陰を伝いながら、次郎坊の元にじり寄ってきた。彼の体にも、次郎坊の身体にも、何の変調も起きていない様子だ。

「やられました。三柱目の天部神というのは、大聖歡喜天……ガネーシャだったのです」

光の奔流の中心にいる猿の姿は、まるで、その光そのものが形をなすようにして変わりつつあった。

上唇と一体になつた猿の長い鼻は更に長く伸び、身体の半分くらいの長さになつていく。これでは猿というより象だ。

その身体は、まるで発酵したパン種がふくらむように、むくむくと巨大化していく。

もともとの妖怪・猿は獸と人の中間のような醜い体だったが、いつの間にか、艶やかでバランスのとれた美しい人身に変わっている。鼻の長く伸びた象頭の部分までが、毛のない人肌であるのが妙に妖しく、艶めかしい。

そして、いつの間にか粉雪のように天から降り始めた金粉が、羽衣のように虹色に輝く法衣と、金色の法具を作り、ゆつたりと大岩の上に座した猿から、神々しい波動が放たれ始めた。

「が……ガネーシャ？ つてえと……たしかあの、ゾウの頭した神様つてことですか？」

入堂部長が、目を丸くして聞く。

次郎坊は象頭の聖天に変わつていく模を、睨み続けながら肯いた。

「ええ、そのガネーシャです。

ヒンドゥーでは破壊神シヴァの息子にしてシヴァ軍団の総帥。つまり、数ある天部の中でも最強クラスの神と言えるでしょう。障礙を司る悪神から転じて、障礙を除くものとして祀られてきましたが……しかし、実はそれ以外にも女性に淫慾を起させ、支配する強い力も持つのです」

「女性につ？ それじゃあ、圓野社長や白井女史達のこの状態は……まさか、女性全員……私と次郎坊様以外は、誰も使い物にならないってわけですか？」

「どうやらそのようです。

しかも、それだけではありますん。三天合形といって、この三柱の神は起源を一つにするものとして融合して祀られることがあります……つまり……」

「そうだ……荼吉尼天と弁財天、そして大聖歡喜天によつて『三天合形曼荼羅』を完成させ、オレ達の願いを叶えるのさ……」

やまい
?が横たわつたまま呟く。

「まだそんなことを言つてゐるのですか。あなたは、仲間の模に裏切られたんですよ?」

「仕方ねえつべ……お前らを生け贋に出来なかつた以上、納得して血を捧げる生け贋が他に必要だつたんだ……」

「では、あなたは最初から……死ぬ氣だつたのですか？！」

次郎坊は、驚いて聞き返した。

「それはアイツも……金石も同じぞ。

オレもアイツも、これ以上長く生きようなんぞ思ひぢやいねえ。

三天合形曼荼羅を完成させて、圓野組に……いや、人間どもに一泡吹かせられたらそれでよし。

それが、金石のヤツの願いなんだ。んだげんじ、オレは……違う

ずるつ

と、体を引きずるよ^リうにして^{やまく}、小山^が立ち上^がる。

「動かないで。出血がひどくなつて……あなた死ぬわよ？」

そう言つたあおいの方を見て、小山は田を丸くした。

「お嬢……あんた、正氣を失わぬのか？」

いぶきだけでなく、強力な神靈である脂粉仙娘とカヤノヒメまでも、うずくまつて行動不能に陥つてゐるにも関わらず、人間であるあおいがまともにしゃべれるというのはどういうことなのか？

「たしかにこの妙な波動……辛いけどね。正氣を失うつて何よ？
このへりこ……つー！」

座り込んでいたあおいが、ふらつきながら立ち上がつた。しかし、すぐによろめいて倒れそうになる。

それを横から次郎坊が支えた。

「無理をしてはいけません。あなたには経験のない感覚なだけで、波動の影響がない、というわけではないのですから」

「なるほど……お嬢、あんたまだ……」

小山が下卑た表情でにやり、と笑つた。

「なな……何よー? どう? うー? うー?」

「まあ、知る必要はねえべ。

歳の割にやあ、おぼこことは思つてたつけよ。そんなことより……

……オレはオレの目的を果たすだけだ」

そう言つと、小山は足を引きずりながら、大聖歡喜天・ガネーシヤと化しつつある金石が座している岩のある、ロックガーデンの方へ向かつた。

しかし、そのままガネーシヤへ向かつかと思ひきや、わずかに向を変えた小山がたどり着いたのは、池の畔に転がる丸い石のところだつた。

「よお! ……ガネーシヤ様! !

神靈と合一してゐる最中でお忙しいだらうナジよー。約束通り、この石、元さ戻しでやつちやくんねえか? !」

小山は、丸い石の前に跪いてガネーシヤに向かつて叫んだ。

すると、目を閉じて法悦境を漂つよつた表情だつたガネーシヤが、ふいつと片目を開け、めんべくもそうに右手を振つた。そこから放たれた赤い光の矢が、丸い石に当たる。

光に包まれた石は、ゆっくりと形を変え始めた。

「稻成さん……」

あおいが叫んだ。
石を包む光が消えた時、そこに横たわっていたのは、妖狐の本性を顯したままの葉子だったのだ。

「なるほど……殺生石……ですか」

次郎坊がつぶやく。
ダーキーと死闘を繰り広げ、力尽きた葉子は、石となつて身を守つていたのだ。

「葉子さん……」

「こんな田さ遭わせぢまつて……すまねえ。んだげんじ……」うでもしなげりや、オレの事なんか振り向いてくれながつただろ?」

小山は跪くと、氣を失つたままの葉子を抱き起こした。
小山の出血はひどく、葉子の白装束が見る見る赤く染まつていく。

「ガネーシャ様!!

最後の願いだ!! 葉子さんの心を、オレを向けでくれっ!!

罪もない少女を犠牲にし、
関係のない小学校を火の海にし、
七海の気持ちをも利用して、町を水浸しにし、
ついには自分の血までも捧げて剣呑な神を呼び出し…… そうまでして叶えたかった小山の願い……それは、稻成葉子の心を手に入れることだったのだ。

§23 犬神

§23 犬神

「な……なんで……？」

まさか小山さん……稻成さんの方が好きだったの？」

信じられなかつた。

あおいが知る限りにおいて、一人にそんな雰囲気は全く感じられなかつた。

しかも、そんなこと……たつた一人の女性の気持ちを手に入れる為だけに、これだけの事をやらかすなどとは、あおいの想像を越えていたからだ。

「ずっとだ。

ずっと、ずっと……好きだつた……何度も告白して、何度も振られだよ。妖と夫婦になる気はない……つてな。
でも、諦めきれながつたんだ」

それを聞いたあおいは、思わずため息をついた。

「ずっと」といつても、一体いつからなのか？ 葉子はもともとは、あおいの祖母きくもの屋敷に住み着いていた妖狐だつたが、そういう縁から一時期、事務職として圓野組で働いていた事もあるらしい。

知り合つとしたら、その時か。

「でも……あなたは？なんでしょう？ 関係性を操つて、自分を好きにさせる事だつて……出来るんじゅないの？」

たしかに？の術であれば、恋愛感情を自分に向ける事など容易いはずだ。

「そんな簡単なモンじゃねえんだよ……」

たとえ相手がただの人間だつたゞしたつて、そうつまぐ恋愛感情だけをこちらを向かつなんて事はできねえんだ。

こちらを信じて、全く無防備に任せでぐれりやあ別だがな。

無理に関係性を変えようとすれば、へタするど、相手の周りの人間との関係性までくつついで来ちまうんだ。

しがも、葉子さんはオレより格上のお狐様だぞ？ 隙なんぞ見せてぐれるわけねえべ

「無敵に見える？やまい能力も、ビツやら自由自在といつわけにはいかないらしい。

それはそうなのだろう。

もし、いつでも無制限に他人の関係性を付け替える事が出来るなら、世界の王にだつてなれる。今頃、世の中は？やまいに支配されていてもおかしくはない。

「んだげんど、女性の淫欲操る大聖歡喜天なら、女の心を誰かに向けるなんか朝飯前だつペ。だが、オレは金石達に協力したんだ。さあ早く！－ ガネーシヤ！－ 大聖歡喜天様つ！－」

急かすような小山の叫びに応じて、ガネーシヤがふたたび右手をふるつた。その手から放たれた青白い光の矢が、横たわる葉子に突き刺さりつとした、まさにその時。

「ぐがるうつつ！－」

突然。

獸の低い唸り声と共に、巨大な黒い影が飛び込んできて光の矢を弾いた。

「なな……なんだお前^めえつ……！」

「何？ あれって……犬神！？」

妖の名をあおいが叫ぶ。その獸の姿は、たしかにあおいの知っている犬神という妖怪に、よく似ていた。

だが、葉子を守るように立つて、ガネーシャを睨むその獸は、あおいの知る犬神よりも、全体にごつい感じで、まるでクマとオオカミを足したような姿をしていた。

鋭い眼光。

長く伸びた鋭い牙。

棍棒のように太い尻尾。

顔のまわりに派手な黒い模様が入り、長いかぎ爪の生えた四本の足先も真っ黒だ。

体全体は灰褐色の毛皮に包まれ、それが鈍く金色の光を放つている。

微妙な形態の違いはあるが、たしかに全体の姿形は犬神といつていい。

しかし。

（違う……この妖からは、憎悪や飢餓の暗い波動が感じられない）

普通、犬神とは、犬を生き埋めにして断食させ、その首をはねて殺し、その怨靈に陰界に存在する邪悪な想念を憑依させて人間が創り出す、式神の一種だ。

だが、どうやらこの戦いに加わるためだけに、ビルの外壁をよじ登つてきたとしか思えないこの妖獣からは、そうした邪法で創り出された妖怪が身に纏う、暗い想念の波動がまったく感じられなかつたのだ。

あおいは靈査能力の高い方ではないが、相手がこれだけ強力な妖怪を発する妖怪であれば、そのくらいは分かる。

「犬神さん！！ 敵はそのガネーシャよ！！ 私が弓で援護するから、攻撃して！！ あいつが戸惑つているうちにたたみ掛けるわよー！」

突然飛び込んできた見知らぬ犬神を、咄嗟に味方だと判断したあおいは連係攻撃をすることを決めた。どうあれ、このままでは勝てないのだ。この犬神を信じてみるしかない。

「ふむ。チャンスを逃してはいけませんね」

次郎坊も降魔の剣を振りかざして飛ぶ。

あおいは弓に矢をつがえ、ガネーシャを狙つた。

この矢には、相手に応じて木火土金水のうち、何らかの気を込められるはずだつたが、ほぼ無敵の神とされるガネーシャの弱点など、あおいには分からぬ。

とりあえず、もつとも破壊力のある火気を込めた矢を使う。

『ふあおおおおん』

耳をつんざくような象の吠え声。

あおいの放つた矢がガネーシャの額に突き刺さり、そこから炎が上がつたのだ。間髪入れずに続けざまに数本撃ち込む。

「危ない！！ 下がつていて下さい！！」

次郎坊が、あおいを目がけてガネーシャの放ってきた光弾を、寸前で辛うじて弾く。

「何があのうと、前に出ないと約束したはずですよー。」

「す……すみませんっ！…でも、稻成さんが……」

あおいは、弓を射かけながら倒れている葉子の側に行こうとしていたのだ。

葉子の倒れている場所は、ガネーシャのすぐそばだ。たしかにこのまま放つておいては、気を失つたまま戦いに巻き込まれてしまう。

「な……何しやがるっ！…」

あおいの後ろで？が悲鳴を上げた。

巨大な犬神が、あおいに襲いかかる？としていた？の首根っこに

噛みつき、容赦なく放り投げたのだ。

？は、楽に数mは飛んで、屋上の反対側に設置されていた水タンクに激突した。

薄い金属製の水タンクは簡単に変形し、クッショーンのように？の

巨体を受け止めると、周囲に水をまき散らした。

？は、タンクに頭を突っ込んだまま、失神したのか、そのまま動かなくなつた。

それを見たガネーシャが、犬神を目がけて連続して光弾を発射した。それを軽々としたフットワークで避けた犬神は、ガネーシャを正面に見て四肢を踏ん張ると、大きく口を開けた。

「「うるおおおおおおおおおおおおん……」

魂に響くような、鋭い吠え声が轟いた。

その瞬間、ガネーシャは大きく身震いして動きを止めた。それは逆に、あおいも、次郎坊も、そして入堂も、それまでとても敵わないと萎えかけていた気持ちが奮い起こされるのを感じた。

犬の吠え声というものは、それだけで退魔効果があるという。それが犬神の声ともなれば、強い靈気の波動で、聖氣を増幅させ邪気を祓う力となる。

ガネーシャの実相は神靈・大聖歡喜天といえども、今は、金石の恨みの念を取り込んだ、邪惡な暗黒神である。

魔を退かせる吠え声は、効果があつたようだ。

それにして、天部神の中でも最強クラスの大聖歡喜天を怯ませるとは、相当靈格の高い犬神であると言えた。

「心強い味方がやつて来たものですね。私も負けてはいられません！」

次郎坊がガネーシャの首に剣を叩きつけるように斬りつけた。

その背後から隙を見ては、あおいの矢が飛ぶ。

ガネーシャのピンク色の皮膚に、斬撃の跡が残り、立て続けに矢が突き刺さった。

犬神も背後から忍び寄つて、首筋に牙を突き立てる。

ふたたび大入道に変化し直した入堂部長は、経文を読み、ガネーシャの周辺に法力結界を張り巡らせていくようだ。

ガネーシャの負つた矢傷からも首筋からも、噴出してきたのは血

液ではなく、黒い光であった。

傷はゆっくりと再生しているようだが、攻撃数が再生力を明らか

に上回つてゐる。ガネーシャが苦痛に身悶えるたびに、傷口から漏れる光線のような不気味な闇が辺りに満ちていく。

戦いは一見、あおい達が優勢かに見えた。

しかし。

『身の程知らずの愚か者どもめ！』

ガネーシャと化した金石の声が響き渡ると、神靈憑依が始まつた時からずつと続いていた威圧的な波動が、急に何倍にも力を増した。それを正面から浴びて一瞬立ちすくんだ犬神に、長い象鼻が襲いかかる。

「ダメっ！ 逃げて！ ！」

あおいが叫ぶ間もなく、犬神は横殴りに弾き飛ばされた。

「さやんっ！」

壁面に叩きつけられ、悲鳴を上げて動かなくなつた犬神に、ガネーシャの手から、無数の青白い光の矢が放たれて突き刺さつていつた。もうもうと上がる湯気のようなものが、犬神の姿を覆い隠していく。

「犬神さん！ あ……さやあっ！」

倒れ伏した犬神を助けようと、近寄つていつたあおいが悲鳴を上げた。

正気を取り戻したサラス、ヴァティ……七海が、背後から長い尻尾を伸ばしてきていたのだ。しかし、あおいは首筋に寒いものを感じて辛うじて避けることが出来た。

振り向いたあおいは、女怪と化した七海を見てゾッとした。

ゴツゴツした肌。

ねじくれた角。

急に伸びた牙は唇を突き破り、そこから血が流れている。先ほどよりも、さらに禍々しさを増したその姿には、もうビックリも七海の面影は見あたらない。

しかし、それでいてその目は嫉妬に燃え、まだあおいだけを睨んでいる。ここまで変化しても、なお執拗にあおいを追い詰めようとしているのだ。

「くづくづく……これにはいけませんね……！」

次郎坊も、苦戦していた。

サラスヴァアティと同じように、急に力を取り戻したダーキーと切り結んでいるのだ。妖少女はいまや、鬼女と呼ぶのもはばかられるほどの、禍々しく巨大な獣人の姿に変化していた。

赤茶色の獣毛に覆われた巨体。

両手に生えた長い爪。

尖った耳と、胸まで届く長い舌。

しかし、人間の残滓を残したかのように、幼い少女の顔立ちだけは何故かそのままだ。

その少女の顔が、相変わらず張り付いたような笑みを浮かべながら、降魔の剣の斬撃を前足ではじき、攻撃を仕掛けてくるのだ。

ダーキーの力は、ガネーシャの加護を受けて格段に上昇しているようだ。

『よし……来い』

あおい達全員がダメージを受け、弱ってきたのを確認すると、ガネーシャはダーキーとサラスヴァアティに手を差し伸べた。

凶悪な姿の一人の女怪は、途端に、まるで少女のよつなあどけない笑みを浮かべると、ガネーシャの左右の手を取つた。

そのまま、三つの影は黒と金色の光に包まれ、ひとつになつていく。

「三天合形……成つてしましましたか…………」

傷ついた次郎坊が、降魔の剣を杖代わりにして立ち上がろうとしながら言ひ。

「ただでさえ……歯が立たなかつたのに…………」

その時。

「う……すまぬ。やられたわ…………」

カヤノヒメが目を覚ました。

だが、美しい女神だつた姿は人型でなくなり、まるで米俵のよう

に太短い、巨大な口を持つ蛇の姿になつてしまつている。

「やつて……おくれだのう…………」

しわがれた声。

脂粉仙娘も白髪で腰の曲がつた、老婆・白粉婆の姿になつていた。

「大丈夫ですか？ どうやら三天合形により、大聖歡喜天単体としての波動の影響は薄れたようですね」

「とはいえ、我々も力は使い果たしてしまつた上に、歡喜天の呪が完全に解けたわけではないからの。

女神の本性に立ち戻るのは難しいようじや。
しかも我らこの姿では、ろくに力が出せぬ……」

悔しそうに白粉婆が言つ。

「私も靈力を使い果たしました。さっきの犬神もガネーシャにやられてしまつたようです。もう、我々に有効な戦力はない……八方塞がり……ですね」

次郎坊が、諦めたようにため息をついた。

「もう後は……逃げを打つくらいしかないかも知れません。
しかし、ああなつては簡単に逃がしてくれるとも思えない……圓野君。私達がなんとか血路を開きますから、君だけでも、ここから逃げなさい」

次郎坊、入堂、野槌、白粉婆の四人はそれぞれに、あおいを後ろに庇うようにして三天合形を成し遂げつつある、ガネーシャに向かつて立つた。

§24 三天合一

§24 三天合一

「そんなことあつませんっ！」

次郎坊の言葉を遮つてあおいが言つ。

「まだ、座間君が帰つてきてない。
真菰専務も、戻つていない。

森さんも……稻成さんも目覚めていない。

……七海ちゃんだつて……取り戻していい……！」

あおいは、自分自身に言い聞かせるように言いながら、ふらつく
足を踏ん張つて立ち上がり、変化しつつあるガネーシャを睨み据え
た。

「私達は6人で一つの会社なんです。

彼等が帰つてきてくれれば、必ず何とかなります！ これまでだ
つて、6人で力を合わせて、あらゆる困難……偏見や、理不尽と戦
つてきたんです。

当社の理念は、勝手な理由で踏みにじられそうな命を、何が何で
も守る事。

相手が神様だらうと、悪魔だらうと、関係あるもんですか！――

あおいは「に矢をつがえ、三天合一」を果たして形を取つていく、
少し前までガネーシャだったものの頭部に狙いを定めた。

あおいがまさに矢を放とうとした、その時。

「よつ嘗ひつくれはつた」

夜空から声が降つてきた。

「つまり、何があらうと株式会社トープスは不滅……つちゅう」と
や

「く……座間君つ……」

あおいが見上げると、夜の闇に溶け込むようにして、鳥天狗姿の
座間が羽ばたいている。すでにその右手には抜き身の降魔の剣が、
左手には葉団扇が握られていた。

「あつしが仲間に入れてもらえてねえのは、少し、寂しいですがね」

それでもう一人、屋上の縁に立つ黒い影。

「後藤副社長つ……」

「お嬢。少し、下がつていてくださいえ。

あつしも長いこと生きてますから、ああいう手合いとは、何度か
やり合つた事がありやすが……相手が何者だろうと、ケンカの常道
は変わりやせん……」

そう言いながら、窮屈そうに着ていたスーツの上着を脱ぎ捨てた。

「ケンカは……」

座間は降魔の剣を青眼に構えて狙いを定めている。後藤は合掌して氣を溜めているようだ。

『先手必勝！』

座間と後藤、二人の声が重なった。

宙を飛んだ後藤の右拳が、もやもやした形を取りかけていた、三天合形神の頭部に突き刺さる。さらに、後藤を捕まえようと伸ばしてくるその腕を、左掌から発した虹色の光弾で弾き飛ばした。そして間髪入れずに、座間の斬撃がその腕を斬り落とす。

力尽きたあおい達を守るように三天合形神の前に立ちはだかった後藤の姿は、朱色の肌を持つ巨大な赤鬼へと変化していた。

そして座間と後藤は、たたみ掛けるように攻撃を加えていった。目にも止まらぬ座間の斬撃。

強烈な後藤の打撃と光弾。

並みの妖なら、一瞬にして消し飛びそうな連続攻撃である。

しかし、それでも黒い禍々しい光は衰えることなく、三柱の天部は一つの姿……三天合形神へと形を整えつつあった。

それはどうやら三面の神であるようだつた。

正面に象頭人身のガネーシャ。

左面に人面獣身のダーキー。

右面に人面蛇身のサラスヴァティ。

それだけならどこかで見たことのある、異教の神の姿といえるかも知れない。

しかし、その体表面には不規則に絡み合つた鱗と体毛、そして人間のようなピンク色の皮膚が入り乱れて、吐き氣を催すような不気味な模様を作っていた。

さらに、黒と金の入り混じった斑の体色。長さも太さもまちまちの、数十本の手と足。しかもその手足には、人の指や、獸爪や、蹄や鱗がでたらめに付いている。

そして、身に纏う禍々しい気配。

それは決して、神聖であるべきはずの神の姿ではあり得なかつた。

「いじで味方が来るとは思いませんでした。

現世最強クラスの鬼に、月ノ輪流を極めた鳥天狗ならば、じばら

くはある、三天合形神を食い止められるかも知れません…………。

しかし、相手は天部神が三体合わさつた存在です。まだまだ、戦力が足りませんね」

次郎坊があおいに向き直つた。

「あなたがさつき仰つた理念は、大変立派です。

しかし、このままではやはり、全員死ぬという未来を変える事は出来ません。あなたを信じて戦つ彼等を……いえ私達を、あなたも信じて下さい」

「師匠……何をするおつもりなのですか？」

「私に、一つだけ策があるのです。

決して分の良い賭けではありませんが……もし、あなたの言うようにトップスの6人が揃うことがあれば、逆転できる可能性です。ですから、あなたは、いぶきさんとあの妖狐……稻成さんを起こしてください。そして、伊園さんを助け出し、真菰さんもここに呼び出すのです。

私は、その間に切り札の準備をします

次郎坊はそう言つと、懐から取りだした汚い蓑を着込んだ。

すると、一瞬にしてあおい達には、次郎坊の姿が見えなくなつた。だが、決して姿を消したわけではなく、認識できなくなつただけなのだ。

これが『天狗の隠れ蓑』そう呼ばれる、伝説の道具である。周囲からの気の流れを完全に断つことで、その者の気配を感じられないようにし、周りからは見えども見えないようにする事が出来るのだ。しかし、周囲からの気を断つということは、妖怪や神靈にとつては息を止めている事に等しい。つまり、長く隠れ蓑を着続けていれば、大幅にエネルギーを消耗してしまうことになる。

「師匠…… お氣をつけて……」

あおいの言葉に、どこからともなく次郎坊の声が答える。

『LJの隠れ蓑のタイムリミットは十分ほどでしょう。準備にはそのくらいかかります。その間は姿を見せられませんから、自分の身は自分で守つて下さい』

その時、屋上の隅から、

ボリツボリツ。

と何かを噉り食べるような音が聞こえた。

「何？ あの音は……」

あおいがそちらを見ると、先ほどガネーシャに手ひどくやられたはずの犬神が、ぶるつと体を震わせながら、再び立ち上がつていた。

「犬神さん…… 無事だったのね！」

犬神は、あおいに軽く会釈するように頭を下げると、すっと移動して、横たわる葉子の側に立った。そして、気を失っている葉子の顔をじっと見つめ、その頬をぺろりと舐めた。

「……犬神さん？」

さつきも、まるで葉子を守るかのように現れた。
もしかして、葉子の知り合いなのだろうか？

が、あおいがそう思う間もなく、犬神は葉子に背を向けると、振り向きもせずに三天合形神へと飛びかかっていった。

その行動は不思議であったが、犬神のことばかり気にしているヒマはない。なんとか次郎坊が、切り札とやらを仕掛け終わるまでに、トープスの社員全員が揃わなくてはならないのだ。

「森主任！ 森さん！… 稲成さん！… 起きて…！」

あおいはいぶきと葉子の頬を叩いて目覚めさせようとした。

だが、一向に目覚める気配はない。

もしかすると、摸に何か術を掛けられているのかも知れない。考
えてみれば、夢を食い、夢を操る妖怪が摸なのだ。目覚めさせない
ようにする術を心得ていてもおかしくはない。

だがあおいの使える術は、周囲の気を凝縮させたり、散らしたり
して、まるで生き物のように操るだけであり、夢の世界、それも觀
念空間とかいう聞いたこともない概念を操る術に、対抗する術は持
たない。

「いつたい、どうしたら……」

「あおいちゃん。オレ達の能力で何とかできねえかな？」

あおいが途方に暮れていると、入堂が一つ田大入道の姿のままやつて來た。

「オレ達つて……見越入道、野槌、白粉婆の能力を使うの？」

「オレも自信はないんだけどさ……例えばオレの結界術も、精神攻撃みたいなモンだし、一応坊主だから、邪氣を祓うことも出来るからだ。

野槌と白粉婆の靈力を上乗せして、いっぺん、一人の心に呼びかけてみると、のはどうだうつ？」

「入堂。やつてみるなら急いでくれんかの？
あの三人の妖、今はええが、このままじゃとそれ長くは保たんじやうつ」

白粉婆の姿になり、しゃべり方まで老婆くさくなつたつた白井課長が言つ。

「いやでも、ちょっと待つてよ白井ちゃん。えーと……どうやつてやつたものか……」

入堂は印を結んだりほどいたりしながら、術をかけあぐねている様子である。

「ふつむ……見たところ、これは自分自身の心の殻に閉じこめられてこるようですね。強い精神結界を張つているようなもののようにす。」

野槌がいぶきの頭に手をかざしながら言つた。

先程までは完全に太短いヘビ状になっていたが、それではさすがにイヤなのか、今はわずかに顔に鱗が残るだけで、ほぼ完全な人型に戻っている。

「ほら、頭の周囲に見えない壁が出来ているわ」

「なるほど、精神結界かの。

結界なら、それ以上の力で破ればいいのじゃ。わしと野槌で、入堂の結界術が放つ氣を集めて、この矢に込めてやる。その矢尻で結界の壁を貫くように破つてみてはどうじや？」

「ううむ」

「まだ何があるのか、入堂？」

「いや、そういうまくいくかなあつて思つてね」

「かーつーー！」

本つ本当に面倒くさいヤツじゃなー。『うぢやうぢや言わずに、やらんか！ 貴様も男じやろうが！』

白粉婆の姿の白井は、人間型よりも言つ事がキツイ。

尻込みする入堂の尻を蹴つて叱りとばし、あおいの持つ矢を手に取ると、念を凝らして握つた。水氣を込めていた青い矢は、すうつと矢羽根も矢尻も白くなつた。

白粉婆の土氣で中和され、一コートラルな状態になつたのだ。

「よ……よおし」

入堂は白粉婆と野槌に向けて、先ほど小山を翻弄した、得意の催

眠術をかけ始めた。白粉婆は、白粉をボーリングの玉くらいの大きさの丸い形にして、そこで氣を吸収しているようだ。そこに野槌も手を添える。

見る見るうちに、白かつた玉が、不規則な虹色模様に変わった。あおいは先ほどの白い矢を、その玉に突き立てた。すると、一瞬にして、矢尻も矢羽根も玉と同じ不規則な虹色になった。

「と……とりあえず、うまくいったようですね」

よほど力を使ったのか、入堂は汗びつしょりだ。

「では……やりますっ！…」

あおいは、いぶきを包む精神結界に虹色の矢を突き立てた。

§25 黒幕の影

森いぶきは、夢の世界を彷徨つていた。

そこは、決して楽な世界ではなかつた。

白い世界。

周囲には何も見えない。

足元にはねばつく泥のような白い闇がわだかまり、いぶきの足を絡め取る。進んでも進んでも、周囲は白い闇に包まれているのだ。それならば、立ち止まつてしまえばよさそうなものだが、どうしても立ち止まることが出来ない。

(これは……夢だ)

いぶき自身も夢の世界だと認識していながら、目覚める事がどうしても出来ないのだ。

しかも、周囲すべてを包み込む白い闇は、光も影も輝きも形も音もなく、見つめ続けていると気が狂いそうになる。

そんな白い闇に、なにかの形が浮かび上がってきた。

目を凝らすと、それは一人の男、……40歳前後の間の姿であつた。

それが金石であり、正体は、妖怪・猿であることが、氣を失つていたはずのいぶきにも何故か分かつた。もしかすると、術を仕掛けた金石の心が取り込まれ、術を掛けられたいぶきに見えているかも知れなかつた。

その夢の中で金石は、必死で頭を下げている。相手は……圓野明徳だ。

『社長！お願いします。

私は、ここを出されたら行くところがないのです。私の故郷は既になく、人間に交わりすぎた私は、完全な妖怪にも戻れません。どんな仕事でもやりますから……お願いします！』

『馬鹿を言つた！

そもそも、妖怪が人のふりをして住んでいる事自体がおかしいのだ。先代が何を言ったのか知らないが、お前には、猿という妖怪を存在させ続けるという役割があるだろうが。

人としての楽な生活を知つてしまつてからでは、つらいかも知れんが、なんとか、妖怪に戻る事を考へろ。愚か者が！』

圓野組の社長、圓野明徳である。

金石は、可哀想なくらい何度も頭を下げて頼み込んでいたが、明徳は頑として受け付けない。

（妖怪が……人として生きること…………）

それが正しいのかどうか、いぶきには分からなかつた。

ただ、今のいぶきには人間としての生活以外は、考えられないのも事実だ。

（もし私が、社長にああいう風に言われたら……会社にいられなくなつたら……？）

考へるだに、恐ろしい。

自分が、あおいにとつて不必要な存在になつてしまつ」とは、自分がこの世にとつて不必要だと言われたに等しいと思つ。

(でも……)

一方でおそらく、明徳の言つてゐる事は正しい。

猿は夢の中に。

磯女は海に。

山姫は山にいるのが、本當であるし、もしかするとそこには、それぞれの大切な役割があるのでないか。

いふきは、そつも思つた。

すうつと一人の姿が白い闇に溶けて、見えなくなつた。

次に浮かび上がつてきたのは、金石ともう一人、いふきは見た事のない、サラリーマン風の男だ。

どうやら、カウンターのようなところで酒を飲んでゐらし。

『おやおやおや。

社長も酷い』とするよねえ。

今更妖怪に戻れ、なんて言われても、無理だよね。それに金石君みたいな優秀な社員をクビにするなんて、あの社長、どうかしてゐるよ』

『オレだけじやないんだ……小山も、矢間も、川瀬も、下里も……

先代の時から一緒だつた妖怪の社員は、ほとんど辞めさせられちまつたんだ』

『まったく、ひどいよねえ。

ねえ金石君、このままで済ます氣かい？ あの傲慢な社長に、我

々は鉄槌を降すべきじゃないのかねえ』

相手の男は、一見真剣に心配しているように見えるが、微妙に笑つた口元が、決して本気ではないと示している。

だが、切羽詰まつた金石には、それが分からぬ様子だ。

『オレは、今更人間に危害を加えようとは思わないよ。

それに能力だつて知れているし……社長は修行を積んだ密教僧でもあるだろ？ オレみたいな弱小妖怪なんかじや手も足も出ないだろうや……』

『何、情けないこと言つてるんだうねえ、金石君。君、そんなんだからリストラされちゃうんだよ』

『な……何だとつ……！』

男の言い草に頭に来たのか、金石が男の胸ぐらを掴んだ。ざわつと髪が逆立ち、貌の本性が見えそうになつてゐる。しかし、男はそれを知つてか知らずか、まったく動じないで言葉を続けた。

『僕を殴つても、なんにもならないと思つたどねえ……よおく考えてみなさいよ？』

金石君。たしかに、君一人ではそれほど大きな事は出来ないかも知れませんが、辞めさせられた皆さん全員がが組めば、かなりな事が出来ますよ？』

『組む？』

『そう！

君たちは同じ境遇の、言わば仲間じゃないのかねえ？ 一人一人

じゃあ弱くても、力を合わせればいいんだよ』

驚いたような顔の金石。

顔はへらへら笑いながらも、男の目は笑っていない。その目を見つめながら、金石の表情が真剣に変わつていった。

しかし、そこでもた、一人の姿が白い闇の中にフロードアウトしていく。

次に現れたのは、金石と同じくらいの年の、大柄な男。氣を失つていたいぶきは知らないが、?の小山の姿であった。

『いいか、小山。

お前の能力と、オレの能力を合わせて、あの社長に一泡吹かせりんだよ!』

『馬鹿な。天部神召還なんて、何を考えとるんだつべ。

そんたなことしたら、圓野組だげじゃねえ。この国が……いや、世界が破滅するがも知れねえんだつべ?』

『構わないさ。

どうせ、オレ達はこのままじゃ野垂れ死ぬだけだ。最期に一花咲かせるつてのも、別に悪かあないだろ?』

『……最期に……か。お前も、行き場がねえのはオレと同じだべな。分がつた。協力はする。んだげんぞ、オレの最期の望みは、お前とは違うんだ。それでもええんなら……』

『いいだろ?。同盟成立……だな。仲間を紹介しよう。

ほとんどが元同僚だから知っているだろうが、これまでに圓野明徳に排除された、そしてこの町で苦しんでいる妖怪達だ』

金石の後ろから現れたのは、10人ほどの男女であつた。30～60歳くらいと、かなり年齢層に幅がある。だが、共通しているのはくたびれ果てたような外見だけで、それぞれに特徴のある衣装を纏っている。

話の流れからすると、全員が妖怪であるのだろうが、一見しただけでは、誰が何の妖怪なのかは分からぬ。

『……こんなに仲間がいだのか？』

『曼荼羅を作るんだから、オレ達一人じや足りんだろう？　だが力ギとなるのは、オレとお前の能力だ。』

それと、この件の発案者は、この人だよ』

『な……なに……あんたは！』

最後にふらつと現れたのは、あのサラリーマン風の男だ。

『もちろん、お前も面識はあるだろ？』

この人にも野望があつてな。だが、この人はきちんと事が成るまでは、表には出ないと約束してくれた。うまくいけばオレ達は無敵だ。そうしたら先代の意志を継いで、新しい圓野組を始めるんだ』

得意そうな金石の姿は、また白い闇に呑まれていく。

(いけない……敵は一人だけじゃないんだ……早く……社長達に知らせなきや……)

だが、二つの間にか白い闇はいぶきの全身を絡め取り、身動き一つれない。

(「どう……したら……いいの?」)

その時、どこからいぶきを呼ぶ声がした。
いや、したような気がした。だが、喉にまで白い闇が詰まつてい
るようで、返事をしようにも、まったく声が出せない。

(ダメ……沈む……)

粘りつく白い、泥のよつた闇に、いぶきの意識が溶けよつとした
時。急に、ぐつと腕を掴まれた感覚があつた。
そして急に耳元でハツキリと声がした。

「田覚めよこぶき! これしきの術に屈してなんとすの?
それでも、お前は我が眷属か! ! !

「……和泉……御前」

それはたしかに、遠く離れた鷺田山中じこむはづの、山神である
いぶきの叔母、和泉御前の声であった。

ふと気がつくと、田の前の白い闇に真っ直ぐな切れ込みが入つて
いる。

その向こうは、黒い闇だ。

しかしその向こうにこそ、帰るべき場所があることをいぶきは知
つていた。

全身を絡め取っていた白い闇はもうない。体に満ちあふれる力を
感じた。

いぶきは躊躇わず、その黒い世界に飛び込んでいった。

「…………っせん……森さん……目を覚まして……」

「う…………うあ…………」

いぶきは、呻きながら覚醒した。

だが、すぐには意識がハツキリしない。かなりひどい頭痛がするのは、無理に金石の術を破つたせいだろうか。

「すみません。社長。もう……大丈夫です」

いぶきの声は途切れ途切れであつたが、目には強い意思の光が宿つており、すでに金石の術は完全に無効化されたことを示していた。

「戻つた！」

「おお！ では、次はあの妖狐の番じやな」

顔をのぞき込むあおいとは別に、聞き慣れない声の持ち主達が色々き立つている。

「なにかやるなら……は……早くして下さい。敵は……一人だけじゃない……もつと、たくさんいます」

「え？ 森さん、何言つているの？！」

あおいが怪訝そうに聞き返した時、急に周囲が明るくなつた。

「何なの、これは！？」

野槌が警戒して叫んだ。

これまでガネーシャが放つてきた金色の光とは違い、赤く揺らめく光は、まるでどこかで火事でも起きたかのようであった。

「だらしねえなあ、小山あ。お前、やられちまつたのかよー？」

見ると、壊れた水タンクにめり込んだ小山を、奇怪な姿をした者が助け出している。

その様子を、屋上の柵上に大きな炎が煌々と灯つて照らしているのだ。しかもその炎の中には、不気味な人の顔が浮かんでいる。

「呑めよ、小山。ヤカンヅル様の力水だぜえ！」

見ると、その男の顔にはヤカンの注ぎ口のような突起があり、その細長い口を小山に咥えさせて、何かを飲ませている様子だ。

「ぐ……う……すまねえ」

身體いしながら、毛むくじゃらの黒いやまいの姿となつた小山が立ち上がる。

「最後のツメで馬鹿やつて、しぐじつてんじやねえよ。

他の連中は、とつぐに全員配置を終えてるんだぜ？ お前もさつさと配置につけ」

「い……いや、それが、オレと対になつて配置されるはずの葉子さんが……」

「あの妖狐か？ 奪い返されちまつたのかよ。仕方ねえなあ……」

「予定外の敵が……妙な犬神が出たんだよ！ そりでなきや……」
んなへマするかよ」

「ヤカンヅル？」^{やまくじる}は、ヤカンヅルに怒りの目を向けた。

「傷の方は簡単には治せねえが、力だけはもう元に戻つただろ？
さつと奪い返して、配置につけよ」

涼しい顔で言い捨てるヤカンヅルは、ふわりと宙に浮かび、自分
の周囲に顔の浮かぶ炎をはべらせながら、そのまま宙をすたすた
と歩いて去っていく。

まるで、空中に見えない階段でもあるかのよつだ。

「あ……待ちなさいよあんた！ どこのへ行く気？」

あおいが叫ぶと、ヤカンヅルはこちらを見て不敵に微笑^{わらわ}った。

「おや？ お嬢じやないですか。

私のこと、覚えています？ 圓野組にいた矢間ですよ。
なあに、三天合形神だけじや曼荼羅は完成しないんでね。オレ達、
リストラ組全員で完成させることにしたんですよ。それには、全員
が神靈憑依しないとダメなもんでね。

「こんな風に」

そう言いながら。

ペロリ。

と、顔の皮をむくと、青黒い肌と赤い目、口から上下に牙^しが生え
た顔が現れた。

よく見ると、額には目が開き、手の数も六本に増えている、先程まで化けていた人間の姿からは遠くかけ離れてしまっている。すでに神靈憑依しているのだ。

「てめえ矢間！！ その姿、悪魔に魂でも売っちゃったのかよ！！」

その様子を戦いながら見ていたのか、後藤の声が響いた。戦鬼と化した後藤と、鳥天狗・座間、そして犬神は、必死で三天合形神に立ち向かっているが、どうやら分が悪いようだ。

向こうはろくに防御などしていないにも関わらず、こちらの攻撃がまったく効いた様子がない。

逆に、素早く動いているこちらにも、相手の攻撃はほとんど命中してはいない。が、攻撃を加える際にカウンター気味に放たれる黒い光が、じわじわと体力を削つていているようだ。

「これは副社長。」無沙汰しています。

なにやらそちらはお忙しそうですね。しかし、我々も再就職活動で忙しいので、これにて失礼させてもらいますよ？」

「再就職だよ？ ふざけやがって！！」

鬼と化した後藤が、巨大な象の鼻を両手で受け止めながら吼えた。

「お前ら、何を考えとんやつ！！ こんな事やつとつて、何か得でもするいうんか！！」

黒い光の攻撃を両手で弾きながら座間も叫ぶ。

「得？ まあ、再就職先が出来るのが一番の得かなあ……でも、まあそんなこと、これからくたばるあんた達には関係ないけどな」

「再就職……だと? まさか、他の土木業者にそそのかされたのか!?

「話はここまで……だつ!—」

青黒い怪物と化したヤカンヅルは、後藤めがけて口から炎を吐きかけた。

その炎を、座間の剣が受け止め、二つに切り裂く。だが、堪えきれずに一人ともはじけ飛んだ。

「じゃあな。ケケケケケ」

ふたたび空中を歩いて、ヤカンヅルが去っていく。

「 もやあつー！ 稲成さんー！」

あおいの声が響いた。
復活した小山^{やま}に、意識を失ったままの葉子^{やよい}がまた奪い返されてしまったのだ。

「 くく…… やつど、オレの物となるんだべ。葉子さん、葉子さん、
よつこわあん 」

完全に^{やま}の本性を顯し、顔までも醜い毛むくじや^らになった小山^{やま}が、純白の衣をまとい、妖狐の正体を見せてもなお美しい葉子^{やよい}に、舌なめずりをせんばかりの表情で迫る姿は、赤々とした妖火に照らし出されて、なおいつそう妖しい雰囲気を醸し出している。

「 リリ…… リの位置だな…… 」

?^{やま}は葉子^{やよい}を抱いたまま、屋上^{やま}の端にあつた、小さな台状のコンク^{やま}リート^{やま}の上に立つた。

「 やまに来いー！ 神靈の氣よー来いー！」

言いながら、三天合形神^{さん}とその手を伸ばす。

次の瞬間。

何の前触れもなく、地から立ち上るよつた青い稻妻^{やま}が、葉子^{やよい}を

撃つた。

歓喜に満ちた表情で叫ぶ？の額からは、一本の巨大な角が生え始めていた。

稻妻に撃たれて変化の始まつた?の肉体は膨れ上がりながら、見る見るうちにこれまでとは似ても似つかない姿に変貌していった。筋肉がもとの数倍に盛り上がり、黒かつた剛毛は、真つ赤に変わつていく。

「が、おみ出す説、一才。

額に開く第三の用

頭からは、ねじくれた一本の角が生え、顔の皮膚は肥大化して醜くたるんでいく。

一本足で立ち上がつた?は、ゴリラのよひに胸を打ち鳴らすと、歓喜とも悲しみともつかない叫び声を夜空に発した。

「敵が増えちゃつたわね」

弓を手にしたあおいが呆然と呟く。

三天合形神だけでも手に余っていたのに、この上、？まで神靈憑やまい依してしまつては、とても勝ち目はなさそうだ。

先ほど消えたヤカンツルの言葉からして 他にも商はし
しかも るようだ。

「葉子はー? 葉子はどうなつたの?」

いぶきが言つ。

見ると、稻妻を受けたはずの葉子には、何の変化も起きていない

ようだ。^{やまこ}？は自分と葉子が対の天部神になるよつなことを言つてい
たが、神靈憑依しなかつたのだろうか？

怪物化した^{やまこ}？も、おかしいと思つたのか腕の中の葉子に顔を近づ
けた。

その時。

「ぐきやあつ……」

悲鳴^{やまこ}が上がつた。

？の背中に黒い影^{やまこ}が飛びかかつたのだ。

「犬神さん……！」

飛びかかつたのは、先程まで三天合形神を座間達と共に攻めてい
た、犬神であつた。

やはり葉子を救いに来たのだ。

しかし、三天合形神ほどではないにせよ、神靈憑依した^{やまこ}？も強い。
すぐに反撃に出て犬神を両手で追い回す。素早い犬神は攻撃は喰ら
わないが、犬神の攻撃もさほど効いた様子はない。

「私も……行きます」

いぶきが立ち上がる。

「森さん、無理しちゃダメよー！」

あおいが心配^{ひき}つに囁^{ささ}つ。

「いえ。こまんまじや、みんな勝てない。それに、これじゃ私、
いじこむしじゃないですか」

いぶきは、あおいの田をじつと見つめた。

鳶色の瞳の奥には、いきなりつつかけて返り討ちにあつた悔しさがにじみ、その失敗を払拭するために戦いたいという、強い意志が見て取れた。

「援護するわ」

「お願いします」

寸時見つめ合つた二人は、短く言葉を交わすと素早く左右に散つた。

あおいは、やまの正面に。

いぶきは後方に。

素早い犬神に気を取られているやまは、一人の動きに気づいてない。

「和泉御前様……ほんのしばらくだけ、お力を貸し下さい」

いぶきはそうつぶやくと、両手で印を組み口の中で何かを唱え始めた。

途端に、屋上に植えられていた植物たちに異変が起きた。

すべての植物が、あり得ない早さで成長し始めたのだ。

カエデも、サツキも、それ以外の木々も、シバやハナショウブまでもが、瞬く間に伸びて、いぶきのもとへ集まっていく。

それらは、いぶきの体にまとわりついていき……あつという間に、いぶきは草木の鎧を身につけていった。鎧は、筋肉のように膨らみ

……現れたのは、本来のいぶきの身長を数倍したような、緑色の巨人であった。

神靈憑依した？と、ちょうど同じくらいの大きさだ。
手に持つた大槌も、体に合わせて巨大化している。
それを振りかぶつたいぶきは、犬神を振りほどくとしている。
の頭部に真横から一撃を加えた。

「ぐぎいっ！！」

悲鳴を上げて？がよろめく。

しかし、神靈憑依しているせいか、渾身の一撃でも倒れようとは
しない。

「森さんっ！下がつて！！」

あおいは叫ぶと、火氣を込めた矢を？に射かけた。

？の顔面から炎が上がる。しぶとい？もようやく動きを止め、両
手で火矢を払つている。

「今よ！ 犬神さんっ！ 稲成さんを！！」

膝を突いた？の足元から、犬神が葉子を救い出した。

これで、葉子を田覚めさせれば味方が増えるはずだ。しかも、葉
子を組み込んだ別尊曼荼羅とやらは、少なくとも完成しないはずだ。

「やつたぞ」

「早く！」ちらりへ！」

結界破りの矢を持って、入堂達が叫ぶ。

葉子の体を咥えた犬神が、電光のじとき速で入堂の田の前に立
つた。

そして、そつと地面に降りそつとしゃがんだ時。

「「ほあつーー。」

犬神の口から、大量の血があふれ出した。葉子の体が、犬神の口から滑り落ちる。

「ど……どうしたんだ。こいつ？ おい、しつかりしろ！」

「しつかりせよー。犬神殿！ー。」

入堂達は口々に犬神を励ますが、氣を失っている葉子の上に大きな頭を預けたまま、犬神は立ち上がれない。
？の血に染んだ葉子の白装束が、今また、犬神の血で染んでいく。そして犬神の目の光が急速に失われ、うつろになっていった。

「現れた時から最前線で戦い、一番傷ついていたからの。これは……助かるまい」

犬神の上に右手をかざして、野槌が言った。

「そんな……」

「」を持つて駆け寄つてきたあおいも、言葉がない。
その時、いぶきの声が上がった。

「社長！ー。また？がそちらへーー。」

執念であろうか、

？は重傷を負つて立ち上がらないまま、葉子に毛むくじゅらの手を

伸ばし、にじり寄つてくる。いぶきは座間たちの防ぎきれない三天合形神の攻撃を、大槌でいなすので精一杯だ。

すると、すでに息絶えたかと思われていた犬神が、うつろな瞳のまま、突然すつと立ち上がつた。

そして振り向きざまに飛び上がると、最後の力を振り絞つたように？の喉笛に食らいつく。？は悲鳴を上げながら、胸元にぶら下がつた犬神の体をめちゃくちゃに殴つた。

その時あおいは、犬神の倒れていた場所に、一個の丸い物がある事に気づいた。

拾い上げると、血まみれのそれは……

「いや…………これって…………梨？」

テニスボール大の小さな梨である。

あおいには見覚えのある……いや、忘れられない小さな梨。

「たんたんころりん様っ！？」

「…………うむ」

小さな梨に人の顔が浮かび上がり、聞き覚えのある優しい声が響いた。

「黙つていて、済まぬ。どうしても、あやつが知られたくない。と言つものだから、な」

「じゃあ……じゃあ、あの犬神さんは……」

「あの小さな体で……残つていたほとんどの梨を食いおつた。拙者が一年掛けて溜めた自然の気じや。」

犬族だからこそ、保つておるが……普通の小妖なら、消し飛んでおるだらう」

あおいは改めて犬神を見た。
何故、気づかなかつたのか。

足だけが黒い。

顔に隈取りのような黒。

背中の灰褐色。

全体の姿は変わつていても、そんな特徴のあるイヌ科の獸は他にはいない。

「豆田さんつ……！」

あの時、鳥天狗の座間ですら、たつた一個の梨で金色の姿に変化し、凄まじい力を發揮したのだ。

十数個は残つていたはずのたんたんこりりんの梨を、もともと手の平サイズの豆狸一体が食べたらどうなるとこゝうのか……。

あおいの叫びは届いたのかどうか分からぬ。

やまいの喉笛に食い込んだ牙を抜こうとせず、そのままボロ雑巾のようになつた犬神……豆田は、すでにぴくりとも動かない。

「馬鹿だねえ……！」

見つめるあおいの横に、ふらつと葉子が並んだ。

いつの間にか、入堂が葉子の精神結界を破つたのだらう。

「稻成さんつ……！ 豆田さんが……！ 豆田さんがつ……！」

叫ぶあおいには答へず、葉子は、ふらふらと歩き出した。

そしてそのまま、両腕を広げる？の懐深くへと、歩み寄つていった。

「おおお……おおお、葉子さん……つここ……つここ……オレの物になつでくれるのが……」

？は、感に堪えない様子で、悦びの唸り声を発しながら、葉子を抱きしめた。

「そんな……稻成さん……？」

あおいが、絶望の嘆息を漏らす。

既に稻妻を浴びた葉子は、天部神の暗黒面に神靈憑依されてしまつたのだろうか。？の腕の中の葉子は、まるで恋人に囁くよつた話し始めた。

「小山あ……あんたわ……そんなに、あたしの」と、好きだったんだ？

「そ……そつだとも！ 以前、お前は妖怪と一緒になる気はないと
言つて、オレを振つた。

だが見る、この体を。

神靈と合一して、オレは妖怪を越えたんだ。

今やお前と対になつて、大聖歡喜天の別尊曼荼羅を構成する天部神様だ。

これなら、認めてくれるだろ？？」

「あんた……あの時をあ……あたしの為なら、死ねる……つて
そう言つたよねえ？」

やつ、艶めかしく囁きながら葉子は？の両腕にそっと自分の手を滑らせた。

葉子の手の感触に由を細めながら満足そうだ。

「おむ……あの時の言葉を覚えていてくれたのか？」

やつとも。オレはお前のためなら、いつでも命を捨てられる……

「でも……あなた、まだ生きてるよねえ？」

「な……何？」

「神靈だかなんだか知らないけどさあ……

依り代なんかのために、小さな女の子を死なせ……

七海ちゃんの純粋な女心につけ込んで、惑わせ……

強い者にすり寄つて、自分の欲望の為に他人の心を操るつとする

……

それのどじが……命がけなんだい？」

「葉子……おまえ……」

「気安く呼ぶんじゃ……なによつ……」

葉子は？の太い両腕に添えられた掌から、自身の体内にため込んだ火氣を、一気に解き放つた。

「つぎやわあつ……」

意思のある蛇のよう？の両腕に巻き付いた青白い炎は、肩口まで登ると数mの火柱になった。

そしてそのまま顔面を焼きぬくす。

？は思わず焼けた両手で顔を押さえて悶えた。両腕の炎が燃え移り、さらに顔面が燃え上がる。

葉子はいまだに？の喉笛にしつかりと噛みついたまま、ぐつたりぶら下がっていた犬神姿の豆田を抱きかかえると、あおい達の元へ飛び退つた。

「稻成さんつ……」

あおいの歎声が上がる。

「「Jのバカを頼むよ…………」

葉子は、抱きかかえた巨大な犬神の体を、あおいの前にそつと横たえた。

「「J……「Jのアマあつ……」

その時、上半身を焼かれて怒り狂つた？が、葉子の背中から襲いかかつた。

炎で体毛をほとんど焼かれ、神靈憑依で変形した、異形の顎あごとが葉子に迫る。

しかしその攻撃は、葉子には届かなかつた。

「「J……「Jみな……バガな…………」

動きを止めた？の体を、五本の尾があらゆる方向から貫いていたのだ。

葉子の五尾は金色に輝き、？の傷口からは血ではなく、ガネーシヤと同じ黒い光が漏れている。

「ほんとに命を賭ける男つてのはねえ……」

振り向いてもらえるかどうかなんか一の次で……

好きな相手を守るためにだったら、一度と元に戻れる保証なんか無くっても、どんな無茶しても力を手に入れてさ……
勝てる可能性なんか関係なく、どんなでかい敵にでも立ち向かつて……

やめい
? に顔を向けたまま葉子が叫ぶ。

やしてあるで、一慶との姿を見たくないとしても、いかのよい元やまのまゝ、五つの尾で？を切り刻んでいく。

音を立てて転がつた。

雪が溶けるように、変化が解けていつた後には、何のものとも分からぬ茶色い毛に覆われた小さな肉塊が散乱しているだけであつた。

§27 辰狐王

「稻成さん……あなた、周囲の状況が分かつてたの？」

「殺生石は、あたし達妖狐の休眠形態ですからね。外の様子が見えなくなるわけじゃない。何があつたかは、全部……分かつてますよ。あたしが勝手に先走つてしまつて、ご迷惑をおかけしました」

葉子は、あおいに頭を下げた。

「いいえ。それも私を守るためだつたんですよね？」この事件に圓野組が関係していることを、知らせないために……」

「相手がただの妖狐じゃなくダーキーだと分かつていれば、一人で行つたりはしなかつたんですけどね……本当にすみませんでした……」

「でも……どうして一田である犬神が豆田さんだつて……私達も最初は気づかなかつたのに……」

横たわる犬神……豆田の前に跪いた葉子は、その顔を愛おしそうに撫でながら言つた。

「最初にやつて來た時から、あたしには分かつていましたよ。いつも馬鹿なことするヤツは、コイツしかいないってね」

葉子の頬を涙が伝う。

犬神の意識は既に無く、かすかに笛のような呼吸音が聞こえるだけだ。

「あたしが、もつと早く目覚めてさえいれば……いえ、そもそもあんなヤツに負けさえしなければ、あんたをこんな目に遭わせなくても済んだのにね……」

「豆田君……あれほど怖がっていたのに……なんで……」

上司である入堂も、豆田がこのような行動に出るとは予想外だつたのだろう。倒れ伏す犬神の傍らに、呆然と佇んでいる。

「入堂さん……申し訳ありませんが、この人を手当としてやつてくれませんか？」

葉子は入堂の前に正座すると、両手を突いて頭を下げた。

「私は、あの化け物を片付けなくちゃいけない。アレを退治しないことには、私達も助からないし……なにより、この人の頑張りが無駄になってしまいますから」

「わかった稻成さん。

豆田君は私の大事な部下でもあるんだ。なんとか手当としてみよう。ここにいる野槌と白粉婆も、気を分けてくれると思う。だが……助かる見込みは……」

「分かつて……います。それでも……お願いします」

葉子はさりに重ねて頭を下げる、すっと立ち上がりて三日合形

神へと顔を向けた。座間と後藤、いぶきの三人は、なんとか奮闘しているがますます分が悪い。

見ているうちに、座間が斬りつけた降魔の剣を跳ね返され、背中から屋上の壁に叩きつけられた。さらに三天合形神の長い鼻が真っ直ぐに襲いかかる。

そこへ突然、真っ赤な炎が壁となつて立ちふさがり、座間を完全に覆い隠した。

『ふああおおおおん！…』

長い鼻は目標を見失つた上に、炎で焼かれてのたうつた。巨象の雄叫びとよく似たあのガネーシャの声が再び駆ける。

三天合形神は奇怪な形状の数本の手で、炎を消そうと足搔いた。しかし炎はまったく消える様子を見せず、上半身を火柱が包み込んだ。発する熱気が屋上全体を包むかのような威力の炎だ。

「へえ。ゾウの照り焼きつてのも、悪かあないようだね！」

葉子は、挑発的な口調で叫ぶと三天合形神の前に立ちはだかつた。

「す、い！… 何よあの、葉子さんの炎の威力！…」

あおいは、初めて見る種類の炎に圧倒されて叫んだ。

「もしかして、葉子さん……神靈憑依できていたの？」

「あたしは、邪悪な妖狐だからねえ……神様の力を借りるなんて本意じゃないんだけどさ……連れ合いが犬神様になつちまつたんなら、あたしも多少は格を上げないと、釣り合いがとれないってもんさ！」

そう言つと、葉子は大きく息を吸い、全身から真つ赤な炎を吹き出した。燃え上る炎が形を取つていき、元の葉子の一回りほど大きな姿に変わつていく。

全身を覆う、雪のように真つ白な毛並み。

鮮やかな朱色の混じつた、金色のたてがみ。

背中からは、鮮やかな金色の羽が生えている。

手には、美しく輝く宝玉と錫杖。

憤怒の形相を刻んだ口元には鋭い牙が見えている。

だが、強い意志の光を宿したその瞳は、たしかに葉子のものだ。

「辰狐王……」

野槌が、葉子の姿を呆然と見つめながら言った。

「しんじおう?」

あおいは初めて聞く神の名前だ。

それを聞いた白粉婆が、呆れたように教えてくれる。

「おぬし、辰狐王を知らぬのか?

それこそが茶吉尼天の本地じやよ。じゃが、あそこにダーキーが取り込まれているのに、こちらにも茶吉尼天が姿を現されるとのは……」

同じ神が、邪悪な暗黒面とその反対である聖なる面、その二つの姿を持つて同じ場所に顕現しているのだ。

しかも皮肉なことに暗黒面が顕現しているのは、本来善狐たる茶吉尼の神使であり、聖なる面が顕現しているのは邪悪な妖狐であるはずの、葉子である。

長く生きてきた白粉婆も、このような状況に遭遇するのは初めてであった。

その時、入堂の手の中で犬神の頭が動いた。

「ふ……部長……」

「豆田君つーー！ 気がついたのか？」

「すみません……」んな……」迷惑をおかけ……して」

巨大な犬神の口から、あの頬りなさげな豆田の声が漏れてくる。その声のか細さに、入堂は思わず涙ぐんだ。

「馬鹿を言つた。君がその姿で来てくれなかつたら、我々は早々に敗北していくよ」

「そう言つていただけると……あの……葉子さん……は？」

「そうだ。ほら見えるか豆田君ーー！ あの女神がそうだ。君が愛した女性だよ。

君のおかげで蘇つたんだぞ？」

入堂は犬神の大きな頭を抱え上げると、辰狐王の姿となつた葉子の方へ向けた。

「ああ……見えます……やつぱり……よひにせんは……きれ……い

……」

「豆田君？ 豆田君つーー！ しつかりしるーー！」

再び意識を失った犬神の体をゆすりながら、入堂は豆田の名を呼び続けた。

辰狐王となつた葉子は、手に持つた宝玉から真つ赤な光弾を放ちながら、錫杖で三面合形神へと打ちかかつていつた。

だが、相手は三柱もの神が合一した超神である。これまでよりはかなり分が良くな見えるが、形勢逆転とまではいかない。葉子の攻撃は効いているようだが、相手の攻撃も葉子に効いている。それどころか三天合形神の放つ光の流れ弾が、豆田を介抱している入堂達のすぐ近くまで飛んできた。床面のコンクリートが割れて、破片が飛び散る。

あおいは入堂の側へ駆け寄ると、刀を剣のよつこふるつて、なんとか光弾の直撃を防いだ。

その時。

またも三天合形神の腕に弾き飛ばされた座間が、あおいの側に転がってきた。続けて襲つてくる光弾を葉団扇で防ぎながら、座間はあおいに叫んだ。

「しゃ……社長……なんで……なんで伊園さんがアイツに合体しとるんですの！？」

「あ……ごめん座間君。説明……してなかつたわね。つていうか、理由は私達にも分かんないの。でも、たぶん^{そこか}やまと僕が催眠術が何かで、七海ちゃんを唆したんだと思うんだけど……」

「そんなんで済みますかいな！！ オレ、伊園さん相手に本氣で戦えまへんで！！」

座間は降魔の剣を杖にして立ち上がりながら、あおいに食つてかかつた。

「で……でも、座間君？ ビーフしてアレに伊園さんが取り込まれているつて分かったの？」

あおいの疑問ももつともだ。今の三天合形神の姿は、七海の面影どこいか、見ただけでは原型が何だつたのかさえ分からぬほど変容してしまつてゐる。

「それが修行の成果ですんや。オレ、妖怪や生き物の本質やら、憑依しとるあらゆるモノが見えるようになつたんですわ」

「見えてるんなら、助け出せないの！？」

「いや……簡単には出来まへん。ちょっと見ただけでも、あの化け物、何種類もの魂や靈魂、妖怪なんかが融合してますんや。しかもああ激しく動かれると、切り離す太刀筋も見えまへんし……」

するとその時。

「動き……止めればいいのね！？」

葉子が戦いながら、耳ぞとく聞きつけて座間に言ひ。

「え……？ そりやまあ……止まつたら、太刀筋は見えるかもしだまへんけど、切り離せるかどうかは……」

「つたぐー！ 大の男が、そんな自信のないことでどうかねつてのー！ やるのかやらないのか、どっちなんだい！ー！」

「や……やりますー！」

女神の姿の葉子に厳しく叱咤され、座間は思わず姿勢を正して返事をした。

「よおし。あたしに任せな。

いいかい？ 今から十五秒後に、でかいのを一発かます。そうしたら、たぶんヤツは数秒間は動きを止める。だから、その隙を利用して七海ちゃんを助け出すんだよ！？ いいね？」

そう言つと葉子は、座間の返事も聞かずに両手を前に出して、術の体勢に入った。背中に生えた金色の羽が急に黒く変色し始めた。それと同時に、周囲の温度が一、二度下がったよつて感じられる。どうやら、周囲の気を翼から吸収しているようだ。

手に持つ赤い宝珠は、胸の辺りでさうに輝きを増し、青白い色に変わつて眩しいくらいに光り始めた。

三天合形神は警戒したのか、動きを止めた葉子に集中的に光弾の雨を降らせるが、葉子は無防備なまま全身に光弾をいくつも浴びながら、術の体勢を崩そつとはしない。

「え……ちよ……」

心の準備が、と言い掛けた座間はその言葉を呑み込んだ。目の前に立つ葉子の覚悟を見て、そんなことが言えるはずがない。

それに、後藤も、いぶきも、後方のあおい達も、長引く戦いで疲弊しきつていい。何より、三天合形神に捕らえられた七海の魂は、苦痛に悲鳴を上げてこようとして座間には見えていいのだ。

（それに……こんな場面で弱音を吐いとつたら……もし負けて死んだとしても、師匠にも、ヒメコにも、あの世で顔向け出来へん！…）

そう思いながら剣を構えて、三天台形神を睨んでいると、あおいが座間のそばへやって来た。

「座間君……これ……」

あおいが手渡したのは、たんたんころりんの梨であった。べつとりと豆田の血が付いている上、たんたんころりんの顔が浮き出ている。その梨に浮かんだ顔が座間に話しかけた。

「座間殿。また拙者を食つてくれんか。

今が二二一一番、やらねばならぬ時なのじやうへ、せひとも拙者に手伝わせてくれ」

「たんたんころりん様。喜んで」

座間は迷わず答えた。

あおいから受け取った梨を、丸いと一口で頬張る。かみ砕くと、相変わらず甘さよりも酸っぱさの勝る果汁に、豆田の血の味も混じつっていた。が、覚悟を決めて一気に飲み込む。

そして、黙つて降魔の剣を青眼に構えると、気が満ちるのを待つた。

ケルピーと戦った時と同じように、座間の身体の中心から、力が満ちあふれてきた。梨に蓄えられた自然界の気が、はち切れそうなほど座間の体内に満ちてきているのだ。

ほどなくして座間の全身が、満ちた氣によってあの時のよつに金色に輝き始めた。

たつた一個であるのに、後から後からあふれ出すほどの気が満ちてくるのだ。よくもこんなものを十数個も……そう思いながら、豆田の覚悟と思いの深さを、座間はあらためて実感していた。

気を高めた座間は、三天合形神をあらためて見つめた。

正面に人肌をした片キバの象の顔。向かって右に牙をむく野干の顔。そして左にゴツゴツした鱗を持つ女怪の顔……それが変貌した七海だ。

その体表面は、モザイク状に鱗と獸毛と人肌に覆われ、四方八方に脈絡無く飛び出した、形状も大きさもまちまちな四肢が休みなく黒い光弾を放っている。

しかし、その実相を見つめると中心には矮小な人間の男の靈魂が見えてきた。その男から出た欲望の鎖が、二人の少女の心を縛り付けているのが見える。男の靈魂は大きな茶褐色の獸に憑依し、その後ろには、さらに大きな金色の象形をした神靈の影が見えた。

（「コイツ……猿やと聞いとつたけど……依り代は獸でも、もともとの本質は人間の靈なんやな。そやけど……どうする？」）

七海を三天合形神から助け出すには、三柱の神を分離するだけではダメだ。

七海だけを切り離す必要がある。が、七海の磯女としての本質はどうやら少女の心であるようなのだ。依り代であると聞いていたウミヘビの存在は、小さすぎるのかどこにも見えない。あくまで本質として浮かび上がっているのは、欲望の鎖に縛られた少女の心なのだ。

そしてその周りに何十、何百もの女性の怨念が渦巻いていて、しかもそこにからみつくように、様々な色あいの魂や記憶らしきものも見える。

（たぶん……あの不思議な色の記憶や魂は、人間として暮らし始めた、最近の記憶や関係性なんや。おそらく森先輩が伊園さんに付け加えた、家族や仕事の関係性……オレ達との記憶もそこにあるんやろ。

あの中から伊園さんの本質……少女の心だけを切り離すのは簡単や……せやけど……）

それはつまり、七海が磯女でなくなるだけでなく、伊園七海ですらなくなることを意味していた。だが、たくさんの女の怨念に縛られたまま存在し続けることが、果たして七海にとつて幸せなのだろうか？

しかも怨念同士は絡み合い、七海の本質は複雑な様相を見せていた。

もし、切り離す太刀筋を見誤れば……七海は存在自体出来なくなってしまうかも知れない……決断の瞬間が迫る中、座間はまだ迷い続けていた。

後藤といぶきは、葉子が何かやううとしていることに気づき、葉子の前に立ちはだかつて、黒い光弾を代わりに受け止め始めた。後藤は、筋肉の盛り上がった両腕を顔の前に出して防御している。

しかし、強靭な鬼の身体といえども神の力には敵わないのか、光弾の当たった部分から次第に黒く変色していく。大槌をふるつて光弾を弾いているいぶきも、その身体を包む植物の鎧から破片が飛び散り、ところどころ燃え上がり始めた。

「いぶき……後藤さん……助かったわ！　あと、一秒したらそこから退いて……」

葉子は叫ぶと同時に、ついに真っ白な光を放ち始めた宝珠を両手で捧げ持つと、真っ直ぐに三天合形神へと向けた。

次の瞬間、宝珠から音もなく白い炎の蛇が何本も放たれた。

その炎の蛇たちは、あたかも生きているかのように、あるものは地を這い、あるものは空中に弧を描き、またあるものは空中を蛇行しながら、高速で進んでいく。

放たれた瞬間は細い糸のように見えた蛇は、目標に達するまでに急激に太さを増していった。

周囲にまき散らす高熱の余韻が、それがただの炎の蛇ではなく、ほんの少し触れただけでも致命的なものだと教えていた。蛇がその場へ達する寸前に、間一髪でいぶきと後藤は^{あきと}飛び退いた。

炎の蛇は三天合形神の元へ達すると、その顎で十数本の異形の手足に噛みつき、その動きを止めた。噛みついた場所から黒煙と赤い炎が上がり、異形の神はこの戦いで初めて、声にならない悲鳴を発した。

「今よ！… 座間君！…」

暴れようとする三天合形神の動きを、炎の蛇を操つて必死でねじ伏せながら、葉子が叫ぶ。おそらくは今の葉子の最強の術なのだろう。

だが、その威力を持つてしても、それほど長くは保たないと葉子は分かっているのだ。

「えい、いっつ！…」

座間は、間髪入れずに降魔の剣を振るう。

そして剣を抜き放つその一瞬に、迷いを断ち切っていた。

（オレが助けたいのは、あの、伊園さんなんや）

座間の脳裏に、はにかんだように微笑む七海の顔が浮かぶ。

思えば、たしかに出会った頃から七海は、少女の純粋さと可憐さを持ち合わせていたのだと思う。しかし磯女であるその魂の中には、元々たくさんの女性の怨念もまた含まれていたはずだ。

もしかするとそのせいで、つらく、寂しい思いを続けてきたのかも知れない。

だが、少なくともトープスに来てからは寂しい思いはさせていないつもだし、自分達が居る以上、これからもそんな思いは絶対にさせない。言わば、怨念の主である女性達もまた、座間達の仲間であるのだと、そう思った。

邪悪な妖怪だった過去も、温かい仲間を手に入れた現在も、それもこれも、すべてひつくるめて七海であるはずだ。

それが、自分達の仲間である伊園七海だからだ。

様々な魂や思念、感情、天部神の意思、靈力、物質化した肉体、その他何だか分からぬものが複雑に入り組んだ、三天合形神を作るモノ。

それと磯女である伊園七海の部分を、座間は正確に切り離した。途端に三面のうちの一つ、青黒い鱗で覆われた女怪の顔が穢やかになり、見る見るうちに表面が滑らかになっていく。人間の女性の上半身が浮かび上がって来たかと思うと、下半身が蛇のままの七海が現れ、ゆつくりと下に落下した。

『ぐほおおおおおん』

三天合形神は、地の底から響くような低い雄叫びを上げて揺らいだ。

天部神に限らず、神靈も妖怪も依り代がなくては現世に存在してはいられない。無理矢理に憑依を解かれたサラスヴァティが、他の二神と依り代を奪い合いし始めたのだろう。

「 もつ……こつちゅう…… 」

七海を左腕に抱き留めた座間は、片手で降魔の剣をもつ一閃させた。

今度は右のダーキーから、少女……牧村美紀の靈を分離するのだ。七海と違い、余計な憑依靈や過去の少ない少女を切り離すのは比較的簡単であった。

周囲からは、単に座間が虚空を薙ぎ払つたようにしか見えなかつたが、座間の目には切り離された少女の靈が、白いもやのようになびきながら離れていくのが見えた。

『 ぐぎ、 いいいいいい 』

絞り出すような悲鳴が響き渡る。

ダーキーまでも依り代を失つた三天合形神は、まるで折りたたむようにして突き出した四肢を自身の肉体にぶつけ始めた。

いくつもの鋭い爪が、青黒い皮膚を引き裂いて、自分の中に潜り込もうとしている。依り代を失つた一柱が、残されたたつた一つの依り代である猿に同時に憑依しようとしているのだ。

だが、窮屈そうに自身の内側へと逃げ込みながら、それでも三柱の神は現世から去るつもりは無いのだろう。もう三面でいることはできなくなり、猿の肉体に折り重なるようにして憑依し直していく天部神の姿が座間には見えた。

「 七海ちゃん…… 七海ちゃん…… 」

あおいは座間の腕から七海を受け取ると、必死で声を掛けた。

「 あ……社長…… ? 」

「良かった。七海ちゃん、元に戻ったのね」

「社長……私……」

「話は後よ。今は、アイツをやつすなや。動かん。」

泣き出しうつな表情の七海を制するべ、おこなは半身が蛇のま
まの七海を両腕でぎゅっと抱きしめて囁いた。

「…………」

七海は小さな声で、しかし、せりあつとあこと答えた。

§29 蛇竜（ヘビリュウ）の顯現

§29 蛇竜の顯現

「よし。じゃあ、あとは……真菰専務だけね」

その時、あおいのすぐ脇につむじ風が巻き起こり、次郎坊が透明な着物を脱ぎ捨てるようにしながら、ふわっと空中に現れた。

「どうですか……圓野君、社員は……全員集まりましたか？」

現れた次郎坊は相当消耗した様子で、片膝を付いて荒い息を吐いている。

あおいはすかさず次郎坊の肩を抱き、用意しておいた呪符から次郎坊のエネルギーとなる土氣を注入しながら答えた。

「いえ……まだ真菰専務が……」

「それは困りましたね。切り札の準備は整いましたが、その起動にはあなた達、六人全員が揃うことが必要条件なのです。一人でも欠けていては切り札は使えません」

「しかし……真菰専務は、境界面の消失で大怪我をしたんです。現界に顯現するには、治癒のための時間が必要なのかも……今のところ連絡が取れないんです」

「そうであれば、我々は敗北するだけです」

「そんな……」

あおいが次郎坊を介抱していると、葉子が悲鳴を上げた。

「うめう！」

数秒間と言いながら、三十秒以上も三天合形神の動きを止めていた炎の蛇が、ついに断ち切られたのだ。葉子は悔しそうに両手を振って炎の蛇を回収する。

炎の蛇は葉子の両腕に二とぐるを巻き、生きた蛇のようひきわだかまつた。

「まつたく、愛想がないねえ。こりまでもやつてもダメージらしいダメージは見あたらないじゃないか」

葉子の言う通り、三天合形神は形態こそ変えたものの、禍々しい波動も、放つ光弾の威力も、衰えたようには見えない。それどころか、まるで融け合つたかのように、蛇の鱗と野干の獣毛やキバ、象の鼻を併せ持つた異形の獣へとさらに変化していく。

「これ以上、何に変わらうっていうのー?」

いぶきが悔しそうに叫ぶ。

三天合形神はそれまでの座した姿ではなく、四つ足の獣の姿となつて、ゆっくりと歩き出した。そして赤鬼となつた後藤のそばまで行くと、長い爪を生やした前足で、はたくようにして叩きつけた。

「どうせー！」

両腕を十字に組んで受け止めた後藤の、踏ん張つた両足の下で、

床のコンクリートが音を立て割れた。

「へんおつーーー！」の化け物つーーー」

座間が剣を振りかざして飛びかかるが、動きを取り戻した三天合形神をさらに斬ることは難しい。もう一方の前足で、また弾かれてしまった。

「ぐるるおおおおおおんんんんんん」

異形の獣と化した三天合形神の叫びが、闇に囁いた。

「わつじえぱ……豆田さんは、真菰専務に連絡を取つてくれたのかしら？」

あおいは豆田に来る前、入堂が豆田にしていた指示を思い出した。

「あおいちゃん。

「コイツはね。たしかに、見た目は頼りなさそうなヤツだけど、俺の命令を遂行しなかつたことは、これまで一度もないんだ。大丈夫。真菰さんには、必ず連絡を取つていいるさ」

入堂は、ぐつたりした犬神のそばに座り込み、額に汗を滲ませて全身の氣を送り込みながら、あおいに答えた。

その時。

「おい、なんだあれ？ ネズミじゃないか？」

入堂が、屋上の縁を走る小さな生き物に気がついた。

「まさか……小玉鼠さん？！」

「アオイサン！……『『トシタカ！』』

見覚えのある白っぽい背中のカヤネズミが、屋上の縁から、ひょいと数ジャンプしてあおいの肩に乗った。

「ダメよ……あなたたち、逃げて！……」

人間の悪運ですら吸いきれず、爆死してしまった小玉鼠が、こんな邪悪な気の吹き荒れる場面にいたら、一瞬にして消し飛んでしまうだろう。なにより、今は形勢が悪くなっている真っ最中なのだ。

「ダイジヨウブデス。オーライ！……『『ダ！』』

小玉鼠の頭領が下へ向かって叫ぶ。すると、周囲から何かをひつかくような音が巻き起こり、次第に近づいてきた。

そして数秒後、屋上の全周からネズミの大群が押し寄せてきたのだ。その様子は、ながら黒い津波のようであった。

「小玉鼠さん！……びつする気よ！……」

「ボクタチハ、運ン『テ来タダケデス！……アナタノ家カラ！』」

よく見ると、無数のネズミたちは背中に何か背負つよつとして走っている。ひとつや二つ、背に乗っているのは黒い生き物……アカハライモリのようだ。

「え？ ええ？ なんで？」

突然のこと、あおいは田を白黒させている。

そのうちにネズミ達は次々に屋上の池に飛び込み、イモリをそこに放し始めた。

だが、すべてのネズミがイモリを背負っていたわけではない。ネズミは数千匹もいるようだが、あおいの飼っているイモリは三百匹程度なのだ。

イモリを背負つていらないネズミたちが協力して運んできたのは、なんと、キュウリと酒であった。池の畔にそれを積み上げると、小玉鼠の頭領がその前に座り再び叫んだ。

「ドウゾ!! 準備ハ整イマシタ!!」

すると、池のほぼ中心あたりに、満月が、ぷかり、と浮かんだ。いや、月ではない。月のように輝き、月のように蒼白く輝いてはいるが、月は岸に向かつて動いたりはしない。そしてあおいは、これが何であるか分かつていた。

「お……大河童様!!」

するとすると岸に泳ぎ着き、水面に姿を現したのは、身長80センチほどの河童だつたのだ。赤黒い肌に丸い大きな目。

嘴のように尖った口元。

忘れもしない20年前、あの美しい湧き水のある泉で、祖父・正平と一緒に会つた河童の頭領であつた。

「コノ姿テ顔ヲ合ワスノハ、久シブリジャナ。」

「この姿つて……まさか、私が飼つていたイモリたちは……!?」

「ワシ等ノ依リ代ナノジヤ。黙ツテイテ、スマヌ」

「でで……でも……どういう事！？ どうしてここに？」

「話ハ後ジヤ。義ニヨツテ助太刀スルゾ。イイナ！ オマエ達！」

「オオウ！！」

池の水中から、大勢の河童の甲高い叫び声が響いた。

二十年前のあの夜のように……いや、あの夜よりももつとたくさんの河童達が、もつとずっと素早く、次々と水中から飛び出して来た。中には水中から魚のように跳ねて、陸上に着地するものもいる。そして各々、激しい水流を発射したり、針のような体毛を飛ばしたりして、四つ足獣と化した三天合形神へ攻撃を掛けていく。

「大河童様！！ 退いて下さい！！ お気持ちはありがたいですが、あの化け物はああ見えて、天部神のなれの果てです。河童達の力では……」

大河童はあおいの隣に立ち、悠然とその様子を眺めているが、あおいは心配であった。

「見クビツテクレルノウ、圓野組ノ三代目ヨ。

我ラモハ百万ノ神々ノ端クレゾ。敵ウ相手ト、ソウデナイ相手クライハ分カル。我ラハ直接戦イニ來タノデハナイ。見ヨ」

大河童の指さす先を見ると、水中から飛び出した河童達は攻撃しながら綺麗な円形に展開していく。

「どうやら、攻撃は牽制に過ぎず、何か他の狙いがあるようだ。

「ふむ。これは援護が必要ですね。皆さん…… 河童達の円を守つてください……」

次郎坊は叫びながら、葉団扇を広げ防御の態勢を取る。座間もそれに倣つて葉団扇を持つて立ちふさがつた。左右から一人の天狗に守られつつ、河童達は直径十mほどの円陣を作り出した。

「今ゾ…… 水氣ヲ放テ……」

飛び出した数百匹すべての河童たちが円形を完成させた瞬間、大河童が叫んだ。すると河童達は円の中心へ向けて、一斉に口から息を吐き出した。

いや、吐き出されたのは息だけではない。大きく息を吸い込んでから吐き出された半透明の気体のようなものは、明らかに周囲の大気と濃度が違う。屈折率の違うそれは、水蒸気と混ぜ合わされた水気の固まりであった。

吐き出された水気は地表に留まり、停滞して、まるで重さのないゼリーのように溜まり始めた。数百匹の河童から吐き出された透明な水気は床面を滑り、やがて一つにまとまって、大きな水たまりのようになつていった。

水気は鏡のように周囲の景色を映し、まるで水そのもののよつて波紋を浮かべて揺らいだ。

次の瞬間、波紋がゆっくりと渦を巻き始め、そこに黒い闇がわだかまり始めた。

「これつて…… 陰界との境界面……？」

水気で作られた、直径十mの境界面が現れたのだ。つまり、これ

を通つて陰界から現れるのは、水に關係のある妖物である。

『準備が出来たようですね。大河童様。感謝いたします』

エーハーのかかつたような声が境界面から響き渡つた。この丁寧な男性の声……あおいが聞き間違えようはずがない。

「真菰……専務？」

黒い闇の渦から、まず金色の鼻面が、続けて巨大な牙の生えた口が現れた。一本の角と鬚の生えた頭部、三角形のヒレが生えた背中、紅がかつた金色の鱗が生えた胴体……そして魚のよつな尻尾……。真菰の正体である蛟龍が現世に顯現した。

これまで一度も全身を現したことのないその真の姿は、長年ともに働いてきたあおいも、見るのは初めてであった。

「社長。遅くなつて申し訳ありません」

体長十m以上はあるうかといつ巨大な龍が、空中に浮かびながら真菰と同じ声であおいに話しかけた。

「どうして……？ その姿のまま出てきたら……この地域の気が乱れるつて……」

真菰はこれまで、決してその姿を完全には見せなかつた。

それは、神靈にも等しいほど強大な妖力を持つ蛟龍が顯現することで、土地神や妖怪達をいたずらに警戒させ、地域の氣の流れを大きく乱すことになるからだ。

そのことを、あおいは真菰から何度も聞いていた。

「ここまで大きく気が乱れてしまったのです。

今更、一体くらい神靈クラスが顕現したところで、大差はありません……それに……」

「それに？……何？」

あおいはその言葉に強い胸騒ぎを覚えた。後に続く言葉を聞きたくなかったが、確かめずにはいられない。

「いや、その話は後にしましぽ。

私の身体もまだ完全ではありません。とにかく、すべてはヤツを片付けてからです」

そう言いながら、ひょいと持ち上げた右腕は、無惨に傷ついている。

先刻、西北新聞社の屋上でサラスヴァティと戦った時、急に境界面が喪失したことで傷ついたに違いない。

「真菰専務……」

「そんな顔をしないで下さい。これは、私の不注意から受けた傷です。

むしろ、私という部下のヘマで、伊園さんに『えなくともいい苦痛を与えてしまつたのですから、こういう時は叱りとばすのが上司ですよ?』

「……上司とか、部下とか、どうでもいいのよ。私は、誰も傷ついて欲しくなんか無いだけ!……」

「しかし、この地域の人間達の営みも、小さな命も守りたい……で

しゅう?

でも、この世に何の対価も支払わずに得られるものなどありますまい。あなたはいつも自分自身の命を掛けて戦いを挑みますが、私達も気持ちは同じなのですよ……。

そんなあなたを守る対価は、このへりこの怪我で済むならば安いものです

真菰は、優しく田代おおこを見つめながら囁いた。

「「めんなさい…… ありがとうございます」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5477w/>

妖怪ビオトープ管理士 圓野あおい2「人魚ビオトープ」

2011年11月27日22時49分発行